テイルズ オブ ファンタジア
なりきりダンジョン
上巻
スーパーダッシュ
結城 聖
イラスト／松竹徳幸

主要登場人物

ディオ……いたずら好きで、好奇心旺盛な少年。メルの双子の弟。
メル……世話好きで(ちょっと口うるさい?)、心優しい少女。ディオの双子の姉。
クルール……ディオが拾った謎の生物。びっくりすると、毛が逆立つ。
エリック・フォート……ディオとメルの父。『魔科学』の研究に熱意を傾ける学者。
ファーメル・フォート……ディオとメルの母。高名な画家。ちょっと心配性。
アーチェ……時空の六勇者の一人。ハーフエルフの少女。今も生きているらしい?
クラース……時空の六勇者の一人。研究の末、失われた召喚術を復活させた。
ミラルド……クラースの幼なじみ。クラースの公私を支える女性。
チェスター……時空の六勇者の一人。現代では、"妖精弓の射手"と呼ばれている。
ノルン……謎の精霊。ディオとメルの秘密を知っているらしい。半透明の姿をしている。

装丁/小松　昇(Pencil Studio)

テイルズ オブ ファンタジア

～なりきりダンジョン・上巻～

結城　聖

集英社スーパーダッシュ文庫

Klarth.F.Lester
クラース・F・レスター
Erick.Fort
エリック・フォート
Chester Barkelight
チェスター・バークライト
Formel.Fort
ファーメル・フォート
Millard
ミラルド
Arche Kraine
アーチェ・クライン
Mel
メル
Kruelle
クルール
Dio
ディオ

テイルズオブファンタジア
なりきりダンジョン
二人は役に入り込んでいると見えた——完璧すぎるほど。
「アルベイン流・奥義、虚空蒼破斬！」
「来たれ、神の雷！インデグニション！」
イラスト/松竹徳幸
©藤島康介/NAMCO LTD.

テイルズ オブ ファンタジア

〜なりきりダンジョン・上巻〜

結城　聖

集英社スーパーダッシュ文庫

テイルズ オブ ファンタジア
～なりきりダンジョン・上巻～

CONTENTS

イラスト／松竹徳幸

テイルズ オブ ファンタジア

～なりきりダンジョン・上巻～

1　なりきり師

暗がりから現れた少年は、強化硝子製の壇の上で背を向けて立つ人物に向かい、高らかにそう言い放った。

「魔人よ！　もはやどこにも逃げ場はないぞ！」

少年が、銀の軽鎧の上に羽織った真紅のマントを翻し、これ以上はないという誇らしげな顔を見せながら腰に下げた革製の鞘からすらりと剣を抜き、大仰な仕草で天井に向かってそれを掲げると、何かの照り返しではなく、剣それ自体が鈍く輝いて、両刃の中心ではどういう仕掛けか、赤い光が行きつ戻りつの動きを見せた。

「見よ、魔人！　時空を越えるおまえの《力》は、この《時の剣》——エターナルソードがすでに封じた！　五十年前のときのようにはいかないぞ！」

だが、魔人は振り向かなかった。少年もまた、まるで石化の術を掛けられたかのように剣を掲げたまま動かなくなった。

またひとり、暗がりの中から少年が現れる。

今度の少年は茶の髪を後ろに撫でつけ、鎧らしい鎧もつけず、ただ巨大な弓と矢筒を背に負っている。弓は体の大きさに合わぬ様子で、歩き難そうにしながら剣を構えた少年の後ろにつくと、難儀して矢を矢筒から出し、もたもたと構えた。

「こ、今度こそ、おまえを倒してやる！　この、エ、エルヴンボウからは……ええと……だ、誰も……に、逃げられないぜ！」

　二人目の少年の声は最後で裏返ったが、緊張していて、剣を構えた少年がわずかに眉をしかめたのにも気づかないようだった。全てを言い終わると、大役を終えた、という様子で息をついて、それから睨まれていることに気づいて、あわてて一人目と同じように弓を構えたまま動かなくなった。

「時空転移を封じただと……？」出番が来たかのように、ようやく魔人が口を開いたのは直後である。ぴったりした漆黒の服の上に纏った、金糸で派手な刺繍を施したマントの肩が震えていた。——笑っているのだ。作り物めいた黄金の髪が振り向いた動きに合わせて大きく揺れる。魔人もまた、少年であった。両手を上げると、辺りには雷鳴が轟いて硝子の台座に蒼い光が走り、同時に恐ろしげな音楽が鳴り響いて、魔人をより魔人らしく讃えた。「たった……たったそれだけのことで、もう勝ったつもりか？——この《魔人ダオス》に!!　わずか二人でこの私に歯向かうとは身の程知らずめ！　我が魔術の前にひれ伏すがいい！」

「二人じゃない！」

「何⁉」

少年の声に魔人が驚くと、それが合図であったかのように、暗がりより四人の少年少女がわらわらと現れた。内の三人は少年たちの後ろに立ったが、一人の少女は椅子のついた奇妙な箒に跨り、宙に浮いていた。その柄の先と終わりには、時折、細い糸のようなものが天井に向かって伸びているのが光の加減によって見える。

「……時空戦士の勢揃いか」憎々しげに魔人が言った。「こしゃくな」

「時空の剣士、クレス・アルベイン！」

最初に登場した少年が名乗りを上げると、

「よ、妖精弓の射手、チェスター・バークライト！」

つっかえながら、二人目の少年がそう名乗り、

「一角馬の法術師、ミント・アドネード！」

と、白地に金の巨大な十字架を縫いとった修道服の少女が続く。

じゃらり、と鳴子を鳴らし、

「孤高の召喚士、クラース・F・レスター！」

そう名乗ったのは、少し年長の少年だ。コインをつけた鍔広の帽子を被り、全身に恐ろしげな模様を描いている。

次に口を開いたのは、一同の中で一番年下だと思われる少女だった。

「やみにいき、やみにしぬ……それが、えっと、それが……」
言うべきことを忘れたかのようにくちごもると、クラースと名乗った少年がすぐに何かを耳打ちした。少女は頷き、再び顔を上げると、
「それが、にんじゃ！　ふじばやし・すず、すいさーん！」
と言った。
その一生懸命な姿に、大きな拍手が送られると、真紅の忍び装束の少女は照れたように笑顔になり、それから真面目な顔になって、背中に負った忍者刀を抜いて構えた。
すずちゃーん、と声がかかる。だがそれを圧するようにひとつの声が上がった。
「そして最後が！」
よく通る声で人々の注目を集めたのは、箒の上の少女だった。後ろでまとめた豊かな銀色の髪が揺れる。どこか道化師を思わせる服装で、それだけで真面目一辺倒の周囲の雰囲気をかきまわし、和ませている。
「それがこのわたし！　精霊の森の魔女、アーチェ・クラインよ！」
危うい動きで箒が水平方向に一回転する。それがどうした、と言わんばかりに魔人がマントを翻し、細かな光の粉を辺りに散らした。
クレス・アルベイン――銀髪の少年が《エターナルソード》を構え直すと、五人の仲間もそれぞれ戦闘態勢をとり、魔人と対峙したその様子は、まるで一枚の絵のように、ぴたりとはま

っていた。

「――時空の六勇者、ここに集いたり！」

六人の声が綺麗に重なってそう告げると、割れんばかりの大きな歓声が彼らの左手より上がった。先程とは打って変わった勇壮な曲が奏でられ、晴れがましい今日のこの日の《舞台》に立つ、我が子の名を呼ぶ親の声が、友人を呼ぶ声が、弦楽器や打楽器の音に混じった。

これは劇――『聖樹祭』の最後を飾る、子供たちによる『聖六勇者物語～時空城の決戦～』――その最終幕だ。

一年に一度のこの劇に出ることは、ギース町に住む子供はもちろん、親にとってもひとつの目標である。選考は怨みっこなしのくじ引きで、祭りの一環であれば、演技力は考慮されないのが特徴だった。役によって多少変わるが、応募資格は五歳以上十四歳以下、それだけである。今年は百五十人からの応募があり、選考日には会場に応募者とその親たち五百名以上が集まった。役の中でも、魔人ダオス、クレス・アルベインの二人は男の子に人気が高く、倍率は三十倍だった。女の子人気は、ミント・アドネードが一番で、これは二十五倍。運のみとはいえ、それだけの競争率の中から手にする役である。加えて、ユークリッドやアルヴァニスタといった遠い国の王都からもわざわざこの劇を見る為に訪れる人々も多く、中には大劇場の舞台監督や、役者のパトロン（金銭的な支援者）となるべく金の卵を捜している貴族といった人々もいる、というもっぱらの評判であれば、子供だけでなく、親までもが必死になるのは無理か

らぬことだといえよう。
「さすがに達者だねえ、フォートさん所の二人は」
来賓席のひとつに座った男にそう囁きかけられ、隣の夫妻は薄い笑みを浮かべて会釈をしたが、謙虚に否定することも、お返しの世辞をいうこともしなかった。それは男の言ったことを暗に肯定していると思われてもしかたのない態度ではあったが、夫妻が世渡りに疎い変わり者であると知っている男が、そのことを気にした様子はなかった。
「それに引き替え家の子は……せっかく聖バークライトの役を引き当てたっていうのに、あんなにとちってたらいい笑い者じゃないか」
実際、チェスター・バークライトを演じている少年は、いままで一度も台詞をとちらなかったことはなかったし、所々、芝居の間がおかしくなることもあり、その度に男は頭を抱えたり、身悶えをしたのだった。男の妻は途中まで共に見ていたのだが、休憩時間に席を立つとそれきり戻ってきていなかった。
「しかし、子供たちに負けず劣らず、フォートさんもさすがですね。今年の仕掛けも凄くこってるじゃないですか」
背中から話しかけられ、男は――エリック・フォートはぎこちない笑みを浮かべながらわずかに頷いた。隣で妻のファーメル・フォートが小さく笑ったのを聞き逃さずに軽く睨み、それから再び舞台へと目をやる。

（……確かに今年の舞台装置は特によくできた）

　エリックはひとり、満足を覚えた。五年前から毎年、この劇の舞台装置を一手に手掛けてきた彼であったが、今年は自分たちの双子の姉弟の出演が決まったこともあって、いつになく張り切って様々な仕掛けを考案し、造り上げたのだ。いまのところ、たいしたトラブルも起きてはおらず、観客の反応も上々だった。実は都の大劇場の舞台監督は彼の仕掛けこそを見に来ているのだという噂もあるほどだ。今年の目玉は、これから始まる決戦で繰り広げられる魔法戦である。本物の火と水を使い、これまでにない迫力を出せると踏んでいる。無論、子供たちに万が一でも危険はないように気を配った。我が子もいるのだ。抜かりはない。

　六勇者のリーダー格であるクレス・アルベインの役と、いまもどこかで生きていると噂されているアーチェ・クラインの役をやっているのが、フォート夫妻の子供たち——ディオ・フォートとメル・フォートである。一卵性ではなかったが、銀の髪はもちろん、蒼い瞳も、その顔立ちも、二人はじつによく似ていた。共にまだ十歳だが、舞台度胸は大人も顔負けという評判だった。しかし、一家から同時に二人選ばれることは滅多にないことであったので、何か不正があったのではと取りざたされたこともあった。だがそれは落選した人々のやっかみであり、メルもディオもそんな噂を気にすることはなかった。

『あいつ、別になんか出たくないんだよ。おばさんがどうしても出ろっていうからしかたなく出るんだってさ』

ある日、稽古から帰ったディオが、そんなことを言っていたのをエリックは思い出した。あいつ、とはチェスター・バークライト役のジム・ブラックフォート少年のことだ。

『贅沢だよなあ……やりたくてうずうずしてる奴が、ごまんといるのにさ』

『誰も彼もが劇に出たいと思ってる方がおかしいのよ』と言ったのはメルだった。『応募だって、おばさんが勝手にしたんでしょ？――うちもそうだったけど』

『厭なら断わればいいんだ！』

『ディオ……』ため息をついてメルは首を振った。『みんながみんな、ディオみたいに出来るって訳じゃないんだからね』

『なんだよ！　じゃあメルもやりたくないのかよ！』

『なんでそうなるの？　わたしはねえ……』メルは照れたような嬉しいような顔を、側で口を挟まずに聞いていた両親へと向け、そうしてにっこりとした。『すっごく嬉しいわ！』

　目に入れても痛くない、とは二人のことを言うのだ、とエリックは常々思っているが、どうやら知らず微笑んでいたらしい。妻に肘で軽くつつかれ、顔を引き締めると視線を舞台へと戻した。――もっとも、だらしなく目尻が下がっていたのは、彼ばかりではなかったのだが。

　六勇者を讃える曲が最後に大きくひとつシンバルを鳴らして終わると、来賓席の親たちはおしゃべりを止め、彼らの興味は舞台の上の我が子へと戻っていった。フォート夫妻も同様である。

再び劇は動きだし、クレス＝ディオが、皆より一歩前に出てエターナルソードを魔人ダオスに突きつけるようにした。
「この世界を支える大樹、ユグドラシルを貴様に渡しはしない！」
「あんたなんか黒焦げなんだから！」と吊り下げられた箒ごと、アーチェ＝メルが前に滑るように移動する。
「みんな、これが最後の戦いだ！」
クラース役の少年が言い、全員が、おう、と声を上げた。
（さあ、いよいよだぞ）エリックはわずかに身を乗り出して舞台を凝視した。（ここからが見所だ）
「愚か者めらが！」ダオスが両手を上げる。すると彼の立つ硝子の台座が蒼く輝いて光の柱を創り出した。光の中には、恐ろしげな魔物の絵が浮かび上がっては消えていき、観衆から感嘆の声が上がった。「何が時空戦士だ！　貴様らごとき、我が大魔術で蹴散らしてくれるわ‼」
「ふふん！　この呪文を聞いても、そんな強気でいられるかしらね？」アーチェ＝メルは天井に向かい指を立てた。「いくよっ！――『天空満ちるところ我はあり……』」
「なにっ⁉　まさか、その呪文はっ！」
「呪文だけじゃないぜ！　食らえダオス！――『我が魂の輝きを蒼き刃に変えて魔性を斬る……』」

クレス＝ディオが剣を下段に構え、大業を出す台詞を始めると、合わせるように剣が輝き始めた。アーチェ＝メルの周りでも、小さな光が明滅を始めている。

「凄い迫力だね」

どこかで誰かがそう言ったのが聞こえた。だが――。

（おかしいぞ）エリックは明らかな異変に気づいていた。（あんな仕掛けはしていない）

ディオの持っている剣には確かに光を発するような仕掛けを施してあるが、それは刃の中央のことだけで、全体が光るような仕掛けはなかった。メルにしても、あれほど強い静電気が起こるような仕掛けはどこにもないはずだった。

（どうする――？）

止めるべきか。だが、これからというときに、何の確信もなく劇を止めさせる決心は簡単にはつかなかった。この劇は、エリックのものではないのだ。

「『来たれ、神の雷！――』」

「アルベイン流・奥義――」

大気が震え、何か焦げるような臭いが辺りに漂い始めている。ダオス役の少年が、何かに驚いたように天井を見上げた。すず役の少女は怯えてクラースにしがみつき、ミントとチェスターは何事かと客席を向いた。

「あなた」ファーメルがエリックの腕を強く掴んだ。「あの子たち、おかしいわ！」

妻の言う通りだった。
二人は役に入り込んでいると見えた——完璧すぎるほど。
それが何を意味するのかということを、エリックはついに認めた。そして、席を立つと前の椅子を乗り越え、舞台へと走り出していた。
「インデグニション！」
「虚空蒼破斬！」
ふたりがそれぞれの台詞をそう結んだのと、
「メル！　ディオ！」
と叫びながらエリックが舞台へと駆け上がり、二人に飛びかかるようにしたのは同時だった。メルとディオは無理矢理夢から覚めさせられたような驚いた顔をして父親を見たが、その時『事故』が起こった。
ディオの足元で蒼い光の爆発が起こってそれがそのままダオス役の少年を目掛けて走り、同時に彼の頭上で落雷と同じ規模の放電が起きたのだ！
少年の対応は早かった。転がるようにして客席へと逃げたのがよかった。直後に、彼の立っていた台座は稲妻によって粉々に砕かれ、そこへ蒼光の波が押し寄せ、舞台の左袖を完全に吹き飛ばした！
怒号にも似た悲鳴があちこちで起こり、劇場は逃げ出そうとする人々で、完全にパニックに

なった。
もうもうと上がる埃と木屑の中、エリックは双子を抱き起こした。
「メル！　ディオ！」
だが、姉弟は何が起きたのかまったくわからない様子で、虚ろな瞳をあらぬ方角へ向けるばかりで、もういちど強くゆさぶるとようやくエリックに目を向けたが、その瞳は彼を映してはおらず、それどころか何も見てはいなかった。
二人はそのまま気を失った。
アセリア暦四四〇五年の『聖樹祭』は、こうして混乱の内に終わることとなったのだった……。

「異常なし、と」メルとディオの診察を終えたローカス医師は、聴診器と拡大鏡を、開けたままの鞄に戻すと、机を向いて何かの溶液を垂らした血液の入った試験管を取り上げ、ゆっくりと振った。血液はすぐに乳白色へと変化したが、それ以上は変わらなかった。「ふむ。血脈に悪い虫もいない……実に健康じゃな」
ローカス医師はいつもの癖で椅子を回そうとしたようだった。だが、ここは彼の診察室ではない。椅子は四脚で回るようには出来ていなかったので、医師は危うく椅子から落ちそうになって尖った耳を不愉快そうに下げた。

「先生、健康ってことはないでしょう⁉　この子たちは、昨日から目を覚まさないんですよ⁉」

エリックは、自分と妻のキングサイズのベッドで寝返りを打つでもなく石化したかのように動かない、メルとディオを指し示した。二人は、ゆっくりと微かながら呼吸をしているし、体も温かいので、生きていることは確かなのだが揺すっても叩いても、一向に目を覚ます気配がなかったので、これは医者に見せた方が良いということになり、今朝早くにギース町の開業医であるローカスを呼びにいったのだった。

世の中には『法術』という、時に死者すら蘇らすことができるという治療術があるのだが、これは特定の神を信仰する宗教集団の団員にならなければ受けることが出来ず、入団しても厳しい修行を経た後でなければ治療をしてもらえないため、これまで医術業がすたれることはなかった。まして、この島には教団そのものがなかったので、医者も数軒が院を開いている。

ローカス医師はそれらの医者の中で唯一往診をしてくれることもあって、双子の主治医となっていた。メルもディオもこれまで病気らしい病気をしたことはなかったが、それでも風邪くらいは引くし、わんぱくが過ぎて怪我をすることもあり、そんなときは決まってローカス医師が、町から離れた森の中に建つフォート家を往診してくれ、魔法のように治してくれるのだ。

その彼が、今は首を捻っている。

「じゃがのう、エリック。二人は肉体的には確かに健康そのものなのじゃよ」
二十歳前後の外見とは裏腹の老成した口調で言い、医師は尖った耳の先を僅かに下げた。口調と外見……正しいのは口調の方である。ローカスは、齢すでに二百歳を超えているが、エルフ族の身体特徴である不老のおかげで若いままの姿を保っているにすぎない。もっとも彼は純粋なエルフ族ではなかった。人族とエルフ族との間に生まれた存在――ハーフエルフである。
「こりゃ肉体的な問題じゃない。心の方じゃよ」ローカスは細い指で、はだけられたままのディオの胸をつついた。「過度の負担から精神を守るために一時的に休眠状態に入ったのだろうて」
「だろう、ですか？」
「儂には心の中を覗くことは出来んでの、確実なことは言えん。舞台で事故があったのじゃろ？　その時の恐怖が原因かも知れんな。――そうじゃ、あれが使えるかも知れん！」ローカスは何かを思いついたのか、鞄の中を漁ると、小さな香炉を取り出した。「あったあった。こいつは《快覚香》というんじゃがな。アルヴァニスタで去年《睡魔》が暴れた事件は知っておるか？――なに、知らん？　ふむ。《夢魔》の一種が現れて百人からの人間が眠らされたのじゃよ。その彼らを起こすのに使われたのがこの香じゃ。このまえ行商人から買ったのをそのままにして忘れていたんじゃが……使ってみるか？」
「なんでもいいからお願いします」

双子が目覚めるのならなんでもかまわなかった。
エリックの言葉にローカスは、香炉をベッドの頭に置いて中の三角に固めた香に火をつけた。漂い出た煙は淡い緑色をしていて、霧のように双子の上に広がって、微かな呼吸に合わせて体の中へと吸い込まれる。それを確認すると、医師は鞄から注射器を出し、栄養剤を二人に注射した。
「明日になってもまだ目覚めぬようであれば」ローカスは双子の注射後に酒を染み込ませた脱脂綿を貼り付けて言った。「アルヴァニスタから心療法士を呼んだ方がいいじゃろうて。お前さんの『レアバード』なら、一日もかかるまい？」
「わかりました」エリックは深く頭を下げた。とりあえず、医師は自分の出来ることはしてくれたのだと信じられた。「……先生、昼食をいかがです？　ファムが腕を振るいますよ」
「今日は遠慮しておこう。お前さん達はなにか話し合わねばならぬことがあるのじゃろう？」
エリックとファーメルは顔を見合わせた。図星だった。ローカスの帰りしな、「先生、本当は心が読めるんでしょう？」とエリックは問うたが、彼は薄く微笑んだだけで答えなかった。
二人は医師を屋敷の外まで見送り、ローカスは、双子が目を覚ましたなら香を消すのを忘れずに、と言い置いた。森の中を走る一本道を小さくなっていく背中が木に隠れてやがて見えなくなったが、まるで森に溶けてしまったような錯覚を起こさせるのは『森の民』と呼ばれたエルフ族の容姿のせいだろう。

町へは、徒歩であれば一時間はかかる。それを、馬も使わず徒歩で来るのだからローカスの健脚ぶりは二百歳とは思えぬものだった。変わり者、との評判だが、だからこそ自分達と付き合ってくれているのだろう、とエリックは思っている。なにせその評判は、フォート夫妻にそのまま当てはまるものであったからだ。

エリック・フォートとファーメル・フォートは、この島――フレイランド大陸の南に位置するドレフ島――の元々の住人ではない。それをいうなら、全ての住人が移民者であるのだが、中でも夫妻は最も新しい移住者だった。

ドレフ島はかつて、ドワーフ族というエルフ族と同様の種族が住んでいた島であり、その最後の一人である、ギースという人物が鍛冶屋を営んでいたことで一部では知られていたが、彼が客を選ぶこともあって、島を訪れる者はほとんどなかった。そのような島が有名になったのは、六勇者の伝説が広く流布し、その中においてギースが彼らのために武具を鍛えたことが知られるようになって後のことである。

その頃には、ギース本人はすでに姿を隠し、その弟子たちも世界各地へと散っていたが、彼の家や作業場は残り、ギースが去った後に集まった、彼を鍛冶工の神とあがめる鍛冶職人たちによって、島には小さな村ができていた。

その後、村に残っていたギースの工房が、六勇者の聖地として《ユニコーン教団》によって認定されてからは、島は観光地としても発展した。『聖樹祭』も同じ頃、観光の目玉として始

められたものだった。

『聖樹祭』の由来は、そのまま六勇者の伝説に依る。

伝説では、かつてこの世界に魔人が三度現れ、世界を支える大樹《ユグドラシル》を奪おうとしたとき、六人の若き勇者達が常にこれを退け、最後には聖剣《エターナルソード》を振るって魔人を倒した、とされている。話のほとんどは脚色されたものだが、三度の世界の危機と、これを救った勇者たちがいたことは歴史上の事実である。

なにしろ魔人が最後に現れたのは、わずか五十年前のことなのだ。伝説の通りなら、六勇者の一人、藤林すずは今年まだ六十二歳。生きているのなら、十分話が聞ける年齢である。にもかかわらず、勇者たちの戦いが伝説になってしまったのは、その足取りがなぜか、ほとんど記録に残っておらず、生きた伝説であるはずの、藤林すず、アーチェ・クラインの二人の行方も知れず、かつ、後に書かれた多くの戯曲や芝居によって真実が歪められ、何が本当であったのか、もはや誰にも分からなくなってしまったからであった。

だが、それでも大樹《ユグドラシル》はユークリッド大陸の南に実在しており、勇者クレス・アルベインらが復興したというミゲールの都も現存している。そしてそこは聖地として崇められ、今も多くの巡礼者が訪れている。

ドレフ島を、勇者たちに最高の武具を与えたギースが住んでいた島として、興すことを考えた人々がいたであろう事は想像に難くない。事実、彼の工房はそのまま観光の目玉となった。

彼らの思惑はあたった。現在、勇者たちの面影を残しているとされるのは、ギース工房と大樹《ユグドラシル》の二つだけであり、法術師達から聖地と崇められる場所で俗物的な『祭り』が開かれることはなかったから、『聖樹祭』は大当たりした。勇者たちの伝説を好む人々にとって、島は、ほとんど唯一の好奇心を満たす場所となったのだ。

そんな土地にフォート夫妻が越してきたのは、主に妻のファーメル・フォートの強い希望によるものだった。

二人は元々、王都アルヴァニスタに住んでいたのだが、そこでの人間関係に嫌気がさし、静かで、しかし不便ではない場所というものを探しているときに、ドレフ島の森の中にある古い屋敷の話を持ち掛けられたのである。

ファーメルはその当時から高名な画家であり、ひっきりなしに家を訪れる貴族や商人達の依頼にうんざりしており、エリックの方も当時、アルヴァニスタ王立学院で最年少の教授として名を知られていたが、時代遅れの『魔科学』の研究にこだわっていた為に学会からは異端視されていた。

『魔科学』とは、魔法素（エルフ族はマナと呼称している）とよばれるエネルギーに関する研究で、かつては、魔人に滅ぼされたとされるミッドガルズ王国において最も盛んであった学問だったが、約五十年程前に、突如、魔法素が激減するという事件――《大消失》が起こった後は、机上の空論であるとされていた。

しかしエリックは、《大消失》以前は大気中からほぼ無限に取り出せた、この魔法素にこだわり、研究を続けていたのだが、ついに学院から研究室の閉鎖を勧告されるにいたり、もはやアルヴァニスタに留まる意味が失われたこともあり、妻の提案に賛同した。幸いにして、財は豊かであったことも要因の一つではある。

島は、実際に訪れてみると、祭りの間は騒がしいが、あとはいたって静かであり、森のほとんどが私有地になるということもわかって、二人の望んだ閑静な生活が保証されていた。

元々はアルヴァニスタの貴族の別荘であったらしいその家と土地を買い、二人が移住してきてから十四年の歳月が経っている。越してきたときは二十代後半であった二人も、四十を超える年齢になり、少しは人付き合いも厭わぬようになったが、それは環境のせいではなく、無論、メルとディオという双子を天から授かったおかげだった。子供の事を思えば、世捨て人のような生活に浸っているわけにはいかなかったからだ。双子の成長と共に、自然と町の人との交流も増え、森の奥の変人扱いの評判も、そのうちに、ちょっとした変わり者夫婦、に格上げされた。二人の仕事も町の人の知る所となったが、生粋の貴族などがいないおかげで、煩わしさはあれども不快さはなかった。

双子がいなければ、ローカス医師とも知り合うことはなかっただろう。

エリックとファーメルは家の中に戻ると、夫婦の寝室を覗いて双子が目を覚ましていないことに不安を覚えながらも今は医師の指示の通りにするしかないと思いつつ、居間へいってソフ

アに並んで腰を下ろした。
重々しい溜息をついたファーメルの肩をエリックは抱いた。妻の頭の重みを感じながら、彼もまた小さな溜息をついた。
「……あれは『事故』よね？」自分に言い聞かせるような声だった。「あなたの作った装置が故障して、あんなことになったのよね？」
だが、エリックは首を振った。
「違う。僕のせいじゃない」
「よく考えて」ファーメルは肩の手をほどくと体を離して彼と向き合い、絵筆を握れば素晴らしい作品を生み出す手でいまは夫の腕を掴んだ。「なにか小さな失敗があったんでしょ？　だって、硝子の台座には、発光する装置がついていたじゃない。それが壊れてあんなことになったのよ。そうよね？」
「違うよ、ファム。あれは演出のための装置が壊れたせいなんかじゃない。……わかっているんだろう？」
「いいえ」手に力がこもった。嘘をついている証拠だ。「わかってなんかないわ」
「あの子たちがやったんだ」
「違うわ」
「違わない。あの子たちの『能力』については何度も話し合ったじゃないか？」

「《あれ》と《これ》は次元の違う話だわ」
　さらに手に力がこもり、エリックは、痣になるな、と考えた。
「それに《あれ》を『能力』だなんていわないで。あんなことはただの遊びよ。あなただってやったでしょう？　《おままごと》や《騎士ごっこ》を。あの子たちはただ、演技力があるだけよ」
「ファム。それだけじゃ、いきなり古代文字が読めたり、急に君と同じくらいうまく絵が描けたりするはずはないだろう。それに君の説明じゃ、衣装を脱いだら途端にそれまで出来ていたことが出来なくなる理由は説明できない。あの子たちの中には未知の何かが――」
「実験動物を分析するみたいに言うのはやめて！」ファーメルはエリックを押し離してソファーを立つと、高みから夫を睨みつけた。「神様から授けられた、わたしたちの子よ！」
「悪かった」エリックは両手を挙げた。「……でも、聞いてくれ。僕はあれが事故じゃないことを知っている――それは事実だ。君がそう思いたくないという気持ちも分かるよ。でも、今回、目をつぶって、それで次が起きたら？　その時はどう説明する？　次は『事故』でごまかせる状況にはないかもしれない。その時、あの子たちがどんな目でみられるか考えてごらん？　そうならないようにするための努力を放棄するというのかい？」
「あなたはあの子たちを研究したいだけよ――実の子じゃないから」
「ファム……」エリックは立ち上がると、妻の震える肩に手を置いて首を振った。「僕がそん

なことを、これっぽっちも思っていないことは、よく知っているだろう？」
目にうっすらと涙を溜めたファーメルは、顔を背けて答えようとはしなかった。
ファーメルのいった通り、メルとディオは二人の実の子供ではない。十年前、森の中に捨てられていたのを拾い、育ててきたのだった。二人が見つかった朝は、島全土で流星群が観測された翌日で、ひとつが森に落ちたとの報告があったが、痕跡は発見できなかった。代わりに見つかったのが大きな編籠に入った二人の赤ん坊だった。人が多いといっても、島の事である。祭りの時期からも外れ、観光客もほとんどなかったから、親はすぐに見つかると思われたが、名乗り出る者も、見つかる者もなかった。
孤児院に預けるのが妥当ではあったが、夫妻は二人を引き取ることに決めた。ひとつにはファーメルは子供を欲しがったがエリックは子供が出来にくい体質であったのと、もうひとつは彼女がこの巡り合わせを運命的なものだと信じていることにあった。彼女はよく、「天からの授かりもの」と口にした。幸いにして、生活苦になるようなことも考えにくかったので、役場は養子縁組をすぐに認めてくれた。
以来十年、双子は確かに夫妻の愛らしい子供たちだった――もちろん、いまこの時も。自分を罵ったファーメルの言葉が本心でないことを、エリックはよく承知していた。根底に不安があるのだ。いつか彼らはいなくなってしまうのではないか、という不安が。それが過剰な反応をさせる。なぜなら、双子たちは自分らが捨て子であったことを知っていたからだ。知った、

ではない。知っていた、のだ。誰が洩らしたわけでもないのに、メルもディオもそのことを知っていたのだった。捨て子なの？　と疑問ではなく、捨て子だったんだよね、と確認で問われたとき、夫妻は事の次第を正直に話して聞かせた。それから二度と、双子たちとその話をしたことはない。

メルとディオの不可思議な『能力』に気がついたのは、二人が初等学級に上がって、初めて劇に出たときのことだ。その時のメルの役は『猫』、ディオは『狼』だった。それは動物を擬人化した物語であったのだが、双子たちは《本物になりきって》しまって劇はうまくいかなかったが、その演技力は高く評価された。しかしあまりにうますぎた。他にも、ファーメルの作業着を着たメルが高度な技術の写実画を苦もなく描いたり、エリックのこれも研究用の白衣を着たディオが、できるはずのない機械の組み立てをおこない、二人を驚かせたのだった。

並の親であれば、天才、と喜んだかもしれないが、エリックは二人のしたことが才能だけで出来ることではないと直感した。そしてひとつの説を考えた——二人は何らかの理由で身につけた衣装の人物の情報を入手して、その能力を自分のものとすることが出来るのではないか？

それを聞いたファーメルは、あまりに荒唐無稽な話だと笑ったが、エリックは真剣だった。他人の記憶を手に入れてその人間になりきってしまうという事例は過去にもあるのだ。以来、幾度か話し合ったが、ファーメルは相手にせず、「馬鹿なことをいって、あの子たちを調べようなんて思わないでね」と夫に釘をさしたのだった。

今日まで、エリックはそれを守ってきたし、自分の説を忘れようともした。しかし昨日のことはもはや無視できるようなものではなかった。なぜなら――

「ファム」エリックは妻の肩を掴んだ手に力を込めた。「メルは《魔法》を使ったんだぞ」

手の下で、妻の体が強張るのがわかった。

「……そんなはずないわ。だって、あの子たちは人間よ。ローカス先生も、そうおっしゃってたじゃ――」

「ああ、そうだ。だが、間違いないんだよ。僕はあれから野外劇場を調べた。すると破壊された台座からは、高い魔法素残留値が出た。つまりあれは《故障》ではなく、《魔法》で破壊されたということだ。……あの子の唱えた呪文を憶えているかい？　台本とは違っていた。それはそうだ。本物の魔法の呪文だったのだから。『神の雷』――あれは、ダオスを退けたという呪文だよ。エルフが編纂した『呪文大全』で調べたから間違いない。メルはあの時アーチェになりきっていた。だから呪文を知っていたんだ」

「だからって魔法を使えることにはならないわ！　だって魔法はエルフ族にしか使えないはずよ!?」

それがエリックにもわからないところだった。魔法とは、魔法素を種々のエネルギーに変換して物理的な破壊を生む術なのだが、その変換は、魔族を除けば、エルフ族の血を引く者にしか出来ないはずなのだ。

魔法素を機械的にエネルギーに変換する技術をエリックは確立していたが、しかし『神の雷』ほどの電気エネルギーを生むとなれば、野外劇場がふたつは入るほどの変換器が必要だった。そしてそのように大きな変換器をエリックは持ってはいない。

双子たちがエルフ族の血を引いていないことは、ローカス医師によって確認されている。間違っていることは絶対にない。なぜなら、エルフ族は同族を見誤ることが絶対にないからだ——それがどんなに薄い血のつながりであろうとも。

しかし、メルは使ってみせた。ディオにしても、メルが『神の雷』を使ったと考えるならば、少年がやったのは台詞そのままの『アルベイン流・奥技・虚空蒼波斬』だろう。

エリックは首を振った。「魔法を使えた理由はわからない……あの子たちの出生になにか関係があるのかもしれない。だが、そんなことはいいんだ。問題なのは、へたをすればあの子たちの命が危険だ、ってことだよ。先生が言っていただろう？ 過度の精神的な負担があったと。それはきっと、高度すぎる魔法や術を使ったせいだと思う。僕らはあの子たちの『能力』を認めて、それを正しく使うようにしてやらなくてはならない。……それが親の務めじゃないか？」

ファーメルはうつむいた。「……あの子たちがどんな『能力』を持っていたとしても、学会に発表したりしないって誓える？」

「もちろんだよ。あの子たちを見世物なんかには絶対しない」

「わかった」ファーメルは夫の背中に腕を回すと、深い溜息をついた。「あなたを信じるわ」
エリックは妻を抱きしめて、ショートの青みがかった銀の髪を撫でてやった。
寝室の方で、人の起きだす気配がした。

「なりきり師？」
ディオは聞いたことがない、といった様子で首を傾げてメルを見たが、彼女の方も小さく首を横に振った。
双子たちが目を覚ましてから、半月が過ぎていた。目覚めてすぐはひどくだるい様子で、ベッドから起き上がるのも億劫な感じだったが、二日も経つと普段と変わりなく過ごせるようにまで回復した。すぐに来てくれたローカス医師も、大丈夫だといってくれたが、ただひとつ、今回の『事故』の恐怖がなんらかの精神的な後遺症となる可能性はあるので、気をつけるようにといわれたのだが、半月の間に特筆すべき症状は見られなかった。
子供たちが回復すると、エリックはそれまで棚上げにしていた問題に着手した。あの劇での『事故』の原因の説明と、責任をとることである。エリックはまず、『聖樹祭』実行委員会本部に出向いて、演出のための装置に欠陥があったことを認めて謝罪し、今後はその任を辞退することも伝えた。さらに怪我をした人々の家を回って謝罪と十分な治療費を渡し、特に同じ舞台に立っていた子役の家族には、今後とも双子たちと仲良くしてやって欲しいと頼みもした。観

光協会にも足を向け、あの『事故』で発生した損失の全てを保障すると申し出もした。フォート家が資産家であることを町で知らぬ者はいなかったので、それらが言葉だけの絵空事とは誰も思わなかった。エリックの対応も早く、誠意あるものであったので、今度のことは『不幸な事故』ですでに収まる気配を見せていた。人々の中には、来年もエリックに劇の舞台演出を頼みたいと言ってくれる人もいたが、エリックは未練を残さず固辞したので、その態度がまた、潔いと人々に好感を与えた。

その間に、ファーメルは工房に籠って何かをやっていたようだったが、双子たちには秘密だった。もっとも創作を始めてしまえば、ほとんど姿を見なくなるのはいつものことであったので、双子たちの気にするところではなかった。

メルもディオも、春休みが終わるとちゃんとギース町立初等学校へ戻っている。二人とも、この夏には卒業であったから、休んでなどいられなかったし、休む理由もなかった。二人が一時、意識不明であったことはすでに子供たちにも知られていて、『事故』のことで同情されることはあっても、いじめられたりすることは、いまのところないようだった。

今日は、二人が学校に戻って初めての安息日である。特に予定もなかった二人は、それぞれの部屋で時間を過ごしていたところをエリックに呼ばれたのだった。両親は居間にいてテーブルに並んで座っており、メルとディオは二人の真正面に座ることになった。午後のお茶、というわけではないらしく、テーブルの上には紅茶も焼きたてのクッキーもなかった。

「夏になれば、おまえたちも卒業だね」とエリックはそう切り出し、ファーメルは隈の浮いた顔を子供たちに向けてにっこりと微笑んでいた。「初等学校を卒業したら、皆それぞれ新しい路へと進む。ほとんどの子供はどこかの工房に入って職人を目指したり、商家に住み込んで働くことになる。……おまえたちが望めば、アルヴァニスタやユークリッドといった都の王立学院へ留学することも出来る。いまよりずっといい環境で勉強することが出来るんだ」

勉強、と聞いてディオは「うえっ」と言い、メルの顔も心なしか曇った。二人とも成績は悪いというわけではなかったが、さりとて遠い国に留学してまで何かを学ぶ、という熱意を持てるほどの目標にはまだ巡りあっていなかった。

ならばどこかの工房や商家に入って修業をする気かといわれれば、そういう目標も特にはない。

しかし何にしても、卒業までにはなんらかの答えは出さなくてはならなかった。級友のほとんどは春休み前までにすでに進路を決めている。良い工房は募集の人員も少ないし、入房試験も厳しい。家業をそのまま継ぐ者もいる。どちらにしても、卒業しても何もせずにいる子供などはドレフ島にはいないし、それは恥ずかしいことだった。

「ディオ、おまえはどうしたい？」

「オレ？……えーと」ディオは頭を掻いた。「別に何もないや」

「メルはどうだい？」

「わたしも」とメルは肩をすぼめた。「まだ決めてないの」
エリックとファーメルは双子の答えに顔を見合わせ、そして頷いた。
「……実はな、メル、ディオ。パパたちにひとつ提案があるんだ」
提案？　とディオが訊いたのと、なに？　とメルが言ったのは同時だった。双子は互いの声に相手を見て、それから両親の方を向いた。
「二人とも、自分たちには他の人にはない『能力』があるっていうことに気がついているかい？」エリックは双子たちを交互に見て言った。「とても素敵な『能力』だ。上手に使えば、とても人の役にたつ」
「パパ、役者になれっていうこと？」とメルは訊いた。「そりゃ、わたしも自分でも少しは上手いかな？　と思うけど、でも別に、都のおっきな舞台に立ちたいとは思わないわ」
「違うだろメル。役者が何の人の役に立つんだよ」
「あら、ディオ。素敵な劇は人の心を癒すわ。十分役に立つわよ——ね、パパ？」
「メルの言う通りだね。——おっとディオ。でもパパたちはおまえたちに役者になれと勧めてるわけじゃない。……まあ、それもひとつには含まれるだろうが」
「全然わかんないよ」とディオがいうと、メルも頷いて同意した。「オレたちの『能力』って、いったいなに？」
「なりきることだ」唐突すぎたか、双子たちは首を捻った。「あーつまり……おまえたちは、

着た服に合わせて、その職業や人物の能力を発揮することが出来るんだよ」

双子たちはまったく同じ顔を――苦笑をした。明らかに信じていない顔だ。

エリックはひとつ咳払いをした。「そうだね……たとえば、メル？　ママの服を着て、絵を描いたことを憶えているかい？」

メルは曖昧に頷いた。「夢の中の出来事みたいだったけど、憶えてるわ」

「それがこの絵だね」

エリックはテーブルの下から三〇×三〇の油絵の小品を出した。それは町の風景の一部をそのまま切り取ったような見事な絵で、しかもそのタッチはファーメル・フォートのそれに非常によく似ていた。

「恥ずかしいよ、パパ……」

メルは頬を赤らめてうつむいたが、次にエリックが出したものを見ると、恥じらいなどかなぐり捨ててそれを奪おうとして果たせなかった。

「パパ、駄目！」

「いいじゃないか、メル」

エリックが掲げ持ったのは、明らかに子供の絵といった程度の技術の絵であった。構図や題材の選び方に才能の片鱗を感じる、とファーメルは評したが、技術がまだ身についていない。

「これ、どっちもメルが描いたの？」ディオは訊いたが、そんなことは少しも信じていないよ

うなのは確かだった。「ぜんぜん違うじゃん。ママとメルが描いたっていうならわかるけど。それとか、ママの今の絵と昔の絵、とか」
「ふむ。じゃあディオ、これは？」エリックは絵を二枚ともテーブルの下に戻すと、変わりに一冊の分厚い本を出して、息子の前に置いた。「読めるだろう？」
革装丁の本の表には、金文字で何か書いてあったが、とうてい字とは思えないもので、こんな物が読めるはずはなかった。中を開いてみると、同じような絵とも記号ともつかない印が羅列されている。
「読めないよこんなの。これ、本当に字なの？」
「これはね、高等古代文字、ハイエンシェントワードと呼ばれるものだよ。遠い昔に滅びた文明が使っていた文字だ。——ところで、これ、なんだと思う？」エリックは本の後ろを開いて、畳んで挟んであった紙を取り出した。黄色く変色していて、古いものだとわかる。四折りになったそれを開くと、中には幼い子供の字で、何かが書かれているようだった。「いいかい？　この紙にはこう書いてある——『極電磁波による遺伝子変質』『転移装置使用時において、物質の再構成の際に生じる誤差が、再構成後の生物の遺伝子を変質させることは確認されているが、原因のひとつとされる極電磁波の存在については』——とね。何のことかわかるかい？」
ディオは首を捻った。

「そうだろうな。パパにもわからない。この本は学会で賞を貰ったときに、アルヴァニスタの王立図書館から貰ったものなんだが、まあ盾みたいなものだから書斎の床に別に気にせずに置いておいたんだけどね……ある日パパが入っていったら、おまえがパパの白衣を着てこれを書いていたんだ」

「嘘だあ」

「本当さ。……ママは信じなかったけど」エリックは妻をちらりと見た。「でも、白衣を脱がせるともう読めなくなっていた。で、パパは思ったんだ――この子たちには特別な『能力』がある」

　メルとディオは互いの顔を見合わせた。どう反応したらいいのか困っている様子だった。ありがとう、というべきなのか、ばかばかしい、といえばいいのか。

「ええと、パパ……それで、何？」と言ったのはメルだ。「どういうこと？」

「つまり」エリックは自信たっぷりに双子たちを見た。「パパはおまえたちのために新しい仕事を思いついたんだよ！」

　ファーメルが隣で小さく拍手をしたが、双子はのってこなかった。

「つまり……どういうこと？」

「つまり、いざというとき、おまえたちはとても役に立てる、ということだよ。例えば誰かが怪我をして、でも医者がいないというときでも、アルヴァニスタ王立病院の医師の制服を手に

入れていれば簡単に正しい処置が出来る。大事なお客を迎えての宴会の時に料理人が急病になったとしても、その料理人の服を着れば同じように素晴らしい料理をつくることが出来る。パパはその素晴らしい仕事に『なりきり師』と名付けた」

「なりきり師？」

ディオはなんだそれ、といった様子で首を傾げてメルを見たが、彼女の方も小さく首を横に振った。

「ようするに、どんな職業にも《なりきれる》技師だから『なりきり師』だ」

「これが制服」そう言って、ファーメルは椅子の脇にあった紙袋をテーブル上に置くと、なかから二着の服を出して広げてみせた。「こっちがメルで、こっちがディオね」

メル用のそれは、厚手の黒のタイツにピンクのショートブーツ、黒い縦ラインが二本入ったノースリーブのワンピースに、特徴的な形のジャケットがついている。ブーツと同色のジャケットは、背中部分はコートのように長いのだが、前は胸の少し下までしかない短さで、肩の所が丸く刳り貫かれていて肌がむき出しになっており、そこを含めて全ての縁に金糸で縁取りがされていた。

ディオ用のそれは、裾に行くにしたがって膨らんだ黒ライン入りのズボンにライムグリーンのショートブーツ、袖のないハイネックの黒のシャツにメルのと似た形の、ブーツと同色のジャケットがついている。ディオのジャケットは、メルのそれよりも後ろのマント部分が長く、

肩から袖にかけての金糸の縁取りに沿って、黒ラインが入っていた。
どんな生地なのか、なめらかな素晴らしい光沢を持ち、近づけば顔が映るのではないかと思えた。メルもディオも思わず見入った。
「これはパパからだ」エリックが出したのは、鸚鵡を模した紋章の黄金のバッジだった。「ただの飾りじゃないぞ、これは。なんと、世界で初めての『なりきり師』の紋章だ。もちろんママが彫金したんだが、中の仕掛けはパパの作だ。これにはおまえたちの日々の健康状態を記録する機能がついている。服を着替えてもこのバッジだけは付け替えるように。いいね？　すでにギースの職業組合には登録申請を出した。アルヴァニスタやユークリッドやベネツィアの組合にも特別郵便で申請した。これで――」
「ちょっと待って、パパ！」と止めたのはメルだった。「わたしたち、まだやるともなんともいってないわ」
「あ、ああ……そうだったね。ごめんごめん、年甲斐もなく興奮してしまったよ」エリックは頭を掻いて、椅子に座り直した。「それで……どうだい？」
「こんなこと急に言われて、それで、すぐ決めろなんて無理だわ。だって、この先、一生の問題でしょう？」
「うんまあ、それはそうだね……」
「パパとママが一生懸命考えてくれたのはわかるけど――」

「いいじゃんか、メル。オレは賛成だぜ」
「ディオ」メルはくるりと体を半回転させると両拳を腰に当てて睨んだ。「もっとよく考えなさいよ。わたしたちの一生の――」
「『なりきり師』になるなら、オレたちいっしょにいられるじゃんか」
ディオのまるでプロポーズか何かのような言葉に、メルは言葉を飲み込んだようだった。
「ディオ、わたし……」
「……それに、修業だってしなくていいんだから、こんな楽なことないし」
「それが本音ね！」
「おっと！」
振り上げられた拳が頭に届く前に、ディオは服とバッジをひっ摑んで逃げ出して、あっという間に姿が見えなくなっていた。
「まったくもう……あんなんじゃ、あいつひとりに仕事を任せるなんて出来るわけないじゃない」メルは小さく嘆息した。「しょうがない奴」
そうは言ったが、メルの声音に楽しげな響きが隠しきれずにいるのを、エリックもファーメルも聞き逃してはいなかった。
（これでいい）エリックは内心で胸をなでおろしていた。（組合には、戦いに関係のある依頼は全て断るように申請してあるし、何を受けるかは僕とファムで決められる。この子たちに

も、戦いに関係するような服を着ることは禁止事項だと強く戒めておけば、もう二度とあんな『事故』はおこらないだろう。少し仕事をすれば《なりきる》ことの功と罪はわかるはずだ）

テーブルの下で、ファーメルが手を伸ばして膝をさするようにしてきた。エリックはその手に自分の手を重ねると、優しく握りしめてやった。

数日後、ギース職業組合から、申請を認可する旨の書類が届いた。

アセリア暦四四〇五年、四月二十日――この日、世界で初の、そして唯一無二の新たな職業――『なりきり師』が誕生した。

2　クルール

十日ぶりに帰った我が家の様子を眺めて、メルは「しかたないわねえ」というように息をついたが、その背中からは、そこはかとない嬉しげな心情が隠し切れずに滲み出ていた。
(やっぱりわたしがいなくちゃ駄目なんだから)
どこか荒れた感じのする部屋を見ていると、つくづくそう思うのだった。埃の積もりかたを見れば、一週間は掃除がろくに行われていないことがわかる。それは、両親が共に部屋に閉じこもっていることを意味した。こうなると、無理矢理に引っ張り出したとしても、邪魔になりこそすれ、役に立つことはないとわかっている。メルは着替えもそこそこに、ジャケットの袖を捲り上げて、手際良く部屋を片づけはじめた。
ディオはとっくに逃げ出してしまっていて、いまごろは森のどこかだろう。
二人は昨日まで、熱砂の大陸と呼ばれるフレイランドの数少ない村のひとつ、オリーブ村へ出かけていたのだった。村の祭りのために呼んだサーカス団からの依頼が届いたのが十四日前。内容は、怪我をしたり病気になったりした団員の代わりをして欲しいというものだった。

衣装を用意して出かけたのが二日後。リハーサルはたった一度しか行わなかったが、ふたりは道化師やら調教師やらになりきって無事に十日間の興行を終えることができたのだった。
「いや、さすがは噂の『なりきり師』だ。助かったよ」
団長は喜び、契約時に決めた金額よりも多くの金貨を払ってくれた。こうした時、二人は遠慮はしないことにしている。雇い主が余分に払ってくれるお金――チップは、そのまま二人の小遣いになるからだ。『なりきり師』として稼いだ賃金は、一旦、組合に預けられ、そこから斡旋料を引いた額が、エリック・フォートに支払われるようになっている。二人はその中から給料を貰っているのだが、両親の勧めもあって使わずに貯めており、自由になるのは月々貰う少ない小遣いだけであったので、そうしたチップはとてもありがたいのだった。
二人が「なりきり師」の仕事を始めて、すでに三年が過ぎていた。
メルもディオも、この夏に十三になっている。
いまでこそ《なりきる》ことにも慣れた二人だが、始めてしばらくは勝手が分からず、寝込んだこともあった。なりきっている間は、出来ないなどとは少しも思わず、実際、頼まれたことについてそつなくこなすことが出来てしまうのだが、なれない高度な《なりきり》を行った場合は、自覚がなくとも体と心の両方に相当な負担がかかってしまい、一旦服を脱げば、それが一気に噴出して、時には意識を失うこともあった。
だがこれは、段階を踏んで体と頭を慣らしていけば大丈夫である、と経験からわかったの

で、二人は時間があれば衣装を着けて体を慣らすということをした。例えば三星シェフになりきってフルコース料理を安全に仕上げるには、まず町の食堂のコック見習いの服を借りて慣れ、次に正式なコック、レストランのコック、高級レストランのコック、同コック長——と言う具合に進め、最後に三星シェフの服を着れば、ストレスなく仕事をこなせ、料理の後で倒れるようなこともない。

いまでは二人とも、ほとんどの職業の衣装に体を慣らしており、その道の達人になりきることが出来るようになっていた。出来ないのは、戦いに関することと、誰か特定の個人になることのふたつだけである。

このふたつに関しては、依頼そのものを受け付けていない。前者はエリックが禁じているからであり、後者の依頼を受けないのは不可能だからだった。例えば三星レストランのシェフとして有名なライン・カートレアの服を借りたとしても、《なりきる》ことができるのは、彼の腕前や料理の知識だけで、カートレアの人格などはなぞることはなかったし、できなかった。

それがなぜなのかは、いまもってわかっていない。

エリックは、この三年間の双子たちの身体データを大量に記録していたが、結果が増えていくばかりで『なぜ』の手がかりはまったくないと言ってよく、『能力』の解明にはほど遠かった。

なぜ——なぜ、自分たちはこんな事が出来るのか……ディオはほとんど無頓着に力を甘受し

ているようにメルには思えたが、彼女自身は近頃、その理由を知りたいと思うようになっていた。ディオには言っていないが、北半球の北ユークリッド大陸の北端にある、ベネツィアの都で耳にした声がきっかけだった。

「普通じゃないよな」

ある依頼をこなした自分たちを遠巻きに見ていた誰かの言葉だった。メルはその夜、眠れなかった。確かにそうだ。普通の人族には決して真似することの出来ない《なりきる》という『能力』――これはなんなのか？　改めて気付づいてしまえば、目を背けてはいられなかった。

しかし、不安や劣等感を抱いたわけではない。目を背けられないのは、強い好奇心のせいだった。

自分を知る――これ以上に好奇心を刺激する謎があろうか？　そもそも、自分たちが人族であるかどうかも疑わしい。流星群のあった夜に拾われたのだから、生みの親が本当に人族であるのかもわからなかった。エルフ族の血は流れてはいないようだが、だからといって人族とは限らないのは、この世界には、エルフ族を初めとする多種多様な種族がいたという事実があれば当然言えることだった。

メルはその日から、仕事の合間を縫って、あちこちの都の図書館で、時に『学者』の衣装を着て古代文字で書かれた本なども読み漁り、過去に自分たちの出自を求めた。

だが、いまだに答えを見つけられてはいない。
ひとつの可能性として、いまも遺跡として残っている超魔科学古代文明《トール》の末裔ではないかと考えたこともあったが、残っている文献からは《なりきる》力を持っていたとする記述はなかった。
自分の胸の内にわいたその好奇心については、ディオは無論のこと、両親にも告げてはいなかった。自分の出自を求める行為は、ディオはともかく、なんとなく両親への裏切りのような、恩知らずのような気がするのは確かだったからだ。
(ディオはこの《能力》について、本当の所、どう思っているんだろう?)
そのことについて、ディオと話し合ったことはない。話してもどうせまじめには答えてくれないだろうし、とメルは思う。
(あのくらいの年齢の男の子って、とにかくがさつだから)
と考えるメルもディオと同い年なのだが、どうしてもディオの子供っぽさばかりが目についてついつい『お姉さん』の役割を演じてしまうのだった。
(別に、評判の『いい子』でいようとか思ってるわけじゃないけど)
そう思いつつも、片付ける手は止まらない。
メルとディオは今では、以前にも増して、町でも評判の姉弟になっていた。片や高名な画家、片や有名な学者という夫婦の養い子であるという理由だけではない。今は何より、町の、

子を持つ親たちの『我が子にはこうあって欲しい』という目標にされているのだった。
きっかけは、町役場が発行している機関誌だった。『理想の男の子』『理想の女の子』という特集が組まれたとき、内容にぴったりな子供ということで、フォート家は数日取材を受けたのだが、それが載った途端、大反響があったのだった。家には連日、どうすればうまく子育てが出来るのか知りたがる親たちが押しかけてきて、困ったことになったのを憶えている。しかし両親は元々、人付き合いが得意な方ではないから、これには閉口して、引っ越しを真剣に考えたこともあったらしい。そうしなかったのは、役場の方で人々が押しかけるのを禁じてくれたからだ。
「毎年高額な税を納めてくれるフォート家に出ていかれちゃあ、役所は大損だからな」
とはローカス医師の弁である。
とにかく平和は戻ったのだが、それ以来、メルとディオの二人には『子供はかくあるべき』というレッテルが貼られたのだった。この春の『聖樹祭』でもメルとディオは『理想の子供』として二年連続表彰されている。その盾はこの部屋のどこかに埋もれているはずだった。フォート家にとって、そうした世間の評価は、その程度の価値しかなかった。
（でも、女の子は『優しくておしとやかでよく家の手伝いをする』のがよくて、男の子は『とにかく元気で正義感が強くそれでいて気は優しい』なんて古いわ。今が、飛行機もない昔ならわかるけど。……それとも、親が子供に望むことなんて、何百年たってもかわらないってこと

かしら)

そこまで考えて、メルはあることに気がついて小さく笑った。

(その理想にぴったりだって選ばれるってことは、わたしたちが古くさい人間だってことじゃない。……やあね、もう)

メルは軽く首を振って、掃除に気持ちを入れた。

テーブルの上には乾いて茶渋が染みになってしまっているカップがいくつも重ねられて、町のなじみのレストランが配達してくれるピザの空箱が五つほども重ねられていた。冷めてチーズの固まったピザが何切れか残っていて、下の方の箱に残ったものには黴が生えていた。

両親がそろって工房に閉じこもることは滅多にないことであったし、それこそ七年ぶりの事だったが、メルはその時の悲惨な数日を楽に思い出せた。

(あの時は危うく飢え死にするところだったのよね)

食べ物が尽きて二日後、ローカス医師が訪ねてくれて事無きを得たが、その後、両親は医師にこっぴどく怒られていた。なにしろ広い森の奥の一軒家なのだから、六歳の子供二人ではどうする事も出来なかったのだ。以来、二人同時に籠る事はなかったのだが、今度は定期的にピザを取るという知恵をつけたようだった。

(こんなんでよく、わたしたち、『理想的な子供』に育ったわよね。フォート一家の七不思議だわ)

ディオが聞いたら「他の六つはなんだよ」とつっこむところである。実際には他の六つなどなく、なんでも七不思議にしてしまうのはメルの癖だった。
だが、謎ではある。
フォート夫妻は他の世の親同様に、二人が幼い時分に、逞しい男の子に、とか、優しい女の子に、とかのお定まりの台詞を聞かせたことはあったが、言ってしまえばそれだけだった。フォート家はどちらかといえば放任主義であったから、もし世間が言うように、二人が理想の子供であるのなら、それは親の手柄ではなく、単にメルとディオが元々そういう人間であったに過ぎなかった。
(家のお手伝いをよくする、優しい良い子か……いつもいつもいわれてることだけど、なんかひとごとなのよね)
メルは黴びたピザをつまみあげると、塵袋に器用に投げ入れた。
フォート家の敷地内にある広大な森の路を走りながら、ディオは久しぶりの解放感に浸っていた。十日ぶりにようやく家に帰ってきたのだ。羽を伸ばしたって罰は当たらないだろうに、家の中の惨状を見た途端、メルの目がいきいきと輝いたのに気がついて、同い年の姉が何かをいう前にとっとと逃げてきたのだった。
(メルが『理想の女の子』をやるのは勝手だけど、こっちまで掃除やら洗濯やらにつきあわさ

れたんじゃたまんないぜ）ディオは拾った枝を振り回して、赤く色づき始めた葉を叩いて進む。（男はこう、がつーんと外を飛び回らなきゃ。家の中でちまちましてるなんてのは、男じゃないよな）

　男は元気が一番、というのがディオの考えだった。両親もそうだし、世間も、そうあるべきだと事ある毎に言っているし、その通りだと思っている。男の子なら、毎日でも外を走り回って泥だらけ傷だらけになって、夕方になって家に帰って怒られるくらいでなければ駄目だし、大人になっても、休みになったら自然の中へ飛び出して、釣りをしたり狩りをしたりして過ごすべきなのだ。

（パパはちょっと女っぽいよな）とディオは思う。（部屋に籠って本ばっかり読んでるなんて『男』らしくないよ。……でも、森の中を弓を持って走り回るパパなんてぜんぜん似合わないけど）

　ふらふらしながら弓を振り回して猪を追いかける養父の姿を想像して、ディオはひとりにやにやした。思えば一度だって父息子で狩りに出かけたことなどない。フォート家の森には野兎やら野鳩などが多くいて、その気になれば良い狩場として楽しめるのだが、ごくたまにディオが狩りをする以外は、手入れもしない自然のままだった。

（今日は山の方へいくか）木々の隙間に見える、少し大きな丘、といった程度の山を見上げて、ディオはそう考えた。もちろんそれもフォート家のものだ。そろそろ栗が熟す頃合だっ

た。たくさん拾って帰れば、メルは大喜びでマロンパイを作るだろう。こんがりと焼けたパイ生地の中の、堅めのカスタードクリームの中に入った甘く煮た栗の実の味を思うと喉が鳴る。
（決まり！　今日は栗拾いだ！）
決断をすればディオは早い。枝を放り捨てると、裏山へと細い路を駆け出した。ジャケットと一体のマントが木の葉を巻いて翻り、その動きにおどろいた鳥が枝から飛び出していくが、ディオの目には入らない。息も切らさず十分も全力で走り続けると、路は斜面へと変わった。やがて二股に別れる細い方の路をいく。その先は広場になっていて、そこに屋敷の窓からでも見えるほど大きな栗の樹が立っているのだった。
マロンパイで頭を一杯にしたディオは、はずんだ気分で広場に飛び出したが、次に目に飛び込んできた光景に驚いて足を止め、しかし、勢いがついていたので思うようには止まれずに転がり、一回転してそれから顔を上げてわなわなと震えた。
「な、ななな……なんだよ、これ！」
確かに栗は熟していた。鋭い刺のついたイガのほとんどが、短い下生えの繁った地面に落ちている。
——だが、空だった。
全てのイガは割られて、中の実は消えていた。両親が拾ったということは考えられない。この栗の樹はディオのものだった。五歳の誕生日に貰って以来、毎年の栗拾いはディオの役割だ

ったし、それを奪い取るようなことをする家族ではなかった。
（ちきしょう！　栗泥棒かよ！）
乾いた地面を怒りに任せて殴り付けると、転がったときにくっついたのだろう、小さなイガが、ころりと落ちて手に、さく、と刺さった。痛っ、と叫んで払いのけると、ぷつぷつと滴のように血がにじんだ。血を嘗めとり、息を吹いて乾かす。そうしながら辺りを見回すと、奇妙なものがディオの目を引いた。
（足跡、か？）
靴ではない。何か獣の足型だった。形だけなら、兎の後ろ足に似ている。しかし奇妙なことに、前足らしき跡はどこにもなかった。これが鳥であれば相当な大きさだが、肉球らしき跡も残っているので、鳥だとは思えなかった。ならば、あと考えられるのはバグベアやリザードマンといった獣人だが、そうした怪物がこの島で見つかったという報告はこれまでなかった。
（でも、これまでなかったからって、これからもないとは限らないよな）
ディオはそろそろと立ち上がると、辺りに気を配った。この栗泥棒はまだどこかに潜んでいるかもしれない。足跡の間隔を見る限り、足は短そうだったが、足の大きさを考えると体は意外と大きいかもしれない。
（ちぇっ。あの枝、捨てるんじゃなかったな。とりあえず、家に戻ってなんか武器を持ってこなくちゃ。イガを投げつけたって、たいした攻撃にはならないだろうし）

それでも、袖の折り返し部分を伸ばして、ディオは割られて中身を持ち去られたイガを三つほど拾った。そうして、そろり、と後ろに下がったその時——

「わあっ!!」

バサリと背中で藪が分かれる音がして、ディオは振り向く暇もなく巨大な影に乗りかかられ、地面に押し倒されていた。うなじに触れる毛が、相手が巨大な獣か獣人だと教えてくれた。

恐怖に、汗がどっと噴いた。

はらりと目の前に落ちた毛は、鮮やかなエメラルドグリーンをしていた。

玄関の方で、がたがたと騒がしい音がして、それだけでディオが帰ってきたのだとわかったメルは、片付けの手を止めて玄関へと向かった。掃除はあらかた済んで、家の中はようやく出発前の状態に戻った。そこへまた汚れを持ち込まれてはたまらない。

(どうせまた泥だらけなんだから)

土やら枯葉やらを撒き散らかされる前に追い出して、外で汚れを落とさせないとまた仕事が増えてしまう。

「メル！　メル！」

と呼ぶ声はやはりディオだ。メルは嫌な予感がした。ディオがこんな風に興奮して自分を呼ぶ時は、決まって何か生き物を見つけたときなのだ——それも虫を。

別にディオは意地悪をしているわけではない。自分が嬉しいことはメルも嬉しいに違いない、と思い込んでいるだけなのだ。それがわかるから、余り邪険にする気にはならないのだが、巨大な蜘蛛を何度も持ち込むのだけは勘弁して欲しいと思うのだった。

「あ、メル！」

「今日は何を見つけてきたの、ディオ？」ため息混じりに言ったメルは、しかし彼の手には何もない事に気がついた。「あれ？　また虫とか見つけたんじゃなかったの？」

「へへっ、ま、見つけたってのはあってるけど、虫じゃないんだな、これが――おい、入ってこいよ！」

　ディオが開け放したままのドアに向かってそう呼びかけると、

「うきゅ？」

　という、何とも愛らしい鳴き声がして、見たこともない動物がおずおずと姿を現したのだった。

「裏山の栗の樹のところで見つけたんだ。こいつ頭いいんだぜ。言葉がわかるみたいでさ。オレの子分にするんだ！」

「な、なに勝手なことといってるのよ。こんな大きな動物、勝手に連れてきたりして、パパとママに怒られるわよ？」

「なあメル」ディオはにやにや笑いを浮かべた。「そんな格好で言っても、ちっとも説得力な

いぜ？」

確かにディオの言う通りだった。彼が連れ帰った動物を一目見るなり、それに飛びついて腕が回りきらない胴を抱き締め、ふわふわの毛皮に顔を半分うずめたのでは。

その獣は、全身がエメラルドグリーンの毛皮に覆われていて、体高は一mほど。横幅も同じくらいで体型はとにかく丸く、その体に、短い手足とあるかなしかの尻尾、寝かせた長い耳、そしてブラックオニキスを塡め込んだようなくりんとした瞳がついていて、生きたぬいぐるみ、という表現がピッタリな動物だった。ぬいぐるみが大好きで、自分でも造ったりするメルが、心を動かされないでいることなど、できるはずもなかった。

「でも、メルがだめだっていうなら捨ててこようかな」

「だ、だめよ！」

「だめなの？　そっかーじゃあ裏山に――」

「いじわる！　捨てちゃ駄目っていってるの！　だ、だって、もう連れてきちゃったんだし、可哀相じゃない！　そ、そうよ。もう拾っちゃったんだから、しかたないわよね、うん。これで捨てたりしたら、ひどい人間だもの」

「なんか無理やりだなあ」頭の後ろに手を組んで、ディオは笑顔になった。「屁理屈も理屈だ、ってこと？」

「うるさい！」メルは手近に転がっていたイガをつまみあげてディオに投げつけた。これは外

れて壁に当たって床に転がった。「……ねえ、この子の名前、どうしようか？」
「もう考えてあるんだ」
「可愛い名前じゃなきゃいやよ」
「大丈夫さ！　こいつ、尻尾の裏に小さな星の模様があるから『スターロード・グレート』っていうのは――」
「却下」
「は、早……」
「だって可愛くないんだもの。わたしだったらそうねえ……」
「クルール！」とその動物は鳴いた。
「え？」
「クルール！　クルール！」
「こいつ自分が、クルール、だって言ってるのかな？」
「まさか。いくら頭がいいっていったって……」
「クルール！　クルール！」
「クルール、がいいの……？」
「うきゅきゅきゅ！」
「チェリーポピンズとかじゃ、だめ？」

「うきゅ〜」元々垂れた耳がさらに下がった。
「やだってさ」ディオが言った。「いいじゃん、クルールで。自分でそう名乗ったんだからさ」
「そうね……まあ……そこそこ可愛いからいっか！」メルは再びクルールを抱きしめると、ふわふわした抱き心地を楽しんで、とろけたような表情を浮かべた。「ふふっ、よろしくねクルール！」
「おいメル、忘れんなよ。そいつはオレの子分なんだから――」
「しーらない」
メルは、ぷいと横を向くと、ますますそのぬいぐるみのような動物を強く抱きしめた。

「うわっ、なんだこれはっ！」
それが、クルールを見たエリックの最初の反応だった。研究が一区切りついて部屋の扉を開けたら、巨大なぬいぐるみのような動物が立っていたのである。あとずさり、踵をしたたか本の角にぶつけたのも当然だった。
「クルールっていうのよ。――ただいま、パパ」
ぬいぐるみ動物の後ろにしゃがんでいたのだろう、メルとディオが顔を出した。
「オレが裏山で見つけたんだ！……ねえ、飼っていいよね？」
「飼うって、ディオ、メル……こんな動物、パパは知らないぞ？」

「パパの持ってる事典には載ってないの？」
「まあ、載っているかも知れないが……」
「じゃあ、調べてみようよ！」
「わかったわかった」エリックは降参した。こうなってしまえば、メルもディオも決して引かないことはわかっている。なにしろ好奇心の塊のような双子たちなのだ。「パパはとにかくシャワーを浴びてくるよ」
「そういえばパパ、臭ーい」
「三日も閉じこもっていたからね。当然だな」
「当然じゃないわよ、もう」
メルはエリックの背中をついて追い出すと、部屋から新しい着替えを出してきて彼に押し付け、中の片付けを始めたようだった。ディオとクルールと呼ばれた動物は、終わるのをおとなしく待っていることにしたようだ。
（でかいハムスターみたいだな）廊下を歩きながら、エリックは緑色の毛皮の動物のことをそう評した。（なにか病原菌を持っていたりしないかどうか、後で調べる必要があるな）
浴室にいく前にファーメルの工房の扉を叩いて双子たちが帰ってきたことを告げ、それからシャワーを浴びた。三日ぶりの入浴で、こびりついた汚れと脂を落とし、裸のまま外に出ると、目の下に隈の浮いた妻が立っていた。

「おはよう、あなた」
夕方近い時刻の挨拶としてはおかしかったが寝ていたのだろう、エリックは同じように返事を返して、さっきまでの自分と同じように脂じみた頬にキスをした。
「双子たちが帰ってきてるよ。なにか変なものを連れて帰ったから、君も早くシャワーを浴びておいで」
「うん」
ねぼけまなこを擦りながら服を脱ぐ妻の傍らで、濡れた体を拭い、新しい服を着て、櫛で髪を整えて部屋に戻ると、片付けは済んだようだった。扉と窓が開けたままになっていて、風が澱んだ空気を洗い流してくれていた。
「パパ、『全世界動物図鑑』ってどこ?」本の山に頭を突っ込んでいるメルが訊いた。顔を上げてはいないが、おそらくは足音でエリックが戻ったことがわかったのだろう。「それと『絶滅動物事典』も捜してるんだけど、見つからないの」
ディオはクルールと共にベッドにあがって、メルのことなどお構いなしにじゃれあっている。
「メル、それはそっちじゃないよ。こっちの山だ。——ほら、あった」
エリックは別の本の山から分厚い二冊の本を取り出し、ベッドに腰を下ろした。メルが山から顔を出して横に座ると、ディオもふざけるのはやめて、メルとは反対の側に座った。クルー

ルはベッドの端でおとなしくしていることにしたらしい。壁に寄りかかり、黒く丸い瞳をあちこちに向けていた。
「パパ、載ってる?」
「まあ、まちなさい」
エリックはとりあえず齧歯類の載っているページを開いて端から見ていった。この本には、二十日鼠やリスのような小動物はもちろん、スノーバニーのような『怪物種』と呼ばれる生物についても記載されており、これに載っていない動物は絶滅した動物だけ、といわれるほどだった。だが、どのページを見ても、クルールだと思われる生物は見あたらなかった。
そのうちに、ファーメルも着替えを済ませて部屋に来、双子たちにおかえりなさいのキスをして、それからクルールを見て、これ? と訊いた。少しも驚いた様子がない。エリックは妻の感性を、少し不公平だな、と思いつつ、他の項目も調べたが、やはりどこにも該当するような動物の記載はなかった。
そこで今度は『絶滅動物事典』の方を調べていったが、結果はこれも同じだった。
「まったく新種の動物かも知れないな」
「危険はないの?」ファーメルは口とは裏腹にクルールの喉をくすぐっていた。「噛みついたりとか、病気を持ってるとか」
「病気についてはこれから調べるよ」

「痛くしないであげてね」とメルが膝に乗りかかって言った。「……今晩、この子といっしょに寝ていい？」
「病気がないってわかったらね」
「この子、なにを食べるのかしら？」今度は耳の後ろを掻いてやりながら、ファーメルは言った。「やっぱり木の実とかそういうのかしら」
「鼠類なら雑食じゃないのかな？」背中にのしかかってきて首に腕を巻き付けているディオの手を軽く叩いて、エリックは本を閉じた。「今日のところはミルクと、後は適当にお腹に良さそうなものをあげてみよう」
「そうね」
「ママ。今晩はなに？」
「あなたたちが帰ってくるって知らなかったから、ピザが届くはずなんだけどそれでいい？明日はちゃんとつくるから」
「わたし、ピザ好き！」
「オレも！」
声を揃えて双子がそういうと、まるで、自分もそうだと言うように、クルールは
「きゅー！」
と鳴いた。

3　ノルン

　メルが目を覚ましたのは寒さのせいだった。パジャマの隙間から忍び入った夜気に小さく体を震わせると毛布を引き上げて巻き付け、だが何かを思い出したように体を起こして辺りを見回した。

　部屋の中は蒼暗く、レースのカーテン越しに射し込む月明かり以外、照らすものはない。机やテーブルの上に並べられたぬいぐるみたちの中に、動いているものはないか、とメルは探した。夜に玩具は動き出す——そんな話を信じていたのは昔の事だ。そうではない。メルは生きたぬいぐるみを探しているのだ。

　つまり、クルールを。

　一通りの検査で病気を持っていない事がわかったので、一緒に寝てもいいという許可が下りてメルとディオは壮絶な争奪戦を繰り広げた。結果、部屋の片付けをしたという功績が認められて、メルは最初の夜を共に過ごす栄光を授かったのだった。

　共にお風呂にはいってさっぱりとして、ベッドに入ったのは十時過ぎだ。真ん丸の体は抱き

しめるのにちょうど良い大きさで、顔に触れる毛は柔らかく、獣の臭いではなく石鹸のいい香りがして、すぐに眠ってしまったのだった。
「クルール？」
小さく呼び、返事を待ったが応えはなかった。
枕元の時計を見ると、午前一時を回っている。もういちど部屋を見回し、扉が僅かに開いているのに気がつき、メルはぴんときた。
(ディオね)
そう確信した。クルールが扉を開けるとは考えにくい。だとすれば、ディオが連れ去ったに違いなかった。
ランプに火をつけ、メルはパジャマの上にカーディガンを羽織って部屋を出た。ディオの部屋は居間を挟んで屋敷の正反対の側にある。この家は家族四人で暮らすには広すぎる、といつも思うのだが、夜はなおさらだった。
廊下を曲がった時、向こう側に人の影を見つけてメルは思わずぎょっとした。驚いた拍子にランプがかちんと鳴って、人影の方も驚いたようだった。
「……なんだ、メルかよ」
声はディオだった。メルからは見えなかったのだが、彼女はランプを持っていたので、向こうからは誰かわかったのだろう。

「ディオ」メルは驚いた様子はひた隠してディオに近づいていった。「クルールを勝手に連れてくなんてずるいじゃない」
「はあ？　なにいってんの？」眠そうな目をこすりながら、ディオは小さく欠伸をした。硬い髪の毛が今は一段と跳ねている。「メルが連れてったんだろ？　どいてくれよ。トイレにいくんだからさ」
「とぼけるの？」
「だから知らない——って、ちょっとまった。いないのか？」
「しらじらしい」
「バカ！　ほんとにオレじゃない！」ディオは嚙み付かんばかりの勢いで言った。「探さなくちゃ！」
慌てるディオに、ようやくメルも彼の仕業ではないと認めた。となると、クルールは自分で扉の取っ手を捻って出ていった事になる。頭がいいとはわかっていたが、そこまでとは考えなかった。
メルはまず、玄関の扉を見にいった。鍵はかかったままだった。内鍵もかけられたままになっているから、ここから外には出ていない。窓を、と振り返った時、ディオがファーメルの工房の扉を開いて、中を覗きこんでいるのが見えた。
「ディオ、だめよ！」

小声でメルはたしなめたがディオは聞かず、それどころか彼女を手招いた。「いた！　いたよ、メル！」

そう言われては、無断で入る事を禁じられている場所でも、行かないわけにはいかなかった。しゃがんだディオの背中に乗りかかるようにして扉の隙間から中を覗くと、確かにそこにクルールはいた。油絵具の匂いが鼻をつく。あちこちに描きかけの絵がイーゼルに載ったままになっていて、工房の中央には以前の屋敷の持ち主が残していった大理石で出来た巨大な『世界樹の精霊・マーテル』の像が鎮座している。クルールはその女性像の前にいた。黒珠の瞳を上げ、天窓から差し込む月の光に浮かぶ像を見上げている。

その姿はどことなく神々しくもあり、声をかけるのを躊躇わせた。と——

「わあっ！」

「いたっ！」

悲鳴を上げて飛びのいたディオの頭に強か鼻を打たれ、二人はそのままバランスを崩して後ろに倒れた。目から火が出た、とメルは思った。鼻の奥、頭の真ん中辺りが、つん、とする。ディオがいったい何にそんなに驚いたのか、メルは見ていなかった。クルールを見ていて、それだけだった。

「お化けだあっ!!」

そのディオの声は屋敷の外にまで響いて、鳴き交わしていた虫たちの声をぴたりと止ませ、

眠っていた鳥の目を覚まさせた。

目を覚ましたのは鳥ばかりではない。エリックとファーメルもまた、ディオの声に目を覚まし、すぐに二階の寝室を飛び出していた。騒ぎは階下からだ。ディオとメルの争うような声が聞こえる。

二人は急いで階段へと向かった。降りる途中で手摺り向こうの玄関広間を覗くと、ファーメルの工房の前で双子はもつれあって倒れ、互いに相手をどけようともがいている様子だった。他には何者の姿もない。

「メル、ディオ、どうした!?」

階段を妻よりも一足早く駆け降りたエリックは、二人を引き剝がし、メルの肩を摑んで軽く揺すってそう訊いた。

メルは首を振った。「わかんないの。ディオが急に――」

「お化けだっ！」体当たりをするように、ディオがエリックの背中にしがみついてきて、ぶるぶると震えた。「お化けが出たんだ！」

どこに？　と遅れて降りてきたファーメルが問うと、ディオは工房の中を指差した。見れば、扉が僅かに開いている。その隙間からは青黒い闇しか見えなかった。

エリックとファーメルはメルとディオを背中に隠すようにすると、工房の扉をそろそろと押

し開け、そして——凍りついた。
　そこに《それ》はいた。
　マーテル像から滲み出たような、巨大な鳥の翼を背中に生やした、半ば体の透けた女性の幽霊——だろうか？　宙に浮かんで一家を高みから見下ろしている。表情は穏やかだが、どこか仮面を思わせ、長い髪と一枚布を巻いただけのように見えるドレスの裾も、風もないのに常にふわりと揺れていた。幽霊だとすれば人族ではない。人にはあんな翼はない。目の色ははっきりとしなかった。色などないのかもしれない。
　像の足元でクルールが、黒い瞳を同じように一家に向けていた。
　ごくり、と鳴ったのは誰の喉であったのか。まるで合図だったかのように《それ》が不意に口を利いた。
「わたしは幽霊ではありません」よく通る美しい声だった。「あなたがたに危害を加えるつもりもありません。わたしはノルン——この世界の言葉で言うのなら《精霊》に近い存在です」
　精霊、と聞いてエリックは少し恐怖が薄らぐのを感じた。幽霊も精霊も超自然の存在には違いないが、人は、幽霊は恐れ、精霊は畏怖する。エルフの考えはまた違うようだが、人にとってはそうだった。しかし、ノルン、という精霊の名は聞いた事がない。エリックは探るようにノルンを見たが、表情からは何も読み取る事は出来なかった。
「ディオ……メル……」色のない瞳を、透かすようにエリックの背中の子供たちへとノルンは

向けた。「わたしはこの日を待っていました」
「待って、た？」と気丈に訊いたのはメル。「わたしたち、を？」
「そうです」
声に引かれるように、メルとディオがノルンの前に出ようとしたのを、ファーメルが抱いて止める。その瞳には、連れ去られてなるものか、という決意が滲んでいた。ノルンが双子たちにとって危険へ誘う存在であることを、母親の本能で嗅ぎ取ったのだろう。
ノルンは少し寂しげに微笑んだが、ファーメルに構う事はなかった。
「――ふたりとも、よくお聞きなさい。あなたたちの未来は、今、暗い夜の海へと続いています。それはあなたたちが知らぬ、あなたたちの過ちの為。やがてあなたたちは、その黒き運命に飲まれるでしょう」
ファーメルの腕の中で、双子は体を堅くし、彼女はノルンを更に憎々しげに睨みつけた。ノルンの言葉は、聞きようによっては死の宣告ともとれる。黒き運命というからには、決して楽しいものではあるまい。
「冗談じゃないわ」母は双子を抱いたまま、呪うように言った。「この子たちが知らないこの子たちの罪ですって？　そんな訳の分からないことで、この子たちの未来を奪おうなんて許さないわ」
「同感ですよ、ファーメル・フォート」ノルンは薄い笑みを浮かべた。「だからこそ、わたし

は現れたのです。いま、二人は黒の運命定理の中にあります。このまま何もしなければ、やがて恐ろしい結末を迎えるでしょう。しかし、未来は常に不確定です。メルとディオがこのまま黒き運命と共に果てるか、それとも輝かしい未来を手に入れるかは、二人が本当の自分を取り戻す事が出来るかどうかにかかっています。そのためには、メル、ディオ……あなたたちは、ふたりだけで『魔女の塔』へ向かわねばなりません。塔の最上階にいる人物が、あなたたちの未来への扉を開く鍵を握っています」

「ち、ちょっと待ってくれ！」エリックは言った。「魔女の塔だって⁉　それは、ユミル大陸の〝あの〟魔女の塔の事か⁉」

　ノルンは微笑したまま頷いた。

「冗談ではない！　そんなところへ子供たちを遣れるものか！」

　誰であれ、そう考えるのが当然だった。

　エルフ族の故郷といわれるユミル大陸西部の『水郷ユミルの森』の側に、いつの頃からか建っている『魔女の塔』と呼ばれる尖塔には、貴重なエルフの宝の数々が眠っているが今は絶滅したと信じられている《怪物》たちが今も潜んで、それを守っているとされているのだ。実際、多くの冒険者が挑み、悉く退けられているという噂は、ギースの町の酒場にも届いている。そんな場所へ子供たちを二人だけで遣るというのは、狼の群れに赤ん坊を投げ込むのと同じことだった。

「危険過ぎる！」

「なら、この子たちの本当の心が、このまま壊れていくのをただ待ちますか？」

「えっ⁉」思ってもみなかった言葉に、エリックは驚いた。「ど、どういう意味だ？」

「エリック・フォート、ファーメル・フォート……あなたがたは、メルとディオが余りにも『理想的な子供』であると考えたことはありませんでしたか？——そう、まるで、絵に描いたようだ、と」

エリックはいままで、そんなことを考えた事は一度もなかった。

確かに二人はこれ以上ないほど『男の子らしい』し『女の子らしい』。だが決して『良い子』というわけではなかった。成績にしても、飛びぬけて出来たというわけではなかったし、ディオは『男の子らしい』いたずらにかけては天才的だった。決して理想的とはいえぬ。

それを言うと、ノルンは微笑んだ。「わたしの言い方が悪かったようです。わたしが言いたかったのは、あまりに『らしい子供』ではないか、ということです。エリック、今あなたが言った通りに。まるで与えられた役のように」

「いったいどういう——」しかしエリックには閃く事があって、はっとノルンを見た。「まさか……」

「そうです」ノルンは頷いた。「この子たちは、あなたがたがこの子たちのためにあつらえた服を着て、あなたがたが望んだ男の子と女の子に《なりきっている》に過ぎないのです。メル

とディオの本当の心は、感情は、二人の知らぬ二人の罪のために封じられています。しかしそれも限界に来ています。《本来の自分》と《なりきっている自分》の間に生じた歪み……軋轢に魂が堪えられるのはあと僅か」

「限界を超えたら、どうなるんだ……？」

「魂は崩壊し、消滅します。天国へ行くことも生まれ変わることもない……ただ消え去り、残るのは肉体の抜け殻だけ」

ファーメルは体を震わせ、双子を強く抱きしめた。

だが、二人は話の内容が分かっているのかいないのか、どこか他人事のような表情を浮かべて何も言おうとはしなかった。

まるで衣装を脱いだばかりの時のようだ、との考えがエリックの脳裏に浮かんだが、彼はそれを振り払った。

月が陰り、不意に部屋に闇が降りた。

「メル……ディオ……」ノルンの姿が揺らぎ、輪郭が薄れはじめた。「このまま黒き運命に身を任せて残りの時間を安穏に過ごすか、未来を得るために危険に身を投じるか、それはあなたたちの自由です。わたしは塔の最上階で《彼女》と共に待っています。あなたたちが《彼女》の元へ辿り着いた時、何をすればよいのか話しましょう」

「待ってくれ！　お願いだ、僕も付き添わせてくれ！」

「それは許されません。しかし」ノルンは色のない瞳を足元のクルールに向けた。「この獣であれば許しましょう。この子もまた、秘めた力を持っています」

「いったいどんな力が――」

エリックは言ったが、最後まで訊くことはできなかった。

ノルンは闇に溶けるように消え、後には、マーテルの像が夜を見上げているばかりだった。

数時間後、メルとディオは眠るクルールを間に挟んで背を預け、ひとつのベッドの上で膝を抱えてすわっていた。

二人とも、パジャマ姿で、ディオは『星』、メルは『四つ葉のクローバ』の模様が散らされた、ファーメル手製のものだ。二人とも、このパジャマが大のお気に入りだったのだが、ノルンの話を聞いたあとでは、気分は複雑だった――この服に《なりきらされている》のかも知れないのだから。

そのノルンのした話について、二人で話そうと言い出したのはメルだ。ディオは部屋に引っ張られてきたのと同じだったが、結局、どちらもほとんど口を利かずに時間だけが過ぎていったのだった。

クルールは二人の間で黒珠の瞳を閉じて、ゆらゆらと揺れながら眠っている。

「……どうすんだよ？」

ようやくディオがそう訊いたのは、もう、窓の外で夜の色が薄紙を剝がされるように淡く白く変わっていく明け方近くだった。じきに森の木々の頂の向こうに太陽が昇るだろう。いつもなら爆睡中だったが、今朝は眠気などぜんぜん感じなかった。

「メルが『話しあわなきゃ』っていうから来たのに、ずっと黙ったままじゃんか。どうせ何か考えてるんだろうけど、答えは二つしかないんだよ――ノルンが言ってただろ？　行って未来を勝ち取るか、行かないでぶっこわれるのを待つか」

「やめてよ」低い、震えるような声だった。

「……泣いてんのかよ」

「泣いてなんかないわよ」鼻をすする音がした。「泣くわけなんかないでしょ。そうだとしたって、どうせ『泣いてるわたし』って役になりきってるだけなんでしょ」

ディオはクルールによりかかったままで、メルの方を向こうとはしなかった。顔を見られたくないだろう、と思ったからだった。

「そのことだけどさ……本当だと思うか？　オレたちがパパとママの思う理想の子供になりきってるだけなんだ、って話」

「……わかんない」

「じゃあ、メルはパパとママが好きか？」

「あたりまえでしょ」

「オレだって好きさ。……でも、これも『なりきってる』自分が感じてることなのかな……」
　メルは答えなかった。
「……メル。オレ、とりあえず『魔女の塔』に行ってみたい。危険なのはわかってるけど、オレが守るからさ、いっしょに行こう。それで確かめよう」
「……それで『本当の自分』がすごく悪い奴だったらどうするの？　それで、パパとママに嫌われて、捨てられたら？——本当のパパとママがわたしたちをそうしたみたいに」
「パパたちがそんなことするわけないだろ」だが、そのディオの声には、どこか力がなかった。「……するもんか」
「でも」メルはまた鼻をすすって言った。「わたしたちが壊れちゃったら、パパとママは、わたしたちが悪い子になるよりずっと悲しむよね」
「……うん」
「じゃあ、行くしかないじゃない」メルはふっと息を吐いた。「……悲しませるより、嫌われた方がずっとましよ」
　そのとき陽が昇り、部屋には曙光が溢れた。
　光の中で振り向いたディオは、白い輝きの中で、確かにメルが決意を固めたのを見た。
「おまえたちなら、そうするだろうと思っていたよ」とエリックは言った。「パパたちの子供

なら当然だ」
　だが、隣に座るファーメルの顔は白く、口は真一文字に結ばれて色を失っていた。眠っていないのだ。双子たち同様、夜通し話し合ったのだ。その中でファーメルはエリックを『ひとでなし！』と罵り、手近にあった缶を投げつけて、その痣が彼の額に浮かんでいた。
「パパもママも、あのノルンとかいうおかしな精霊の言ったことを全部信じているわけじゃない。けれど、おまえたちに不思議な能力があるのは確かだ。僕らがおまえたちのために作った服だけが影響を与えないなどということは、確かに考えにくい。……そのことに、ぜんぜん思い至らなかったんだから、パパはダメ学者だよな」
　メルもディオも、なにもいわずに首を横に振った。
「本当はパパたちもついていきたいが、足でまといになるだけだろう。そのかわり――」エリックはテーブルの下から衣装箱を出して二人の前においた。「これを使いなさい」
　開けてみるとそれは――
「パパ、これって戦闘衣装じゃないか！」
　エリックは頷いた。「エルダーさんを知ってるだろ？　あの人は昔、傭兵団にいたんだそうだよ。十一歳の時にはもう、各地の実戦に参加したらしい。これはエルダーさんが初陣のときに使っていたものだそうだ」
　箱の中に入っていた衣装の内のひとつは、古いがよく手入れをされた革鎧一式と、地味な

革の鞘に入った鉄剣だった。
「エルダーさんは見習いの時分にこれを着て戦ったそうだよ。だからディオ、おまえが着れば同じように戦えるはずだ」
「これはじゃあ、わたしの……？」
　メルが衣装箱から取り出したのは、葡萄酒色をした長袖のワンピースのような服だった。それに縁無し帽子と肉厚のマントがセットになっているらしい。水晶をはめ込んだ杖もいっしょだった。
「それはローカス先生のお母さんの持物だったそうだ。エルフ族の子供が魔法を習うときに初めて着るものだそうだよ。本当はそれに箒がつくんだけど、ずっと前に燃えてしまったそうだ」
「箒なんてどうするの？」
「空を飛ぶんだよ――まあ、迷信だろうけどね」エリックは薄く微笑んだ。「けれどそれを着れば、メル……おまえは魔法が使えるようになるはずだ」
「まさか」メルは苦笑した。「いくらなんでもそれは無理よ、パパ。だって、わたしたちにはエルフ族の血は流れてないんだから」
「確かにそうだ。でも、使えるとパパは確信しているよ」
「どうして？」メルは服の不思議な手触りを楽しむように撫でながら訊いた。「なんでそう思

うの？」
「おまえたちが参加した『聖樹祭(せいじゅさい)』の劇(げき)を憶(おぼ)えているかい？」
「忘れるわけないよ」ディオは、薄い鉄の上になめした革(かわ)を張(は)り付(つ)けた胸甲(きょうこう)の表を軽く叩(たた)いて、肩(かた)をすくめた。「大騒(おおさわ)ぎだったもんな。パパの事故(じこ)のせいで——いてっ！」
どうやらメルにテーブルの下で蹴(け)られたらしい。ディオは彼女を睨(にら)んだが、メルは知らぬ顔だった。
「あれは事故なんかじゃなかったんだよディオ」
「へえ。じゃあ、何だったの？」
「『虚空蒼破斬(こくうそうはざん)』と『神の雷(インデグニション)』……おぼえているかい？」双子は頷(うなず)いた。「そう。おまえたちのやったクレス・アルベインとアーチェ・クラインの『技(わざ)』だ。あの時おまえたちは二人の勇者(ゆうしゃ)に《なりきり》そして——」
「あっ！」と声をあげたのはディオだった。「まさか！」
エリックは頷いた。「パパはそうだと思っている。おまえたちは本当に『奥義(おうぎ)』と『魔法』を使ったんだとね。だからこそ《なりきり師》ではいっさい戦いに関する依頼(いらい)は受けなかったし、おまえたちに衣装を着ることも禁じたんだ」
「じゃあわたし、本当に魔法が使えるの」
「パパはそう考えている」

「すげえや、メル！」
「ディオにだって使えるはずだよ。ときどきは衣装を交換してみるのもいいかも知れないな」
「うん！」
ディオは大きく頷くと、鞘から鉄剣を抜いてつくづく眺めた。
「わたしは反対だわ」
その場を一瞬にして凍てつかせる、ファーメルの声だった。呪うような、といってもいい。メルもディオもたちまち表情は曇り、手にした服をテーブルに戻すと、怒られた犬のように頭を垂れてしまった。
「ファム。さんざん話し合ったことじゃないか」
「危険すぎるわ」ファーメルは夫を睨みつけた。声が静かなだけに、よけいに怒りの大きさが窺い知れた。「あなたもそういってたじゃない。そんなところへこの子たちを行かせるなんて……この子たちは、まだ子供なのよ？　やっぱりわたし——」
「ママ」
「聞いて、ママ」
取り乱しかけたファーメルの心を、双子の声が引き留めたようだった。彼女は、夫の服が皺になるほど強く掴んだ手の力を緩め、子供たちの方を向いた。
「確かめたいんだ」ディオはファーメルを真っ直ぐに見て言った。「とにかく『塔』に行っ

て、もう一度、あのノルンとかいうのに話を聞いてみる。それがすんだら、そのあとどうするにしたって、一度、帰ってくるから。だから行かせてよ。それに、絶対無理をしないって誓うよ」

「お願い、ママ！」

沈黙が降り、やがて、ファーメルは深いため息をついた。

「……好きになさい」

そういい残し、力なく立ち上がると、母はそれきり双子を見ようともせず、部屋を出て行ってしまった。

ディオは追おうとしたが、その手を掴んでメルは首を振り、彼はおとなしく従った。

「ママにはもう一度、パパからよく話すよ」エリックは無理やり笑顔をつくった。「クルールもいっしょに行くなら、レアバードを調整しなくちゃならないな。特製の座席も必要だし。二日はかかるから、その間に少しその衣装に慣れておくといい。……さっきはああいったが、魔法を使えるかどうか先に試しておいた方がいい」

メルは深く頷いた。

「クルールクルール！」

そう鳴き、どう見ても頼りになるとは思えない緑の獣が短い足でエリックの前に出、これも短い手で腹の辺りを軽く叩いた。その仕草は、まるで「まかせておけ」と言っているようで、

エリックはその頭を撫(な)でてやった。

「二人を頼むよ、クルール」

クルールは、うきゅ、と鳴くと、短い尻尾(しっぽ)で床(ゆか)をぱたんと叩いた。

4　戦闘

八日後、二人と一匹は空の上にいた。
エリックが座席を改造して、二人と一匹で座れるようにしてくれた反力型個人用飛行機械『レアバード』で、『魔女の塔』へと向かっているところである。
否、正確には『魔女っ娘の塔』というらしい。
すでに一度は挑んだのだが、塔の入り口奥の第一扉が機械的にでなく、まったく別の方法で封印されていて、中に入る事が出来なかったのだ。
そこで彼らは、封印を解く方法を捜してアルヴァニスタの都で情報を集め、近年では唯一塔への侵入に成功した女性冒険者がいるということを知り、彼女——A・Bがいまフレイランド大陸で『炎の塔』と名が残っている場所を捜していると聞いて、フレイランド最大のオアシスを有するオリーブ村へと向かった。
これが、六日前。
だが、A・Bはすでにどこかへ旅立った後で、以後の足取りは掴めなかった。しかし彼女が

よく通っていたという道具屋『テンダロイン』で、彼女と仲良くなったという、マリーという女性から話を聞くことが出来た。彼女は、以前サーカス団の依頼をこなしたメルとディオのことを憶えていて、A・Bとの思い出を快く話してくれた。
彼女の家で、オアシスの水で冷した果物を頂きながら『魔女の塔』のことを訊くと、彼女は少し首を捻った。
「あのことかな?……わたしが聞いたのは『魔女っ娘の塔』のことだけど」
「魔女っ娘、ですか……?」
メルとディオは顔を見合わせた。『っ娘』がついただけで随分と印象が違う。恐ろしげな悪の巣窟のような塔が、一転して可愛らしい、童話に出てくるようなお菓子の城のごとき印象になる。
(でも、ぴったり)
すでに塔の内・外観を見ていた二人には、その名前でも違和感はなかった。
レアバードから、霧の向こうに建つ塔を初めて見たときは、唖然としたものだ。壁は全面桃色で、塔の最上部には巨大なハート型のオブジェが据えられていた。入り口は開放されていたが、中にはもう一つ扉があって、それが封印されていたのだが、そこの床にも大きなハート型が紋章のように描かれていて、メルは喜び、ディオはうんざりさせられたのだった。
「多分その塔だと思います」メルは答えた。「それで、その塔のことで何か聞けることがない

かと思って……」
「そういえば変なこといってたっけ。ええと……確か、合言葉が必要なんだとか」
(音声認識式封印かな?) メルの耳に口を寄せて、ディオは囁いた。
(パパの論文にあった『古代文明トールの技術がなんとか』いうやつ?)
(うん)
「なに? どうしたの?」
「あ、ごめんなさい、何でもないです」メルは手を振った。「それで、その合言葉がなんだったか憶えてますか?」
「憶えてるけど……」マリーは不意に頬を赤らめ、顔を背けた。「はずかしいわ」
「はずかしい、ですか?」
思ってもみなかった答えだった。一体どんな合言葉なんだろうか? 隣でディオが唾を飲み込む音がして、メルはテーブルの下の足を思いきりふんづけた。
ディオは口を押さえて悲鳴を飲み込んだが、よほど痛かったのか、涙をにじませた。
(なにすんだよ!)
(……すけべ。なに想像したのよ)
(な、なんにも想像なんかしてねえよ!)
(どうだか)

メルはぷいとマリーの方を向いた。
ディオは今にも飛びかかる雰囲気だったが、いきりたってもぶつける相手がいなければ空回りするしかない。ディオは手を伸ばしてクルールの頭の後ろを掻きむしったが、これも思惑とは反対に、クルールはとても気持ち良さそうだった。
「あのマリーさん」ディオは無視して、メルは続きを訊いた。「出来たら、その合言葉、聞かせて貰えますか」
「うーん……」
「お願いします」
「……まあいっか。よく聞いててね」マリーはこほんと咳払いをした。「ええとね……『キュートでプリティー♪　とってもラブリィ～♡』……っていうの」
――沈黙。
窓の外で「今日も暑いなあ」「去年よりもずっと暑いよ」という声がして、遠ざかっていった。
「あの……それが合言葉ですか？」とメル。
「A・Bはそう言ってたわ。――ああ、それと注意があったんだっけ」
「なんですか？」
マリーは体を少し前に乗り出すと、つられたメルの前に、学校の先生が乗馬鞭でするように

ひとさし指を立てた。

「ただ言ったんじゃ駄目。魔女っ娘風に言うこと」

と、いうことだった。

「でも、なんだろう……魔女っ娘風って」着陸するためにエンジン出力を絞りながらディオは聞いた。「先生に聞きに島に戻る？」

「とりあえず、試してみましょ」

二人と一匹を乗せたレアバードは、塔の側の大地にふわりと着陸した。

機体には何の衝撃もない。これほどの個人用飛行機械を持っている人物は、世界にも数人しかいない。なにしろこのレアバードは、かつてユークリッド国営科学アカデミーから、伝説の六勇者に貸与された内の一機だといわれている代物なのだ。

　アセリア暦四四〇八年現在、飛行機械はそれなりの発達をみせていて、大陸横断飛行航路も確立され、百人もの人間を一度に輸送できる飛行機が日に何十機も空を飛んでいた。

　だがそれらは、レアバードとはまったく違うものだ。レアバードが魔法素をエネルギーにして機体にかかる重力に反作用する力を自在に生み出す『反力機構』によって飛行するのに対して、いま世界の空を飛んでいる飛行機は、燃料に液体燃料をつかっており、飛行の方法も、機体にかかる空気抵抗を利用して空を飛ぶ。機体にかかる抵抗は速度に比例するから、機体を浮かせるまでの速度を出すには長い滑走路が必要であり、着陸にも同様の路が必要だった。レア

バードのように垂直離着陸などは出来ない。
五十年以上前に完成していたレアバードが何故普及しなかったのかといえば、原因はもちろん魔法素にある。五機のレアバードは、ユークリッドに余人の手を介して返却されたが、大量の魔法素を必要とするこの飛行機械は、ほぼ同時期に起こった《大消失》によって、ただのオブジェとなってしまったのだった。
《大消失》の原因については、六勇者と魔人との激しい戦いで魔法素が使い尽くされたのだ、とも、エルフ族が魔法を独占する為に何らかの術をかけたのだ、とも噂されたが、事実はわからなかった。ただ、この事件により、世界はエネルギーに対する考え方の大転換を迫られ、全ての種族、人々が、新たなエネルギーを求めて研究に邁進することになった。魔法素を無尽蔵のエネルギーとして利用する研究であった『魔科学』は、それにより、急速に廃れていったのだった。
その後の十数年で、人類は『黒炎水』という新たな液体燃料を使ったエネルギー機関を手に入れるに至ったが、結果的には、相当期間、技術進歩の停滞を余儀なくされた。
結局、レアバードには、勇者たちが使ったらしい、という意味だけが残った。
ユークリッド王国は、三十五年前に、五機の内の二機を友好の印としてアルヴァニスタ王国の王立学院へと贈っている。二機のレアバードの内、一機は記念碑として残されたが、もう一機は研究用に分解された。だが、その頃すでに『魔科学』を見限っていた学院では、それ以上

とになった。
　エリックがそれを見つけたのは二十年前である。彼がそのガラクタを引き取ることを咎める者はいなかった。倉庫の管理者などは、むしろ喜んだほどである。
　エリックの手によって伝説の飛行機械は再び組み立てられたが、魔法素が足りない現状では、動くはずもなかった。そして数年後、レアバードはフォート夫妻と共にアルヴァニスタを去り、ドレフ島へと渡ったのである。
　そのエンジンが、突然、息を吹き返したのが、島に越してきて三年後、今から十四年前のことだ。驚いたことに『反力機関』が再び作動を始めたのだ。その意味する所をエリックはすぐに理解し、狂喜した――魔法素が蘇ったのだ！　エリックはレアバードを再び飛ばす為に、これを南ユークリッド大陸の『電気の洞窟』へと運び、洞窟内に残っていた古代の電気コイルを直列に繋いで落雷を待って強力な電気エネルギーを得、レアバードを完全に復活させることに成功した。
　だが、大気中の魔法素は、レアバードが飛ぶほどには増えたが、そこで安定し、それ以上の増加は見せなかった。これもまた、原因は不明である。エリックはユークリッドで開かれた学会で魔法素の復活を宣言したが、いつまた《大消失》が起こるかもしれない不安定なエネルギーに、再び目をむけるものはなかった。

『反力機関』の作動を自分の目で確かめられた時点で、エリックのレアバードに対する興味は失せたが、子供たちを引き取ってからは、実用品として便利に使われることになった。そして双子たちが《なりきり師》を始めた時、レアバードは記念品としてディオに贈られ、以来、彼の物になったのである。

いまではディオは、レアバードを自分の手足のように操ることができる。

全員が座席から降りると、ディオは操縦桿の側にある赤いボタンを押して機体の側を離れた。数秒後、レアバードは鶏の卵ほどの大きさと形に変化した。正しくは、卵型の容器に圧縮されて収納されたのだ。

これもレアバードと同時期に国営科学アカデミーで開発された技術である。こちらの方はいまも使われていて、物資の輸送に大いに役だっている。ただし、嵩は減っても重さは変わらないという欠点はある。五〇kgの物は圧縮しても五〇kgなのだ。

レアバードの重さは、八〇kg——しかしディオはレアバード専用圧縮容器『ウイングパック』を軽々と持ち上げると、腰のポーチにしまった。エンジンを掛けっぱなしにすることで、パックの中のレアバードは自重がほとんどゼロになっているのだった。

二人と一匹は塔の中に入ると、閉じた扉の前に立った。

「オレからやってみるぜ」

ディオは息を吸い、それから思いきり裏声で、しなをつくって言った。「キュートでプリテ

イ♪　とってもラブリィ～♡」
……扉は、うんでもすんでもなかった。
(き、気持ち悪……)
メルの肌には鳥肌が立った。クルールの尻尾の毛も逆立っている。
「なんだよ!」とディオは扉を蹴ったが、自分の足が痛いだけだったようだ。
「じゃあ、今度はわたしね」メルは笑いを堪えながらディオを扉の前から押し退け、そうしてからマリーがしたようにひとつ咳払いをした。「おほん……『キュートでプリティー♪　とってもラブリィ～♡』」
メルはくねくねと腰を振り、最後には小首を傾げてウインクまでした。すると――
「やったあ!」
ぽろんぽろん、と陽気な音がして扉が開いたのだった。
扉の向こうには階段と、そして『犬』『豚』『鳥』『猫』の四つの大きな像があったが、像といっても写実的な作品はひとつもなく、どれもがぬいぐるみのような愛らしいデザインだった。
それを見たディオは肩をすくめた。
「なんか、メルの部屋みたいだな」
「こんなにすごくないわよ。――それより、着替えなきゃ」

「うん」
メルとディオはそれぞれ、『魔法使い』と『見習い剣士』の衣装を出して着替えた。《なりきり師》の衣装は圧縮してポーチにしまい込む。
「これで準備は万端ね」帽子の位置を直しながらメルは言った。「じゃあ、行きましょ」
ディオは頷き、腰から鉄剣をすらりと抜いて、先に立って階段に足を掛けた。

「きゃあああああっ！」
メルの悲鳴が迷宮のピンクの壁に反響して、辺りの音を混沌とさせる。
「メル！　悲鳴なんかあげてる暇があったら、呪文のひとつでも唱えろ！」
牙を剥き出して飛び来た、大きな猫ほどもある蝙蝠を剣で両断し、ディオはメルを背中にかばうようにした。メルは何とか呪文を唱えようとするが、声が震えてうまく出来ないようだ。
クルールが丸い体を盾にするように、ディオとは反対側に立ってメルを守ろうとしている。
「……見た目とは大違いだぜ」
可愛らしい外見、内装と異なり、塔の中は迷宮であり、また噂通りに、外の世界ではほとんど見かけることのない怪物たちが徘徊していた。怪物たちは、彼ら同士でも襲いあっているようだったが、ディオたちを見つけると必ず、戦いをやめてでも、彼らに襲いかかってきた。
すでに三度遭遇し、これを退けたが、メルは初めての経験にすっかり怯え、まだ一度も満足

に魔法を使えてはいなかった。
最後の一匹の蝙蝠が、クルールをめがけて襲いかかったが、見た目と違う敏捷さでクルールは飛び上がり、短い手でこれを叩き落とすと蝙蝠は嫌な音を立てて潰れた。
「いくぞ、メル」
ディオはメルを無理やり立たせて歩き出した。このままここにいては危なかった。クルールも遅れずについて来る。すぐに他の怪物たちが、死んだ仲間を食らうためにやってくるはずだ。そうしたら、再び戦わなくてはならない。メルがこんな状態では、先に進むことなど難しかった。
三方を壁に囲まれた通路の行き止まりを見つけると、二人と一匹はそこで小休止した。メルはすぐに座り込むと、膝を抱えた。
「なんで魔法を使わないんだよ」ディオは苛立って壁を蹴った。「クルールでさえ戦ってるんだぞ」
「知らなかったんだもの！」膝に顔を埋めたままメルは叫んだ。その声が怪物を引き寄せるかも知れないということは、まったく考えていない。「あんなこと！　殺すなんて！　なんでディオは平気なのよ！」
何故、と問われれば、それは子供の時分から狩りをしてきて慣れているからだ、といえた。狩った獲物を自分で捌いて調理もできるディオなのだ。メルは調理された後の料理の姿しか知

らないが、ディオはおいしそうな料理に変わった肉が、元は生きて温かかったことを知っている。
全ての生き物は他の生き物の命を奪って生かされている——エリックにディオはそう教わっていた。メルも同じように習ったはずだが、実感できていなかったのだろう。
（それとも、《なりきって》いるからなのかな？）
わからなかった。それにいまはそんな事を追究している場合ではない。実際、メルをかばいながら戦うのは、もうきつくなっていた。
なにしろまだ『見習い剣士』なのだ。もっといい衣装——『剣士』とか『侍』とかの衣装を着れば、いまより強い剣技をつかえるだろうが、いまそれを着てもおそらくは、一回戦闘をこなしただけで体がついて行かずに昏倒するだろうことがわかっていた。焦らずに体を慣らして行くしかない——それは三年間《なりきり師》をやってきて学んだことのひとつだった。
「じゃあ、メルはあの怪物たちに黙って殺されてやるか？」
「いやよ、そんなの！」
「じゃあ、やめて帰るか？　それで魂がぶっこわれるまで待つか？」
メルは激しく首を振った。
ディオはため息をついた。「だったら、やるしかないだろ？　パパとママを悲しませたくないだろ？」

メルは答えない。
その時、クルールの垂れた耳がわずかに上がり、尻尾の毛が逆立った。低い唸り声が洩れる。その声に、弾かれたようにメルは体を震わせると、顔をあげ、体を固くした。
ディオも通路先に現れた影を見、そして小さく舌打ちをした。（……こんなのまでいるのかよ）
現れたのは、これまでとはある意味、まったく種類の違う怪物だった。後ろ足で立ち上がった犬のような姿をしている。ただしシルエットはずっと人間に近い。人に近いのはシルエットばかりではない。手には明らかに加工したとわかる棍棒をもち、胸には革の鎧までつけている。冒険者を襲って奪ったものか、それとも自分で加工したものかはわからなかったが、蝙蝠や巨大蜂と違い、そうした知恵を持っているという点で、ただの力押しが効くこれまでの相手と比べて強敵にちがいなかった。
獣人――人の知恵を身につけた獣。その行動は本能に支配されていて、知恵は牙や爪同様の役目にしか使われない。
（バグベア、だ）
ディオは前に見た図鑑を思い出した。
危険なのは手にした棍棒ばかりではない。足の爪、そして鋭い牙も恐ろしい武器となる――いや、そちらこそが本来の武器なのだ。棍棒はそれを有効に使うためのものでしかない。

そいつが二頭。牙を剝きだし、涎を流しながら襲いかかる機会を窺っているとわかる。おこぼれを狙ってか、蝙蝠も一匹、天井付近を飛び回っていた。

息苦しい雰囲気、波動が押し寄せてくる。

(見逃してくれそうにはないな)ディオは剣を引き抜いた。柄を二、三度、握り直して感触を確かめる。(できるかな?)

頭の中には、ひとつの技の方法が浮かんでいる。

「クルール、ちょっとどいてろ」

決意を固め、ディオはクルールの頭に手を置いた。だが、クルールは動こうとはしなかった。毛を波打たせ、唸っている。静電気でも起きたのか、ぴりっとした痺れを感じて、ディオは手を離した。途端、クルールの体色がエメラルドグリーンからコバルトブルーへと、さっと変化した。変化はそれだけに留まらず、額の辺りで毛が伸びて硬質化し、まるで角のようになった。腹に星の模様が浮き出している。

クルールは一声鳴くと、バグベアに向かって突進した。

「あっ、待てよ!」

ディオは止めたが聞くものではない。舌を打ち、剣を構えた。使うしかない——腰溜めにして、力を込める。バグベアもクルールにつられたように突進を開始した。

「クルール、避けろよ!　喰らえっ、魔神剣!」

剣を床すれすれに振るう。ただの一振りではない。『剣気』を込めた一振りだ。気は衝撃波を生み、硬い床を削りながら直進する。

クルールはうまく避けた。その先には先頭を走っていたバグベアがいる。

衝撃波は見事に命中した。後方へと吹き飛ばされると同時に鎧が外れて落ち、鼻から血を噴き出した。後ろの一頭はそれに構わず突っ込んでくる。

もう一度、魔神剣を打とうとして、だがディオは腕に走った痛みに呻き、剣を取り落とした。

（しまった！）

バグベアはクルールには見向きもせずに頭を飛び越そうと跳ねた。クルールでは止められない、と思った次の瞬間、バグベアはおぞましい悲鳴をあげて床に落ちていた――全身を炎に包まれて。

クルールの角が燃えている。炎に包まれた角で、跳ね上がったバグベアを叩き落としたのだった。

ディオは心の中で喝采したが、喜びは一瞬だった。魔神剣の直撃を食らったバグベアが血を噴きながらも立ち上がり、素早い動作でするりとクルールの脇を擂り抜けて、襲い掛かってきたのだ。剣は取り落としたままだ。拾おうとして、しかし再び鋭い痛みが走り、腕が硬直した。バグベアがその隙を見逃してくれるはずもなかった。

獣臭い息を感じて思い切り首を捻った。耳の脇で、牙が噛み合わされて嫌な音を立てる。掠り、頬が少し裂けた。ディオは腹を蹴ってはなれようとしたが、それより早く押し倒され、肩を押さえつけられてしまった。爪が鎧に食い込む。動けない。真っ赤な舌が視界一杯に広がり、ディオはどっと汗を噴いた。バグベアの息は、死の臭いがした。目を閉じたかったが出来なかった。

(殺される!)

恐怖がディオの喉から悲鳴を絞り出そうとした。

だが、それは飲み込まれた。眼前で、突然、嫌な音を立ててバグベアの頭が潰れたのだった。バグベアの黄色い瞳がぐるりと裏返り、再び鼻から血を噴く。傾いだ頭から、巨大な石が転がり落ちたのを、ディオは見た。

それに頭を直撃されたのだ。死体にのしかかられる前に転がって逃げ、背中を振り向いたディオは、何が起きたのかを知った。

「出でよ大地の拳！　雨となり我が敵を打て！」メルの呪文！　彼女は顔を青ざめさせながらも、足元から吹き上がる魔法素にマントを翻し、杖を突き出すように構えていた。「ストーン・ブラストッ！」

バグベアを襲ったのと同じ大きさの石が、空中に次々と現れては、見えない手で投げられたかのように、もう一頭のバグベアを、蝙蝠を襲った。蝙蝠は翼を折られて落ち、クルールに

踏み潰されたが、転がって火を消したバグベアは腕で急所をかばい、堪えながら突進した。
「きゅいっ」
クルールが跳ね飛ばされて壁に叩き付けられる。
ディオは素早く立ち上がり、剣の柄を踏みつけた。キン、と音を立てて剣が回転しながら床から跳ね上がったのを、盾を捨てて空中で摑む。しゅっ、と気合の息を洩らし、ディオは腕を突き出した。
ざっ、と剣が分身した。
バグベアの体が、一瞬浮きあがって押し返され、踵が床に着いた途端、体の前面の十数箇所から血が噴き出した。まるでシャワーのように。獣人は仰向けに倒れ、そして、二度と起きあがることはなかった。
――奥技・秋沙雨。
勇者クレス・アルベインが初期に使ったといわれている剣技だった。
「……ふうっ」
息を吐いて力を抜いた途端、疲れがどっと押し寄せ、ディオは膝を折った。だが、倒れなかった。駆け寄ったメルが抱き留めてくれたのだ。
ディオは意地の悪い笑みを浮かべてメルを見た。「汚れるよ」
「……いいわよ別に」

「あーあ、きっついなあ戦うのって」体を預けたまま、ディオは吐き出すように言った「やっぱり助け合わなきゃな、メル」
「しらないわよ、バカ」ディオの腕を肩に担ぎ直し、メルは歩き出した。「……でも、やっぱりディオは、わたしがいなきゃ駄目なのよね」
その口調は、からかうというより、自分に、戦う理由を言い聞かせているようであったので、ディオは何も言わず、ただ笑ってみせた。
覚悟を決めたメルのおかげで、後の戦闘はずっと楽になった。前衛のディオが敵を牽制する間にメルが呪文を詠唱して後方から魔法を見舞い、弱ったところをクルールと共に直接攻撃で倒して行く。この戦法でディオたちは次々と襲い掛かってくる怪物たちを退けて、迷宮を上がっていった。
ディオは、魔神剣や秋沙雨が、一戦闘毎に体に馴染んでいくのを実感していた。いつのまにか、腕が痛むことも無い。メルにしても同様であったようだ。バグベアの頭を叩き割った術、ストーン・ブラスト――魔法を使った後しばらくは、頭が痛いといっていたが、それもディオと同じく、痛む度合も、間隔も、弱く、短くなっていって、ついにはまったく平気になったようだった。
バグベアとの初遭遇戦の時に見せたクルールの変態は、その後の数度の戦いで、戦闘時にの

み起こるものだということが分かった。敵がこちらに気付くと変態が始まり、敵が死ぬなり、逃亡するなりすると、元の愛らしい姿に戻る。また、変態は一種類ではなく、どういう基準で選択しているのかはわからなかったが、角の生えた形態の他にも、局地に生息する水鳥に酷似した形態への変化も見せた。
そうするうちに、衣装がしっくりと体に馴染んだと感じた瞬間が訪れた。それは塔の六階で、三匹の大型のスズメバチの集団を叩き落とした時のことで、二人にはこれまでに幾度となく訪れた瞬間だった。衣装を《着こなした》のだ。それは、次の衣装への、心と体の準備が出来たことを意味する。
だが、二人は着替えなかった。塔はあと二階層のはずだ。衣装を替えた直後は、勝手を掴むのが難しく、怪我をすることも多い。『見習い剣士』『魔法使い』の衣装は、家にいる頃にすでに体に慣らしていたから、何とかいきなりの実戦を戦うことが出来たのだ。今は敵地の只中である。無理は禁物だった。
強精剤の一種である『グミ』を齧って疲れを癒しながら、二人と一匹はこの階の階段を探して先へ進んだ。今、先頭はクルールが務めている。野性の勘か、二人と一匹の中では敵に気付くのが一番早いからだ。気配を察すれば、耳か尻尾がぴんと立つ。
迷宮の中では、入り口であんなに可愛く見えた数々の彫像も、ただ不気味でしかなかった。陰に敵が潜んでいたことも一度や二度ではない。また、アルヴァニスタの都での噂通り、迷宮

のあちこちには宝箱が置いて（落ちて？）あったが、中身はといえば、エルフ族の宝などではなく、古くなって腐ったグミや、錆びた剣などで、ほとんど何の価値もなかった。時には誰かの財布などが入っていて小銭が見つかることもあったが、持ち主の辿った運命を考えると、喜ぶ気にはなれなかった。

「きゅ！」

クルールが短く鳴いて、何か見つけたことを報せた。目をやると、階段があった。手摺りもなにもない石段だ。先は天井にぽっかりと開いた穴へ続いていて、その向こうは靄がかかっているのか、よく見えない。この階段も尋常ではなく、階を上がった途端に消え失せ、二度と階下へは戻れないような仕掛けになっている。下の階でそれに気がついたときは、メルもディオもパニックになりかけたが、とにかく最上階にいけば何とかなるだろうと互いに言い聞かせることで、ここまで自制してきたのだった。

二人と一匹はしっかりと寄り添って進んだ。途中で階段が消えて離れ離れになるのを避けるためだ。不意打ちにも十分に気をつけ、まずはクルール、次いでメル、ディオは背後を警戒しつつ慎重に上がる。

ディオが最後の段を上がると、これまでと同じように、入口は消えてピンクの床になった。

辺りを見回した二人は、一目で七階はこれまでとは違うとわかった。まず、狭い。まるで真四角の部屋だ。広さも、メルとディオの部屋ぐらいしかない。八階へと続く階段がすぐ側にあ

り、床に青白く光る紋章のようなものが描かれている。脇に立て札があって、『出口』と大きく書かれていた。
「どう思う?」ディオは紋章を指して聞いた。「出口、だって」
「まあ、罠だと思うけど……試してみましょ」
メルはポーチからグミを一個取り出して投げた。グミは弧を描いて飛び、紋章の上に落ちた途端、紋章が輝き、光が薄れたときにはグミは跡形もなく消えていた。
「溶かされたのかな?」
ディオの質問にメルは、さあ、と肩をすくめた。「とにかく、乗らない方がいいわね」
とりあえず敵もいないようだったので、二人と一匹は部屋の隅に行って、少し休むことにした。残る階層はあとひとつ。自ら『魔女っ娘』を名乗る相手が、味方だとは限らない。体力を回復し、万全——とまでは行かなくても、それに近い状態で臨んだ方がいい。
メルがポーチから、圧縮された敷布とファーメルが作ってくれたランチセットを出した。連戦の空腹はグミでは癒せず、少し前から腹の虫が鳴いていたので、ディオはよだれを垂らさんばかりだった。
「わお」
バスケットの中から底の深い容器を出して蓋を開ける。湯気が上がり、中を見たディオは歓声を上げた。入っていたのは、特製ワインソース煮込みハンバーグ。ファーメルのハンバーグ

は、煮込まれていながら周りはしっかりと歯ごたえがあって、噛むとほろりと崩れて、味の染みた肉汁が口一杯に広がり、誰の目尻も幸せで下がる、という双子の大好物だった。バスケットの中には他に、柔らかい丸パンとスープも入っていた。

ディオは丸パンを二つに裂いてソースをよくからめたハンバーグを挟み、口のまわりが汚れるのも構わずにかぶりついた。肉汁がたれて鎧を汚す。これを家でやると怒られるのだが、ここならメル以外の目はない。

メルはといえば、こんな場所でもきちんとナイフとフォークを使っていた。顔色はまだ悪いが、それでも肉を賽の目に切って、ひとつずつ口に入れている。パンは千切って、切り口から皿に流れた肉汁を拭って食べる。

クルールにはディオが、メルが切ってくれたハンバーグをつまんで食べさせてやった。手がソースと肉汁で汚れたが、いまさら関係ない。すでにべたべたなのだ。ハンバーグをひとくち食べたクルールは、短い手をぱたぱたと動かした。

「うきゅきゅきゅ♡」

「へへっ！　そうだろ、うまいだろ？」ディオは二つ目のハンバーガーを左手で持ったまま、右手でクルールのための新しいハンバーグをつまんだ。「ママのハンバーグは最高さ！」

「うきゅ！」

「ごちそうさま」メルは布巾で上品に口を拭うと、ふう、と息をついた。「もう、お腹一杯」

「いてえっ！」クルールの口に指を突っ込んでいたディオが叫んだ。どうやら噛みつかれたらしい。「こいつ！」

拳を振り上げたディオを見て、クルールの耳が下がる。何処が首やらわからないが、微かに竦めたようにも見えた。

無論、ディオは、反射的に手があがってしまっただけで、拳を下ろすつもりなどない。結局、上げた手をそのまま自分の頭に下ろして掻いた。髪の毛にソースがつく。

「……くいしんぼなところは、ディオにそっくりね」

「んだと⁉」

「きゅー！」

一人と一匹は同時に言ったが、クルールのそれは、否定だったのか、肯定だったのか、わからなかった。メルはそんな彼らの様子に、くすりと笑うと、出したときと同じく、手際よくランチセットを片づけた。

水筒から注いだ紅茶をメルに手渡して、ディオは満足の息を吐いた。クルールも短い手でお腹をさすっている。その口にソースがついているのを見つけて、ディオはポーチから丸めたハンカチを出して拭ってやった。ぐりぐりと力を込めたのだが、クルールは気持ち良さそうに短い尻尾をぱたぱたやった。

汚れたハンカチをそのまままた丸めてポーチに戻そうとすると、見ていたメルが顔をしかめ

た。
「せめて、汚れた側を内側にして折るなりした方がいいわよ。中のものにソースがつくじゃない」
「わかってるよ」べえ、と舌を出し、それでも言われたことには従って、ディオはハンカチをしまった。「……ところでさあ、メル」
「なあに？」
「おまえ、覚悟は出来てるか？」
「なによ、いまさら」
「上にいるのが敵なら、相手はエルフ族だぜ？　つまり、見ためはほとんど人間と変わらない、ってことだぜ。いままで戦った、見た目も中身も怪物、ってのとは違う。そんな奴に魔法をぶちかませるか？」
「……わかんない」メルはふっと息を洩らした。「でもそれはディオだっていっしょでしょ？人に剣を向けたことなんてないでしょ？」
「そうなんだけどさ……でも《なりきってる》せいなのかな？　なんだかぜんぜん平気な感じなんだよなあ」
「衣装にひきずられてる、ってこと？」
「さあ？」ディオは肩を竦めた。「それこそわかんないよ。でもそうだな……出来る、って感

じはあるかな」
「わたしは……やっぱり、わからないわ。でももう怖がってなにも出来ないってことはないから。それだけは安心して」
「それはぜんぜん心配してないけどさ」ディオは立ち上がると、顔を背けて鼻を掻いた。
「ま、どうしても駄目だったら、オレとクルールの回復をこまめに頼むわ」
「うん」メルは力強く頷いた。「わかった」
「さて、それじゃあ……」ディオは相棒たちを振り向いた。「いこう！　ノルンと魔女がお待ちかねだ！」
「おーっ！」
「きゅー！」
一人と一匹は意気込んで拳を天井に向かって突き上げたが、クルールは勢い余って後ろに倒れ、そのまま転がった。
ころり、と。

5　アーチェ

塔の最上階でディオらを最初に出迎えたのは、入り口にあった像――すなわち『犬』『豚』『鳥』『猫』の像だった。それが部屋の下段の四方の隅に守護像のように置かれ、床の中央には、でかでかと文字が書かれていた――『ようこそ！』と。

下の階の『出口』と書かれた札といい、相当、人をおちょくった奴に違いない、とディオは考えた。『敵』の気配はない。クルールがおとなしいままなのがその証拠だ。

部屋の様子を見回しても、不審なところはなかった。二人と一匹が立っている所からは、一段高くなった場所が見えるが、そこには人の営みが見えた。巨大な書架がある。机と椅子がある。天井は随分と高く、壁の上の方に取り付けられた窓からは、赤く燃える逢魔が刻の空が見えている。ただひとつ異様なものを挙げるなら、書架とは反対の隅に置かれている、巨大な瓶ぐらいだろうか？　しかしそのひとつで、ここに住む人物が魔女であると確信させるには十分だった。

（どんなやつなんだろう）ディオは剣の柄を神経質に幾度も握り直した。（生粋のエルフなん

て会ったこともないからな。先生に言わせると、皆、変わり者らしいけど）
ちらと見ると、クルールは相変わらず落ち着いていたが、メルはやはりどこか不安そうだった。
「クルール」ディオは、クルールをメルの背後に回らせ、それから二人にうなずきかけた。
「行くぜ」
先頭に立って、そろり、と足を踏み出したその時。
「ふっふっふっ……」
突然、頭の上から笑い声が降って来た！
二人と一匹の反応は早かった。全員が素早く天井を仰ぎ、そして——硬直した。
（な、なんだ、こいつ……）
人が、空に浮いている。否、正確には、空中に浮いている箒の柄の上に、人が立っていた。
『魔女』だ！
腕を組み、『魔女』は二人と一匹を、尊大な様子で見下ろしていた。
「よくぞここまで辿りついたじゃん！——じゃなかった。エヘン……辿りついたものよ！」
メルもディオも声がなかった。唖然とした、といっていい。だが、恐怖のせいで、ではない。
箒は、すい、と空中を滑るように移動して机の前、上段の床すれすれで、ぴたりと停止し

た。『魔女』が慣れた様子で、よろけることもなく降りると、箒は勝手に房を下にして立ち上がり、その柄は伸ばした『魔女』の手に、ぴたり、と納まった。

「あたしが、この塔の主じゃ！」

どういう効果か、『魔女』がそう宣言したとたん、塔の外にあっては雷が轟き、内にあっては恐怖の悲鳴が壁で、床で、書架で、瓶の中からも上がった。

だが、メルもディオも、まったく恐ろしいとは思わなかった。なぜなら目の前にいる『魔女』が、少しも『魔女』らしくなかったからである。

年の頃なら、十五、六だ。塔と同じピンク色の髪をポニーテールにまとめている。服装はといえば、下は、先の尖った歯車のような飾りのついたブーツの中に、下に行くほど膨らんでいる薄い赤のズボンの裾を入れてはいている。上は、袖口が異様に広く、ブーツの飾りと同じような衿のついた半袖のシャツに、カラフルなモザイク模様のスカーフを首に巻き、それに二の腕まであるピンクのイブニング・グラブをつけている。両手首には形の違うブレスレット。

（これが、魔女……？）ディオはメルに囁きかけた。（弟子かな？）

（うーん……あ！　違うわ、きっと本物よ！　だって、この塔――）

（そうか！）

メルは頷いた。

そう――ここは『魔女っ娘の塔』

おそらくは、真実、この目の前の少女が塔の主なのだろう。エルフは、ローカス医師を見ればわかるように、若くして成長は止まる。とはいえ、目の前の『魔女っ娘』は、あまりにも少女で、恐れろ、という方が無理だった。
「ちょっとちょっと、なに？　その白ーっとした目は？　……あんたたちねえ、こういう時はこう、もっとノリよく――」
『魔女っ娘』は体を縮めるようにすると、いきなりバッと伸びをして、『どっしぇ～～～!!』と叫んだ。
　これにには確かに驚いた二人と一匹だった。引いた、ともいうが。
『魔女っ娘』は、二人と一匹の心情など知らぬ様子で、彼らにむかって、びしっ、と指を突きつけた。
「――とか、驚くもんよ？」
　だが、二人がみせたのはまったく別の反応だった。
「あ」
「あ」
「え、なに？」
「……あなたが、アーチェ・クラインですね？」
「どっしぇ～っ!!」

頭の上から突然そう名前を呼ばれた『魔女っ娘』は、人にそうしろといった反応を自分でする羽目になった。メルとディオは、彼女が箒も使わずに、間違いなく一mは飛び上がったのを見た。だが、立ち直りは早かった。彼女は振り返りながら後ろに飛び、着地したときには右手で箒を構え、左手は奇妙な印を結んでいた。

「……誰、あんた？」

『魔女っ娘』は自分の背後に浮かんでいた、幽霊のような女性を見て訊いた。驚いたのは不意打ちを食らったためだけであるようで、その姿に驚いた様子はまったくなかった。

「わたしは、ノルン」と彼女は名乗った。間違いなく、ファーメルの工房に現れた、あのノルンである。「アーチェ・クライン、あなたにお願いがあって参りました……」

「あたしに？」

「アーチェ・クライン!?」と、ノルンが何かを答える前に、驚きの声をあげたのはメルだった。「まさか、本当に!?」

「おい、メル。アーチェってまさか――」

「そうよ、ディオ！　あのアーチェ・クラインに決まってるじゃない！　ああ、なんで一目見て気がつかなかったのかしら！　前にあれとほとんど同じ衣装を着て、演じたこともあるのに！」

「本当かよ……」

ディオは、今はもう構えを解いて腰に手を当て、背を向けて立っている少女の後ろ姿を見つめた。
魔人ダオスを倒した伝説の六勇者の一人、『精霊の森の魔女』が目の前にいる——そういわれても、実感は出来なかった。エルフなのだから、容姿はありえることだ。童顔のエルフというものもいるのだろう。しかしそれにしては余りにもイメージと違う。『精霊の森の魔女』は、砂漠で巨大な津波を引き起こし、四方数kmを一瞬にして吹き飛ばす禁忌呪文を使いこなすと伝えられていた。服装は道化的でも、容姿については妙齢のエルフの女性同様、見目麗しい大人の女性、というイメージが定着している。『聖樹祭』の劇は子供劇だから別だが、ユークリッドの大劇場で『聖六勇者物語』がかかるときは、アーチェ役は少し影のある美女が演じることになっている。断じて、目の前に立っているような『少女』ではない。
と、『魔女っ娘』が首だけを捻って、突然ディオを振り向いた。
「ちょっとアンタ。なに考えてるかわかってんだからね」
「えっ⁉」
「どうせ『これのどこが妖艶な影のある魔女なんだ』とか考えてるんでしょ?——まったく、男って奴はどいつもこいつも……」
「ディオ！　なんて失礼なことを！」
「いてえ！」脇腹にメルの強烈なパンチをくらって、ディオは悲鳴をあげた。「んなこと！

……ちょっとは思ったけど」
「ディオッ！」
メルが拳を振りあげる。と――
「あの……話を聞いてください……」
すっかり取り残された形になっていたノルンの声がした。
「あ、ごめんごめん」アーチェはノルンを向いた。もう、警戒心のかけらもないようだった。「……で、何だっけ？」
ノルンはため息をついた。「……アーチェ・クライン。あなたの後ろにいる二人――メルとディオは、これから『十二精霊の試練』を受けなければなりません」
「って、あの『精霊の試練』のこと？」
「そうです。かつてクラース・F・レスターが、召喚術の完成のため、あなたがたと共に精霊たちに挑んだ戦いのことです。精霊は、強き心と体によって、己に打ち勝った者の願いをひとつだけ叶えます。クラース・F・レスターは、彼らを従えることとでした。そしてこの二人は、封じられた本当の自分の心を解放することが望みです。そしてそれは、ただ一人の精霊の力でなしえることではありません。それぞれの精霊が引き出すことの出来る心の部分は少ないのです。二人が完全に自分を取り戻すには、全ての精霊に打ち勝つ必要があるのです」
「ふうん……。まあ、話はわかったけど。それでアンタは何者？　この世界の精霊とは、ち

よっと毛色が違うよね？」
「わたしはノルン。この二人の行く末を見届ける義務がある、とだけしか、いまは申し上げられません」
「訳あり、ってやつね」アーチェは大仰に肩を竦めた。「ま、いいけど。……でも、いまは精霊たち、そろって休眠期だけど、どうするの？　あたしに起こせっていうなら無理だよ？」
「そうではありません」ノルンは首を振った。「……アーチェ・クライン。あなたには、この塔で集めているマナを一時、解放して欲しいのです」
「さーて、何のこと？　マナは《大消失》からこっち、少ないままじゃん。十四年前に少しは増えたけど、さ。ま、たいした量じゃなかったよね」
「それは、あなたがマナのほとんどをこの塔に集めているからですね」
　ノルンの言葉に、アーチェの肩が小さく震え、同時に辺りの空気がぴりっと張りつめたのが、メルにもディオにもはっきりとわかった。
「わたしは理由は問いません。しかし《時を越える》には、大量のマナが必要なのです」
「！……あんたたち《時空転移》をするつもり？」
「過去を訪れ、休眠期前の精霊たちに会います」
「でも、どうやって？　トールの転移装置はもう何年も前に壊れたって聞いたよ？　『時の剣』だってとっくに――」

「時空の扉を開くことは出来るのです。ただマナが絶対的に足りないだけで」ノルンは祈るように手を組んだ。「お願いします、アーチェ・クライン。あなたが世界のためを思ってこの塔を建てたことはわかっています。しかしすでに『魔科学』は廃れ、過去の学問となっています。過去の悲劇が、同じ形で繰り返されることはないでしょう。それに、解放していただくのはそれほど長い時間ではありません。この二人が無事に試練を乗り越えたときには、再び封印してくださって構いません」

「うーん……」

「ち、ちょっと待って！」黙って話を聞いていたメルはしかし、いまのところだけは聞き流すわけにはいかなかった。「マナは大量にあるんですか？　それを、この塔が集めて隠してるんですか？」

アーチェは振り向いて、メルとディオを見た。「ま、そういうこと」

「嘘だろう！」叫んだのはディオだった。「じゃあ、パパが世間に馬鹿にされて学校から追い出されたのは、この塔のせいだったのかよ！」

「それは違いますよ、ディオ」ノルンは言った。「十四年前、この塔が出来たとき、『魔科学』はすでに過去のものだったのです」

「パパのやってることが古いっていうのか？」ディオの手がそろりと剣に伸びた。「そんなこと、誰にもいわせないぞ！」

「はーい、待った待った」箒に付いているサドルに跨って宙に浮いたアーチェが、ノルンとディオを遮るようにした。「わかった、わかりました。しばらくの間、この塔のマナを解放してあげる。それでノルンは『時の扉』を開くことが出来る、あんたたちのパパはいろいろ研究が出来る、これでいいでしょ？」

「はい」ノルンは頷いたが、ディオはまだ不満そうだった。「ありがとう、アーチェ・クライン」

「た・だ・し」アーチェは三人に見えるように立てた指を振った。「あたしにもこの子たちを試させてもらうからね。精霊の試練に挑むのと同じように、あたしにも、あんたたちの心と体の強さをみせてもらうわ。あたしを納得させられないようじゃ、とうてい精霊たちに勝つことなんて出来ないからねー」

「わかりました。いいでしょう。——さあ、あなたたちはどうしますか、メル、ディオ？」

「決まってんだろ」ディオは剣を引き抜いた。「何のために来たと思ってんだよ」

ノルンは頷くと、唐突に姿を消した。

「あれ？　どっかいっちゃったの？……ま、いっか！」アーチェは箒に跨ったまま飛び上がり、ディオたちの頭の上で一回転して反対側へと回った。足先がつくかつかないかの高さで箒は急停止する。「さーて、本気で来なよ？　そうじゃないと、あんたたちが死ぬからね」

メルは硬い表情のまま頷いた。相当に緊張している。それほどの相手なのだ、とディオは

目の前の愛らしい姿と実力は別物であると認識を改めた。こうしてただ対峙しているだけでも、はっきりと《力》を感じる。
「だいじょーぶ、だいじょうぶ」アーチェはいたずらっぽい笑みを浮かべた。「て・か・げ・ん・し・て・あ・げ・る・か・ら♡」
先に仕掛けたのはディオ。アーチェの言い方に、かちん、ときたのだ。
メルが呪文を詠唱する時間をつくるために剣を下段に構えて走る。
(よし！)ディオは内心で手を叩いた。タイミング的に、アーチェが呪文を唱えている暇はない。(魔法を使わせなければ、オレたちにだって――)
「甘いっ！――ファイアボールッ！」
アーチェが立てた指の先に瞬時に火球が三つ生まれ、立て続けにディオを襲った。
たちまち火に包まれ、ディオは自分の髪の焼ける臭いを嗅いだ。
「嘘っ!?」メルは驚愕する。「式の詠唱をせずに魔法を使うなんてそんなこと――」
「ちゃんと唱えてるよ」アーチェはふふんと笑った。「ミスティシンボルがなくたって、この程度の呪文の詠唱式の高速化なら、なんてことないってこと！――それっ、アイスニードル！」
氷結晶化した空気中の水分が、矢のようにメルに襲いかかる。だが氷針は、目標に届かずに空中で溶けて消えた。別方向から飛んできた火球に溶かされたのだ。
「あれ？」

「うきゅーっ！」
鳴き声と同時に、クルールの頭上で火球が生まれた。投石器で打ち出されたような勢いでアーチェをめがけて飛ぶ。
だが、クルールの放った火球は、アーチェの手の一振りで掻き消されてしまう。しかし時間稼ぎにはなった。
「風の息吹よ、渦巻く刃となれ！　ストーム！」
メルの呪文が完成し、アーチェの回りで空気が渦を巻いて、小型の竜巻が彼女を中に飲み込んだ。竜巻は小さな真空刃を生む。飲み込まれれば、それは、回転する剃刀の刃の中に飛び込んだようなものだ。無事でいられるはずはない。
ふっ、と風が消えた。
アーチェはまだ立っていた。それどころか、服にも裂け傷ひとつ出来ていない。
「なんで!?」
「今度はオレだっ！」火を消したディオがいつのまにかアーチェの懐に飛び込んでいた。「くらえっ！――奥義、秋沙雨！」
ざあっ、と剣が分身して、そのひとつひとつに確かに硬い手ごたえがあった。だが、何かおかしい。数十回の突きの後、分身は止まった。筋肉の限界なのだ。腕が硬直する。この時、わずかに隙が生まれてしまう。

そこを突かれた。
箒の柄の先が、ディオのみぞおちに食い込む。何かが爆発した、と思った。弾き飛ばされ、壁にしたたか背中を打って、ディオは落ちた。
「ディオッ！——出でよ大地の拳！　雨となり我が敵を打て！　ストーン・ブラストッ！」
「きゅきゅいっ！」
拳ほどもある石の雨に、クルールの放った火球が混じる。示し合わせたわけではなかったが、二つの属性を同時に無効化するのは至難の技だ。だが——
「グレイブッ！」
アーチェが叫ぶと同時に彼女の周りに四本の柱が出現して壁となり、メルとクルールの放った呪文のことごとくを防いだ。
「そんな！」
「いまのは、なかなかよかったけどねー」柱の隙間から手袋をした手が覗いて指を振った。
「ま、こんなとこか。——じゃあ、これはおまけね」
立てた指が、ひょい、と下を向いた。
「ライトニング×3」
バシッと音がして、二人と一匹の体は痙攣し、倒れ、そして跳ね上がった。声は喉の奥に詰まった。雷撃、である。小さな雷に打たれたのだ。もう、誰も動くことなど出来なかった。

アーチェを包んでいた柱が崩れ、彼女はまったく無傷で現れた。唯一、箒に傷がついていたが、それはディオの秋沙雨をそれで避けたのだった。結局、彼の剣先はアーチェに掠りもしなかったのだ。
　空中にノルンが現れ、倒れている二人と一匹を見た。メルもディオも意識はあるが、体が痺れて声は出なかった。
「アーチェ・クライン、あなたの判断は？」
「これなら『精霊の試練』もバッチリ！――なんていってても信じない？　まあ、いい線いってるって。あとはだんだん強くなればいーんじゃん？」
「ありがとう、アーチェ・クライン。では、マナの解放のこと、よろしくお願いします」
「それはわかったけど、ところで、この女の子はどうして魔法がつかえるの？　この子たち、エルフの血なんかぜんっぜん流れてない、生粋の人族じゃん？　なんで？」
「……魔法をつかえるのがエルフ族だけではないことを、あなたはよく知っているはずですよ、アーチェ・クライン？」
「あー、まあ、そういえばいたわね。そんなのが」アーチェはうなじの辺りに手をやって撫でた。「でも、あいつのあれは、あたしたちが使う《魔法》とはちょっち違うんだけどな。ふうん……そういうことか」
「――はい」

「ま、いいや。で、ここに倒れてる連中はどうすんの？」
「回復したら、塔の外に送ってもらえますか？　後は自力で帰れるでしょう」
「あっそう」
「では、よろしくおねがいします」
ノルンは溶けるように消え、後には倒れて動けない二人と一匹と、偉大な魔女が残った。いつの間にか逢魔が刻は去り、窓の外では夜がその帳を広げつつあった。
「ふう……」アーチェはひとつ息をつくと、痺れたままのディオの側に行き、顔をのぞきこんだ。「あたし、これから御飯つくるんだけど、あんたたちもどう？　お腹すいてるんじゃない？　好きなもの教えてくれたら、つくったげるけど？　でも、デザートはフルーツポンチ、って決まってるけどねー」
こころなしディオの顔が青ざめたことに、アーチェは気がつかなかったようだ。ディオは何とか首を振った。
「そっか、まだ喋れないんだっけ」アーチェは立ち上がった。「じゃあ適当につくったげる」
もう一度、ディオは首を振ったが、気がついてはもらえなかった。頭を回すと、メルと目があった。彼女の瞳も恐怖に揺れていた。
『精霊の森の魔女』アーチェ・クラインには、勇者としての伝説の他に、もうひとつの伝説がある。かつて彼女は、勇者たちからこう呼ばれ、恐れられたという。

——殺人シェフ、と。
「ふ〜ん♪　ふんふ〜ん♪」
楽しげに鼻唄を歌いながら、アーチェは料理を始めた。
だが、メルとディオにとってその唄は、遥か地獄から響いてくる死神の口笛にしか聞こえなかった……。

「信じられるかい？　あの『精霊の森の魔女』に会ったなんて」ベッドに寝転がり、天井を見上げながら、エリックは感嘆の息を吐いた。「生きていたんだなぁ」
ファーメルの答えはなかった。彼女は机に向かって何かをしているようだった。だが、エリックは気にしてはいなかった。元々、独り言のようなものだったから。
「《時空転移》か……」
子供たちから聞かされた話を反芻して、エリックはまた息を吐いた。
メルとディオがクルールと共に帰ってきたのは、数時間前——午後の十時を回った頃だった。
帰宅した二人を、まず待ちかまえていたのは、ファーメルの力の籠った抱擁だった。
窒息してしまうところを危うく抜け出して、とにかく風呂に入って体の汚れを落としたいと言ったのはメル。ディオはレアバードの操縦で疲れたからさっさと寝たい、と主張したのだ

が、メルに風呂場に引きずられていってしまった。
　エリックは、ファーメルに奪われ、子供たちを抱きしめそこなった手のやり場がなかったが、きゅい、という鳴き声に相手を見いだし、クルールの頭を撫でてやった。
「おかえり、クルール」
　クルールは、もう、半分方眠っていた。毛皮にはシートベルトの跡がくっきりと残っている。抱き上げてやると、すぐに目を閉じて規則正しい寝息を立て始めたので、そのままソファに運んでやった。
　いつのまにか、ファーメルは台所に立っていた。ソファーに座ってクルールのお腹をしばらく撫でていると、そのうちに甘い香りがただよってきて、紅茶を淹れているらしい、とわかった。
「アップルティーかい？」
「ええ。蜂蜜を入れてあげれば、よく眠れるでしょう」
　――だが、そうはならなかった。
　風呂からでたディオは、すっかり目が覚めてしまったのか、その後、メルと共に延々と『魔女の塔』であったことを二人に語って聞かせたのだった。
「伝説なんていいかげんだよなー」と感想を述べたのは、アーチェの料理についてのことだ。
「《鍛冶屋亭》のランチに比べたら、ずっとおいしかったよ！」

「あそこのランチよりまずい料理なんかないだろう？」
「でも『殺人シェフ』だよ？　どんなすごい料理が出るのか、って思うじゃん！」
「じゃん？」これまでに使ったことのない言葉遣いだった。「で、どんな料理だったんだい？」
「えとね」とメルは小首を傾げた。「確か、『マーボーカレー』とか言うの」
「それがさ！」ディオは興奮して体をテーブルに乗り出した。「からくて、うまくて、からくて、うまくて、オレ、おかわりしちゃったよ！」
「実は、わたしも……」
「メルもかい？」エリックは驚いた。メルは元来、小食なのだ。「びっくりだな」
「アーチェさんの――というより、いまはもう死んじゃった、旦那さんの家に伝わっていた、秘伝の料理なんですって」
「でも、まともに作れんのは、それとフルーツポンチだけ、って言ってたよな！」
――と、そんな話がいくらも尽きなかった。
無論、真面目な話もいくらもあった。『精霊の試練』などは、その最たる物だ。《時空転移》、《時の剣》――眉唾ものの書物でしか見かけない単語が並んだ。無論、楽しい話題ではない。なにしろ《時を越える》のはエリックとファーメルの、愛しい子供たちなのだ。しかも、心を取り戻す方法というのが、十二の精霊と戦って、これに勝利することであったとは！　ノルンを呼び出すことができるなら、すぐに殴りつけてやりたい気分になった。

だがディオは、親の心配をよそに、いたって気楽な様子だった。
「大丈夫だよ。精霊の権威に紹介状も書いて貰ったから」
「誰だい、それは？」
「へっへー」ディオはポーチの中から封を施された一通の手紙を出そうとし、途中で止めた。
「……開けちゃ駄目だよ、パパ」
「わかってるよ」
頷き、そうしてテーブルに置かれた手紙の宛名を見て、エリックは叫び出しそうになった。そこにはこう書かれていたのだ——クラース・F・レスターへ、と。
「精霊を探しに過去に行くんなら、まずはこの人に会ったほうがいい、ってアーチェさんが教えてくれたの。頑固ものだけど、本当は優しい人なんですって」
メルはそう言って、エリックとファーメルに、だから心配しないで、と言ったのだった。
「時空戦士があの子たちを見守ってくれるなら、少しはましだと思おうじゃないか、ファム」
今度は妻に向かって言ったのだが、やはり返事はなかった。エリックは体を起こすと、ファーメルは何をしているのかと見た。彼女は、エリックが横になる前と同じく、机に向かって何かを熱心にやっていた。エリックは立ち上がると、妻の側に寄り、肩越しに手元をのぞきこんだ。
ファーメルは、小さなキャンバスに絵を描いていた。縦一五cm×横五cmといったところだろ

うか？　まだ下描きの段階だったが、何が描かれているのかは一目でわかった。
「アーチェ・クラインだね？」
「ええ、そう」鉛筆を動かす手を止めずに、ファーメルは答えた。「あの子たちの話を聞いてたら、何かの形で残しておかなきゃ、って気分になって……」
「わかるよ。けど、無理はいけないよ」
「ええ」ファーメルはそう答えながらも、鉛筆を更に動かそうとして、だがやめた。「そうね。今日はこのくらいにしておくわ。明日また、もっと話してくれるでしょうから。全部が終わるまでに、いったい幾つの絵が――」
ファーメルは不意に言葉を切ると、小さく首を振って、立ち上がった。
「ファム……？」
「なんでもないの」ファーメルはエリックの頬にキスをした。「もう寝ましょう、あなた」
思えば、それは予感だったのかも知れない、と後になってエリックは思った。
だが、ほとんどの出来事は、気づいたときには遅く、やり直しはきかない。
それが、歴史、というものなのだ。
過去への出発は、それから数日後だった。
「ここに《時の扉》を開きます」

再び現れたノルンがそう言って示したのは、ファーメルの描いた一枚の絵であった。輝きを主題にした連作の一枚で、太陽をモチーフにした作品だ。
旅立ちには、ふさわしい絵だと思えた。
「この絵に込められた『想い』が、二人の『錨』となります。この絵を扉にすることで、二人はどの時代に行っても、迷うことなくここへ帰ってくることが出来るでしょう」
メルとディオ、そしてクルールまでもが頷いた。
「では、絵の前に立ちなさい」
二人と一匹はノルンに促されるままに、太陽の絵の前に立った。いまさら両親と交わすべき言葉はなかった。別れなら、さんざん済ませた。無論、これを今生の別れにするつもりなど、誰の頭にもない。
ノルンがイーゼルにのった絵に軽く触れると、キャンバスが一瞬その身をよじったように見えたが、変わった所はなく、変化は誰にも見分けられなかった。それでも、扉は開いたらしい。
「さあ、いきましょう」
ノルンの言葉に、メルとディオは頷いた。二人は真ん中に立つクルールの頭の上に手を置き、空いている方の手の掌を絵に向かって突き出すようにした。
すると、絵の中の太陽が、まるで本物のように強い光を発し始めたではないか！

輝きが増していく中、メルとディオはエリックとファーメルを振り向いた。
「パパ、ママ、行ってきます！」
二人の声は、綺麗に重なって聞こえた。
次の瞬間、光が爆発した。
……そうして輝きが失われたとき、そこにはもう、子供たちの姿はなかった。

6　クラース

「転移に失敗したのかしら？」
メルは辺りを見回して首を捻った。メルとディオ、そしてクルールが立っていたのは、最前と少しも変わるところのないファーメルの工房だったのだ。違うところといえば、『太陽の絵』がないこと、それに父と母の姿が見えないことだった。
「ねえ、どう思うディオ？」
「ち、ちょっと待ってくれ……気持ち悪い……」
「きゅう……」
「あら」
見れば、ディオとクルールは床に伸びていた。クルールは動物の常でよくわからなかったが、ディオの方は相当に辛そうで、顔色も青白かった。
「時間に酔ったのですね」どこからかノルンの声がしたが、姿は見えなかった。「メル、転移は成功しました。いまはアセリア暦四二〇三年……あなたたちの時代から遡って二〇五年前で

す。体ひとつではいろいろと不便でしょうから、館の影も共に転移させました。館の中のものは、元の時代にいた時と同じようにつかえますが、この時代に人々には、この館の姿は見えません。……もっとも、いまこの島に住んでいるのは、地底に居を構えた極少数のドワーフ族だけですから、見つかる心配はないでしょうが」
「わたしたちは、まずどうすれば……？」
「アーチェ・クラインの勧めに従い、時空戦士の一人、クラース・F・レスターに会うのがいいでしょう。彼はいま、北ユークリッド大陸の中央辺りにある、ユークリッド村にいます」
「ユークリッド村？」
「あなたたちの時代でいうなら、ユークリッド王都のある辺りです。レアバードを製作した『ユークリッド国営科学アカデミー』は、クラース・F・レスターが開いた『クラース魔法研究所』の後の姿なのですよ」
「へえ……」
「しかし」ノルンの声が急に厳しいものになって、メルは緊張した。「この時代の人々に未来のことを教えてはいけません。クラース・F・レスターにはわたしから最低限のことは話しましょう。けれど、それ以外のことは、黙っていてください」
「どうしてですか？」
「未来を変えてしまう可能性があるからです。例えば、成功を目指して努力している人が、そ

れがむくわれないのだと知ったら、努力を続けると思いますか？」
　メルは首を振った。失敗するとわかっていて、どうして続けられようか。そんなことはできないだろう。――もっとも、その人が、未来から来た、などという話を信じるのならの話だけれど。「でも、むくわれないなら、早めに気持ちを切り替えることは、その人にとってはいいことじゃないんですか？」
「歴史とは、複雑に織りあげられたタペストリーのようなものです。一見、無関係に思える糸と糸も片方が切れればもう片方も崩れてしまう……。メル、あなたのいうように、むくわれない努力を続けることは、当人にとっては辛いことでしょう。結果がでたとき、後悔し、絶望するかもしれません。しかし、その人の努力はその人だけのものではないのです。後に誰かが引き継ぐかも知れません。その人の努力する姿を見て自らも努力した人が、大きな成功を残すかも知れません。けれど、未来の結果を教えた為に、その人が努力を放棄してしまったら……そうした可能性の全てが消え、まったく違う未来が生まれることになるのです」
「未来が変わってしまう……そういうことですね？」
「……少し違います。未来が変わることはないのです。ただ新しい未来が生まれるだけ」
「え？」
「歴史とは一本の樹。未来とは天に向かって伸びる枝。増えすぎれば樹そのものが倒れてしまうことになる」

「あの……よくわからないんですけど」
メルが苦笑すると、ノルンの困ったような感情が伝わってきた。
「少しお喋りが過ぎたようですね。……メル。あなたたちがすべきことは、精霊に会い、本当の自分を取り戻すこと。してはならないことは、歴史に干渉することです。それだけは憶えておいてください」
「はい」
「ディオにもよく言い聞かせておいてくださいね。彼はあなたより直情的ですから……」
気配が薄れ、ノルンが去ったのがわかった。辺りには静寂が満ちて、自分たちの他に人の気配は感じられなかった。ノルンは、ここは館の影だとかいっていた。思うに、アセリア暦四四〇八年と四二〇三年に、同時に館が存在するようにしてくれた、ということなんだろう。
(そうじゃなかったら、パパとママが困るものね。……あれでいろいろと気を遣ってくれているのかしら？)
「……うっせーよ、お化けのくせに」
足元で声がして、見れば、ディオがいつのまにか半身を起こしていた。顔色はまだよくない。《なりきり師》を始める前に、家族で船で旅行に出かけたときの様子にそっくりだった。あの時もディオは船に酔ってうんうん唸って、楽しむどころではなかったのだ。
「飛行機は酔わないのにねえ」

「なんのことだよ」
「別にー」メルはしゃがんで、起き上がろうとしていたクルールに手を貸してやった。こちらも尻尾が下がったままな所を見ると、まだ回復してはいないらしい。「これじゃ、いますぐ出発って訳にはいかないわね」
「オレなら平気だよ！」
「クルールが心配なの。ディオと違って調子の良し悪しが、ぱっと見てわかるってわけじゃないんだから」
「んだよ、冷てーやつ！」ディオはまた床にごろりと仰向けになった。「あーあ、なんか実感わかないよなー。ここが過去だ、っていわれても」
メルも腰を下ろし、開いた足の間にクルールを座らせてその背中にもたれるようにした。
「外にでればわかるんじゃない？　あのユークリッドの都が、まだ村だっていうんだから。……それに、その村には、あのクラース様が住んでらっしゃるのよ！」
「メルはあのおっさんのファンだもんな」けけけっとディオは笑った。「クラースさまぁ、ってか？」
「おっさんいうな！」メルはディオの足を殴ろうとしたが、避けられてしまった。「まだ二十九よ！」
「残念でした。いまは四二〇三年なんだろ？　ダオス戦役から一年たってるんだから、三十だ

よ三十！　ひゃー、おやじ！」
「うるさい！」
「いてえっ！」
　今度は狙いを外さず、メルは、ディオのふくらはぎを思いきりつねってやった。
「いってえなあ」ディオは体を起こして足をさすった。「……へん！　でも残念でした！　クラースにはミラルド、っていう人生の相棒がいるんだから、いくらメルが憧れたって駄目さ！　あきらめろ、あきらめろ」
「はーん……なんだ、そういうこと？」メルはクルールの背中に顔を乗せてディオを向いた。
「ディオは、わたしがクラース様に夢中だと思って、やきもち妬いてるんだあ」
「なっ……ば、ばっかじゃねえ!?　んなわけあるかよ！」
「照れちゃってまあ」メルは瞳を細めて、うふふ、と笑った。「まったく、あまえんぼさんなんだから」
「言ってろ、馬鹿！」ふくれてディオはメルに背を向けた。
（まったく、もう）メルは、小さくため息をついた。「……あのねディオ。わたしがクラース様に憧れるのは、その学者としての姿勢・精神なの。それだけよ」
「……ほんとうかよ」
「ほんとうだって！　たった二人の姉弟でしょ？　おねーちゃんの言うことを信じなさいよ」

メルは、こつん、とディオの頭を叩いた。「わかった？」
「一応、信じといてやるよ！」
言うや、ディオは急に立ち上がると、止める間もなく駆け出して、工房を出て行ってしまった。ちょっと探検してくる、という声が、遠くなりながら聞こえた。
「もう……しょうがないやつだよねえ、クルール？」
メルはクルールを後ろに転がして抱きかかえると、白いお腹を掻いてやった。黒珠の瞳が気持ち良さそうに閉じる。
ディオが自分に依存している部分が大きいことを、メルはわかっていた。だが、それはメルも同じだった。どこか深いところで、最後は結局二人だけ、という思いがある。昔から仲はよかった（喧嘩をするのも仲がよいからだ）が、自分たちが拾われ子だったと確認してからは、ますます互いを大事に思うようになった。
（多分、不安なんだろうな）とメルは思う。（パパもママも愛してくれているけど、もっと形のある結び付きを、わたしたちは求めてるんだわ。わたしとディオの間には、それがある。血で繋がっている。目で見える、科学的に確かめられる、確かなもの。だからつい、よりかかってしまうのかも……）
クルールに下から見つめられていることに気づいて、メルは頭を振った。すぐに理屈っぽく考えるのは悪い癖だった。

「わたしたちもいこうか、クルール」
「うきゅ」
メルはクルールの頭をぐりぐりとなでると、立ち上がって弟を探すために歩き出した。

その日の昼過ぎ、二人と一匹はユークリッド村を目指して出発した。
ユークリッド大陸までは、レアバードで目一杯に飛ばしても三日はかかる。しかも出発は午後であったので、まずはフレイランドを目指すことにした。
この時代すでに、オリーブ村があることは記録からわかっていた。四四〇八年になっても、村のままであるというのは、ユークリッド村に比べると随分な違いようだが、それだけに村の雰囲気は、二〇〇年の隔たりを感じさせないところがあった。
二人と一匹は、自分たちの時代では村の集会所となっている、宿屋『ハンバーグ』に一泊した。心配だったのはお金だったが、金の価値は時間を越えてもほとんど不変だったので、持ってきた砂金で事足りた。
翌、早朝、まだ砂漠が暑くならないうちに彼らは村を出、少し離れた所でレアバードに乗り（これも秘すべきことのひとつだったので）、こんどはアルヴァニスタ王国を目指した。
アルヴァニスタ王国は、モーリア大陸とユークリッド大陸の間の島大陸に王都がある。大陸、というには小さな大地だったが、モーリア大陸とユークリッド大陸とを陸路で結ぶ重要な

拠点であり、港も発達していたので、両大陸の物資の流通の重要な場所として、島は早くから発展を遂げていたようだ。
埃を被っていた本を開いて解説した。「アルヴァニスタ王国のルーングロム大臣は、ハーフエルフですって」
「エルフ族とも交流があるのね」とメルはオリーブ村の雑貨屋『テンダロイン』で買った、
「へえ。じゃあ、パパたち、会ったことあるかも知れないな」
「どうかしら？　《大消失》でエルフ族ってほとんどの魔法が使えなくなって困ったってローカス先生がいってたじゃない？」
「だから《大消失》の犯人かも、っていう疑いが晴れたんだろ？」
「そうだけど、魔法を買われて仕事をしてた人達は、皆、働き口を無くしたって話、憶えてる？　この本によると……えーと『ルーングロム大臣は宮廷魔術師としてその能力を』って書いてあるから、罷免されたんじゃないかな？」
「でも、アルヴァニスタ王家って、エルフ族の血が流れてるんじゃなかったっけ？」
「魔術で国を治めてるわけじゃないんだから、王家には関係なかったんじゃない？」
「きっついよなー、メルの見方って」
「的確といってよ」メルは本をポーチにしまった。「でも、この大臣さんも、一五〇年も後に、突然、魔法が使えなくなるなんて思いもしないわよね。いま、それを知っていれば——」

「でも、教えちゃいけないんだろ？」
「うん」メルは頷いた。「ノルンが言ったことがどこまで本当かはわからないけど、可能性としてあいうことが起こるっていうのはわかるからね。歴史をいじるなんて、怖くて出来ないわ」
それにはディオも同意した。
二人と一匹は夕刻にアルヴァニスタの都に到着した。彼らは『アルヴァニスタＩＮＮ』という捻りも何もない名前の宿屋をその日の宿に決めた。さすがに王都であり、非常に活気があって、許されるなら色々と見て回りたかったが、どこでどんな影響が出るかわからないと考えると、迂闊に歩き回ることは出来なかった。
それでなくても、クルールは目立つのだ。宿屋につくまでにすでに三度、おそらくは貴族の召使いらしい人間から声をかけられて、譲って欲しいとしつこく頼まれた。
「王様の耳にでも入ったら厄介だからね」
メルはクルールによくいい含めて宿に残し、ディオと共に買物に出、『食べすぎ』という名の大型小売店で夕食と明日の朝の分の食材を買って急いで宿に戻った。幸いにも、クルールは部屋でおとなしくしていた。料理人の衣装を着て《なりきり》、宿の厨房を借りて食事をつくって済ませ、早々にベッドに入ったが、なかなか眠れなかった。なにしろ明日はいよいよユークリッドなのだ。

「……ねえ、ディオ」と窓の向こうの月を見上げながら、メルは言った。「勇者たちが、この国の王子が魔物に操られていることを見抜いて、自分たちでこれを解放した、って物語、憶えている」
「ん……憶えてるけど？」
「彼らが、その計画を練ったのって、都の宿屋だったじゃない？　この部屋だったのかな、って思って」
「馬鹿くさ」ディオは毛布を巻き付けると、背を向けてしまった。「オレ、もう寝るからな。操縦しっぱなしで疲れてんだよ」
「なによ」
メルは少しふくれると、再び月を見上げたが、そのうちに眠れたようだ。
翌朝は、二人とも、随分と寝坊をしてしまった。朝食と昼食が一緒になるような時刻である。厨房ではもう片付けも済んでいて、そこを借りて遅い食事をつくって済ませ、それからアルヴァニスタを後にした。
あとはユークリッドまで休みなく飛べばいい。とは言え、アルヴァニスタを出発したのが昼過ぎだから、到着は夕刻近くになるはずだった。
一直線に飛んだので、途中、見えたのは海ばかりだった。何隻かの帆船が海原を行くのを見かけたが、降りるような真似はしなかった。向こうの見張りに見つかったとしても、おかしな

鳥だ、くらいにしか思われなかったはずだ。レアバードは、そういう形をしている。
「メル、村が見えた！　あれじゃないか!?」
ディオがそう訊いてきたのは、太陽が西の地平にその縁をつけ、辺りを炎の色に染め始めた頃だった。見れば、確かに小さな点の集まりのような集落が見えた。辺りの景色にも見憶えがある。ひとつふたつ、山の形が変わっている所もあるが、見憶えのある、ユークリッドの景色だった。
「降りるぞ、メル」
「うん」
操縦桿を倒し、緩やかな弧を描きながら、ディオはレアバードを下降させていった。
「田舎だなあ……」
と言ったディオの言葉に、メルも思わず同意してしまってからあわてて、素朴でいいところじゃない、と付け加えた。
ユークリッド村は、オリーブ村やアルヴァニスタがほとんど変わらぬ姿であったのに対して、余りにも違いすぎた。村には家が五軒しかなく、人口はどう多く見積もっても二十五人は超えないと思われた。これが二〇〇年後には、アルヴァニスタに匹敵する王都に変わっているなどと、ここに住んでいる誰が考えるだろう。

「さて、どうする？」
クルールを布に包んで背負ったディオが訊いた。包んでいるといっても、顔と手は外に出ている。そうしていると思惑通り、動物には見えなかった。まさに、ぬいぐるみである。最初、ディオは嫌がったのだが、さすがにメルが担ぐにはクルールは重いので、渋々承諾したのだった。
「陽が暮れないうちに、さっさとしようぜ」
「とりあえず、誰かに訊いてみましょ。——あの、すいません！」
メルは、買物籠を下げた婦人を見つけると、そっちへ小走りに駆けていった。
ひとり（と一匹）残されたディオは、閑散とした村の様子を眺め回した。村は、丘の途中といった場所に段差を利用して家が建っている。家はどれも木造で、内の二軒だけが壁を土壁にしていて、屋根は揃って藁葺だった。
（昔は贅沢じゃなかったんだよな）
屋根を見て、ディオはそんなことを思う。四四〇八年では、藁葺の屋根の家などというのは、贅沢な貴族の趣味なのだ。葺き替えに大変な手間と金がかかる上、良質の藁自体が手に入り難いからだ。しかしこの村の人に、あなたは大変贅沢な暮らしをしていますね、などと言っても通じないだろう。
（価値なんて、わかんないもんだよな……金だけは変わってなかったけど）

メルはまだ話している。クラースの家を訊くだけなのに、どうしてああも時間がかかるのか、ディオにはわからなかった。様子から見て、会話は弾んでいるようだ。

　と、ディオのマントを引っ張る者があって、振り向くと、この村の人間であろう少年がディオを見上げていた。八歳くらいだろうか？　茶色の髪に、葉っぱがくっついている。

「お兄ちゃん、誰？　旅の人？」

「あ？　あ、ああ、そうだよ」ディオは戸惑いながらも答えた。「ほら、あそこのお姉ちゃんといっしょに、旅をしてるんだ」

「どこにいくの？」

「あー……行く、んじゃなくて、来た、んだよ」

「？」

「えー……つまり、お兄ちゃんたちは、クラース・F・レスターさんを訪ねてきたんだ。わかるかな？」

　少年は、あけすけな笑顔を見せた。前歯が一本抜けていて、愛敬のある顔だった。「知ってるよ！　クラース先生でしょ！」

「先生？」

「うん！　クラース先生は、学校の先生なんだ！　来年になったら、僕も勉強するんだよ！　でも、それまではいっぱい遊ぶんだ！　お兄ちゃん、クラース先生の学校に行くの？」

「あー……お兄ちゃんは、もう学校は卒業したからね。その……クラース先生の家を知ってるかい？」
「だから学校でしょ？——こっち！」
少年は、ディオのマントの裾を持ったまま、歩き出した。
「あ、おい、ちょっと……」引きずられるように歩きながら、ディオは振り返った。「メル！来いよ！」
メルがこちらを見て、それから婦人に頭を下げて駆けてきた。
「なに？」視線がまず少年に、それからディオに向けられる。「どうしたの？」
「この子が、つれてってくれるってさ。——メルはなに手間取ってたんだよ？」
「なんか、今日の夕食の話とか始まっちゃって……」
「なんだそれ？」
「なんにしても、呼んでくれて助かったわ」
少年は、二人の会話には特に興味を示さず、丘の上に続く路を登りながら、道々、家が見えると、聞かれるまでもなく色々と話してくれた。
「ここはね、おいしい食べ物をたくさん売ってるお店なんだ『ベジット』っていうんだよ。前は野菜しか売ってなくて、僕、苦手だったんだけど、ナンシー姉ちゃんがベネツィアにお嫁に行ってからは、マギーおばさんが色々おいしいものを売るようになって、いまは大好きなん

だ！　——あっちのお店は、なんでも売ってる『ビショップ』ってお店。半年前までは隣に『猫目』って名前のお店があったんだけど、ひとつのお店になったの。それでね『ビショップ』にはね、いま面白いお姉ちゃんが、いそうろう、とかいうのしてるんだって！　洋服を作るお店を出す修業だって、母さんが言ってたよ！——あ、あそこ！」

少年は、村の最上段に建つ家が見えると、マントを離し、そこへ向かって駆けだした。

「皺になっちゃったよ」笑いながら言うと、

「まあまあ、いいじゃない、そのくらい」メルもディオの肩を軽く叩いて笑った。

二人（と一匹）は、少年の後についていった。彼の目指した家は、村で一番大きいようだ。自宅と学校を兼用しているから、これほどの広さが必要なのだろう。

と、少年がたどりつく前に、扉が開いて中から女性が現れた。

「ミラルドせんせー！」

少年がそう呼びかけると、女性は彼を認めてにっこりと微笑んだ。

（うわ）ディオが思わずどきりとするような、柔らかく優しい微笑みだった。（この人がミラルドさん、か）

クラース・F・レスターの良き伴侶にして助手。そして、魔法素を始めとする様々なエネルギーの研究における名著を多く残した、エネルギー理論の第一人者。彼女の名前は、ある意味ではクラースよりも高い。二〇〇年後の未来において、クラースは勇者として名を残している

が、ミラルドは科学の基礎を築いた科学者の祖、エネルギー革命の救世主として、学会で燦然と名を馳せているのだった。

彼女が最も注目を浴びたのは《大消失》によって魔法素が失われたときだった。わずか三十年で代替エネルギーを《大消失》以前にまで持って行くことが出来たのは、その実現に必要な基礎研究が、彼女によってすでに成されていたからであった。

もちろん、エリックの部屋にも彼女の本が並んでいる。

（サインもらったら、パパ、喜ぶかな？）

ディオは、あとで頼んでみよう、と思った。

ミラルドは腰を落として少年と同じ目線の高さになると、彼の頭を撫でた。「パック、どうしたの？」

「お客さん！」

パックはディオたちを指さし、ミラルドは二人（と一匹）を振り向いた。

ディオたちは軽く会釈をすると、彼女のところへ歩いていった。近くで見ると、ますます綺麗な人だとわかった。

「こんばんは。旅の人ね？　この村にいる間だけ、勉強をしたいという人は多いから、そんなに固くならなくても大丈夫よ。ここの生徒は皆いい子だから」

「あ、いえ」話がおかしな方へ向かいそうだったので、ディオは慌てて言った。「すみませ

ん、そうじゃないんです。オレたち、クラースさんにお会いしたくて……」
「あ！　ごめんなさい。可愛いお客さんだから、てっきり学校の方の用事だと思っちゃって――さあ、どうぞ。あの人は中にいますわ。パック、ありがとう。さあ、もうお家におかえりなさいな。そろそろ夕飯でしょう？」
「うん！　さよなら先生！　さよならお兄ちゃん、お姉ちゃん！」
パックはそういうと、大きくひとつ手を振り、あとは一度も後ろを振り返ることなく、丘の道を駆け降りていってしまった。
ミラルドは、少年の姿が見えなくなるまで見送って、それから家の扉を開け、二人（と一匹）を中へと通してくれた。
「クラース！　お客さんよ！」だが、誰も答えない。「……もう、しょうがないわね。ごめんね、ちょっと待っててね」
ミラルドはそう言い置くと、家の奥へと行ってしまった。
「私に客だって？」と声が聞こえた。「アルヴァニスタの連中なら会わないと言ったろう？」
メルが緊張したのがわかった。もちろんそれはディオも同じである。低いが、よく通る声だった。
「そうじゃないのよ。可愛らしいお客さんなんだから」
「まったく……なんだっていうんだ。これから出かける所だというのに」

声が近付き、そうして壁の向こうから『彼』は現れた。

メルとディオは、まずその鋭い目に射抜かれた。

人族には使えない魔法を使いこなすべく研究を重ね、ついに古代ドワーフ族が使っていた『召喚術』を発見し、これを復活させた、世界で唯一無二の『召喚術士』の瞳である。抗しうることなどできるはずもない。

六勇者の中で、最も年長だったクラースは、成熟した大人としての判断で暴走しがちの若い勇者たちをまとめ、成長へと導いた影のリーダーと評されている。

伝説が真実なら、冥界の王さえも従えたといわれる、人族最強の魔法使いだ。

だがなぜか、ディオたちの時代には『召喚術』は失われており、学会では、その実践すらも怪しまれていた。伝説は伝説、というわけである。

もちろん、すでに生きた伝説の一人であるアーチェに会っている二人が、クラースを疑うはずもなかった。

「誰だね、君達は？」とクラースは二人を見て訊いた。

容貌は、伝えられる通りだった。精悍な顔の目の下には隈取りがされ、袖のない前袷の服から覗く両腕、足首には古代の文字のようにも見える紋様が《刺青》されている。頭には、出かける所だったという言葉を証明するように、コインを貼り付けた鍔広の帽子が乗っている。短ブーツや、指の部分を切ったグローブをした手首には、鳴子が下がって、動くたびに乾いた音

を立て、奇妙な形のマントが翻った。
「あ、あの」喉が変に渇いている。言葉がからんでうまく出てこない。「オ、オレたちは、その——」
「この村では見かけない顔だが……どこかで会ったことがあったかな？」
「あのっ！　すいません、これをっ！」うわずった声で言いながら、メルはポーチから手紙を出した。アーチェ・クラインからの手紙である。自分たちが何者なのかとか、時間を越えたいきさつをここでしどろもどろに話すより、よほど説得力があるはずだった。「し、紹介状ですっ！」
「ん？」
差し出す手が震えている。ディオも心臓がどうかなってしまいそうだ、と感じた。
男性にしては繊細な指が、自分の名が宛名書きされた手紙を受け取る。裏に返したとき、気難しそうな形の眉の片方がわずかに上がった。
「ミラルド」封書の裏に目を落としたままクラースは言った。「出かけるのは取り止めだ。急で悪いが、夕食は四人分——いや、その子が背負ってる奇妙な動物の分も合わせて五人分、頼む」
「はい」ミラルドは頷き、それから双子たちを向いて微笑んだ。「ミートパイを作るわね。それでいいかしら？」

ミラルドの言葉がわかったのか、それまでおとなしくぬいぐるみに《なりきって》いたクルールが、短い手をあげて、「うきゅ」と答えた。
「君達は未来から来たのだな」そう双子に言って、手紙をテーブルの上に置くと、クラースは、遠い思い出を懐かしむような微笑みを浮かべた。「アーチェは相変わらずのようだな」
「信じてもらえるんですか……？」おずおずとメルが訊く。「その……わたしたちのこと？」
「ああ。この手紙を見れば疑いようもないさ。私が後世まで頼んだことについて、さんざん文句を言っているよ」ぱん、と手紙を叩く。「まったく、あいつにしてみれば二百年ぶりの友への手紙だろうに、まるで昨日今日別れたかのような調子だ」
「えっ！　未来のことが書いてあるんですか⁉」それはノルンに禁じられたことだ。思わずメルは席を立っていた。「どうしよう……」
　メルの心配を癒すように、クラースは優しげな笑みを浮かべて彼女を見た。「ああ、大丈夫だよ。ここに書かれているのは、私の計画が、未来でもちゃんとうまくいっているという報告だけだ。それにその計画はすでに済んでしまったものだからな。これから先、手を加えなければ未来が変わることはないさ。忘れて貰っては困るな、メル。私はかつて未来へ旅した男だ。そのくらいのことはわきまえているよ」
「ご、ごめんなさい、取り乱したりして」

顔から火が出る思いでメルは椅子に座り直した。隣でディオが小声で（ばーか）とからかってきたが、相手をする余裕はなかった。
メルの目の前には、湯気を立てる紅茶のカップが置かれている。心を落ち着かせるために、メルはカップを両手で挟むようにして持ち、レモンを垂らしたそれを飲んだ。温かさが喉を落ちて、体中に染みて行くのがわかる。
テーブルには、まだ少しミートパイが残っている。表面は飴色にこんがりと焼けて、中に濃厚な味の、肉と野菜のペーストが詰まった特大のパイ。デザートはアップルパイだ。あっさりした甘さの、これも素晴らしい味で、これほどのパイは、ユークリッドの都でもお目にかかったことはなかった。
そのふたつをお腹いっぱいに食べて、クルールはメルの足元で仰向けになって転がっている。一目でクルールをぬいぐるみではないと見抜いたのはさすがだった。どうしてわかったのか訊くと、生物と非生物の区別ぐらいわかるさ、と何気ない様子で言ったが、鋭い観察眼あってのことだろう。
あのあと二人は、レスター邸の空いている部屋に通された。二人だけで来たのだと話したところ、泊まって行くように勧められたのだ。この村にも宿屋はあったが、勇者の家に泊まれる幸運などありえない体験であったから、申し出に甘えることにしたのだった。
部屋はいっしょだったが、ベッドは別だった。その部屋で二人と一匹は夕食の準備が整うま

でほとんど会話もなく過ごし、テーブルについてからは、とにかく夢中で食べ、満腹になってようやく、家を訪ねてからずっと続いていた緊張も和らぎ、話が出来る心持ちになったのだった。

故に、そのすぐあとのはやとちりは、泣きそうなくらい恥ずかしかったが、ミラルドの淹れてくれた紅茶の香りがそれを静めてくれた。

（クラースさんは、やっぱり大人だわ）カップで顔を半分隠すようにして、メルは偉大な召喚士の顔を盗み見た。（あんなに取り乱しちゃったのに、笑いもせず、優しく諭してくれて……）

クラースは手紙をミラルドに見せながら彼女に、メルにはわからない思い出話を聞かせている。ミラルドのクラースを見る目はとても優しい。二人の間に流れる空気は、エリックとファーメルを思い出させた。

（やきもちなんかやくなよ）

こそっとディオが囁く。横目で見ると、どうしようもない悪餓鬼の顔をしていた。

鼻を鳴らして、メルは無視した。……しかし、そろそろ話を先に進めてもいいだろう。メルは紅茶をもう一口飲んで喉を湿らせた。

「……あの、クラースさん」

「ん？」クラースは手紙とミラルドから顔をあげると、メルを向いた。「ああ、すまない。つい昔話に夢中になってしまったよ」

照れたような笑い顔も格好いい、とメルは思ってしまう。「いえ、いいんです。それで、あの、精霊のことなんですが……力を貸してもらえますか?」

「そうだな……アーチェの推薦もあることだから構わんが――何にしても今日はもう遅い。詳しいことは明日にした方がいいだろう。気をつけてはいるんだが、私の話は長くなりがちだから、こんな時間に聞かされたらきっと眠ってしまうだろう」

「そんなことありません!」メルは首を振った。「でも……そうですね。わかりました、明日にします」

「なんでオレを見るんだよ」

「別に」

「ちぇ――猫かぶり」

メルはテーブルの下でおもいきりディオの足を踏みつけた。

ディオは、声にならない悲鳴をあげた。

書斎の扉が開いて、ミラルドが顔を出したのは、午前零時を回った頃だった。

彼女はすでに寝巻きに着替えていて、その上にカーディガンを袖を通さずに羽織っていた。

扉は半開きにしたまま中に入ってくると、本の山で足の踏み場もない部屋を器用に渡ってきて、クラースの肩に手を置いてさするようにした。

「あの子たちはもう寝たのか？」ミラルドの手に自分のそれを重ねて、クラースは訊いた。
「もうぐっすり。……ねえ、思い出さない？　クレスさんたちのこと」
クラースは柔らかく微笑んだ。「私もそれを考えたよ。クレスとミントがやってきた時もあんな風だった、とね」
「きっと、村を建て直すために、頑張ってるんでしょうね」
「くそ真面目なくらいに、な」クラースは笑った。「チェスターもあれで根はクレスに似て一本気だからな――チェスターのことは話したな？」
「ええ。クレスさんの親友でしょ？」
「そうだ。……クレス、ミント、チェスターの三人が造る村だ。きっと酒場やカジノなど絶対にできないぞ。真面目村、と命名したほうがいいな」
ミラルドはくすくすと笑った。「クレスさんたちが聞いたら、気を悪くするわよ」
「聞かせられたらいいんだがな……」
ふっ、とクラースの微笑みが僅かに曇り、ミラルドの手が優しく肩を揉んだ。
「――あなた、まだ寝ないの？」
「もう少ししてから行くよ」彼女の手をとり、指と指の間の付け根に、軽くキスをする。「先におやすみ」
「わかった。あまり無理しないでね」

ミラルドはすばやくクラースの耳にくちづけると、カーディガンを翼のように翻して部屋をでていった。

「まったく……」

唇の温もりが残る耳をさすりながらクラースは苦笑した。

だが、彼女の足音が廊下を遠ざかり、聞こえなくなると、不意に表情が引き締まり、怖いくらい厳しい顔になった。そして、

「盗み聞きは感心しないな」

と誰もいない部屋に向けて言った。

すると、書斎の一部が、蜃気楼であるかのように揺らぎ、それは次第に形を変えて、遂には、巨大な鳥の翼を持つ人の姿になった。

「あなたが……クラース・F・レスターですね」

「君は、ノルンだな？――なるほど、アーチェが書いてよこした通りだな。精霊のようだが、どこか違う」

「偉大な召喚術士、クラース・F・レスター……あなたにお願いがあります」

「だろうな」クラースは薄い笑みを浮かべて、ノルンを見上げた。「聞こう」

ぶるっ、と震えて、ディオが目を覚ましたのは、紅茶を飲みすぎたせいに違いなかった。

「うう……トイレトイレ」
暗い中、足先で靴を見つけ出して履き、クルールを踏まないようにして部屋を出た。扉が軋んだときに、メルが寝返りを打ったが、目は覚まさなかったようだ。
暗い廊下を、騒がしくならないように、しかし出来るだけ急ぎながら、トイレへと向かったディオだったが、明かりが洩れていた部屋の前で、ふと足を止めた。聞き憶えのある声がしたのだ。
「……あの二人は、大きな罪を背負っている……す。六人の時空戦士の中……わかってもらえるはず……F・レスター」
ディオは、そろそろと部屋の中を覗きこみ、声の正体を知った。
（ノルンだ！）
間違えるはずもない。空中に浮いて祈りの形に手を組み、そして透けた体の向こうには、クラースが肘掛け椅子に座って彼女を見ていた。
「クラ……の矛盾は……」
「……れは理解できる。私自身、時空を越え、未来を見たのだからな。……ダオス⁉……オスが、どうし……」
二人の会話は、よく聞こえなかった。特にノルンの声はほとんど聞き取れない。だが、何か重要な話であろうことはわかった。なにしろ、あの魔人の名前がクラースの口から出たのだか

ら。

ディオはトイレのことも忘れ、息を殺して、何とか話の内容を聞き取れないかと耳を澄ませた。だが、どう頑張ってもノルンの声はそれきり聞こえず、クラースの言葉だけが何とか聞き取れた。

「そんな！……そうか……マナ、か。だが、余りにも酷い。……いや、そうだな。君のいうことはわかる。これが君の最大限の譲歩なのだろう？……った。協力しよう」

（何の話だ？）ディオは首を捻った。（オレたちのこと……だよな？　でも、なんで、魔人の名前が出てくるんだ？）

その時、再び震えが来て、ディオは小さな音を立ててしまった。ディオは見つかったかどうかの確認などせず、音を立てずに、しかし迅速にクラースの書斎を離れ、あとは一目散にトイレをめざして急いだ。

（やばいっ！）

見つかったか、ではない。トイレである。思い出してしまえば、もう我慢できる状態ではなかった。

十三にもなって『おもらし』などしたら、そしてそれをメルに知られたら、一生言われ続け、二度と頭が上がらないに違いなかった。

7　解放

「昨夜、ノルンと名乗る存在が現れた」
とクラースが言ったのは、朝食の済んだテーブルでだった。ちらり、と彼の目が自分に向いたとき、ディオは堂々としていたが、掌はびっしょりと汗をかいていた。
「じゃあ、詳しいことを——」
「訊いた。——まあ、大体はアーチェの手紙に書いてあったのと同じことだったよ」
「それで……お気持ちは変わりませんでしたか？　あの、協力してくださる、と昨日は言ってくれましたけど……」
「それは変わらないさ」
こともなげにクラースは言い、メルは心底、安堵した表情を見せた。
「よかった」
「しかしその前に、少し聞かせて欲しいんだが」
「なんでしょう？」

「君達は『ダオス戦役』について、どの程度の知識を持っているんだ？——いや、正確には、後世の歴史家は、彼の戦役をどういう風に伝えているのか聞かせて欲しい」
「でも、それは——」
「ノルンの許可はとっている」言い澱むメルにクラースは言った。「それに、どう伝えられていようが、歴史の編纂に口を挟むつもりはない。私はただ、人族の未来でのありようを少し知りたいだけだ」
　メルとディオは顔を見合わせた。「じゃあ……」
「聞かせてくれ」
「そんなに詳しいことが残っているわけじゃありません」メルはクラースの反応を探るように始めた。「クラースさんたちの戦いを『ダオス戦役』と呼ぶ人も、わたしたちの時代ではほとんどいません。一般的には『聖勇者物語』とか『世界樹物語』とか呼ばれています。世の中にはクラースさんたちの戦いを書いた小説とか芝居とかがたくさんあって、本当の所は誰にもわからなくなってます」
「芝居の話はとりあえず置いておこう。君達も歴史は習ったのだろう？　そこでどう習ったのか教えてくれ」
　メルは頷いた。こういうとき、ディオに出番はない。少年は靴を脱ぐと、床に寝転がるクルールのおなかをぷにぷにと押しながら、メルに任せた。その辺は、彼女も心得ている。

「わたしたちが習ったのはこんなところです。——アセリア暦四一〇〇年代後半に突如現れたダオスという男が、ヴァルハラ平原に城を構え、全世界に宣戦を布告した。後に、ミッドガルズ王国、アルヴァニスタ王国は連合してダオスに対抗するも、ダオスは人族でもエルフ族でもない、恐るべき魔人であり、通常の武器ではまったく歯がたたなかった。だが、どこからか現れたクレス・アルベインという剣士とその一党がこれを退け、世界は救われた。その後、魔人ダオスは二度姿を現し世界に危機をもたらすが、アセリア暦四三五四年、四二〇二年に魔人を退けた人物と同じ名前の剣士によって、ついに討ちとられた——」

「なるほど」クラースの反応は、ため息だった。「歴史は勝者の作るものだというが、まさにその通りだな」

「違うんですか？」

「大筋はあっているが、肝心な所がすっぽりと抜けている。つまり『理由』だな。……君達の時代の歴史では、四二〇二年にミッドガルズ王都の半分を焼き尽くした『事故』については、どう語られているんだ？」

「『事故』……ですか？」メルは首を捻った。「もしかして、ダオスの強力無比な魔法によって三万の人々が灼き殺された、っていう逸話でしょうか」

クラースの眉が不快そうにあがった。「やはりそうか。いいかね？　それは大きな間違いだ。あれをやったのはダオスではない。王都の半分を焦土に変え、三万の人間を殺したのは、

人族とエルフ族が造った兵器なのだ。ダオスに対抗するために造られた兵器が、大戦中、最も多くの死者を生んだ。皮肉じゃないか。いいかね？　後に、ミッドガルズは滅ぼされるが、彼の国が何の罪もなく、ダオスが情のかけらもない残虐非道な魔人なのか、と問われれば、私は『否』と答えるだろう」
「ダオスにも理があったというんですか？」
「そうだ。ダオスは奴なりの目的のために、マナをいたずらに消費する魔科学を憎んでいた。マナを守る——奴の行動の理由は、ただ、それだけだったのさ。奴には、他のことなどどうでもよかった」
「でも、クラースさんたちはダオスを倒したじゃないか！」口を挟んだのはディオだった。まるで、ダオスが正義であったかのような口ぶりが気に入らなかった。「それは、ダオスが悪い奴だったからだろ⁉」
「それは見る者の立場によって変わる」
ディオは首を捻った。「どういうこと？」
「いずれわかるさ。ダオスについてもっと詳しく知りたければ、クレスやミントにも訊くがいい。君達はいずれ再び時を越える時が来る」
「え？」
「この時代には、精霊は四人しかいない。他の精霊たちは休眠期だからな」クラースは微笑ん

だ。「さあ、これを渡そう」
そう言ってクラースは、掌大のプレートをテーブルに置いた。旋風をデザインしたような模様が刻まれている。
「これは『風の紋章』だ。村の北東にローンヴァレイという谷がある。そこに風の精霊シルフがいる。会って、望みを叶えるがいい。管理人にこれを見せれば通してくれるはずだ。シルフが力を認めれば姿を現すだろう。他の精霊は、シルフが力を認めれば姿を現すだろう」
メルはプレートを手にした。「管理人、ですか？」
「行けばわかるさ」
訝しむメルに、クラースは悪戯っぽい笑みを投げかけた。

「アーチェさん!?」小屋から出てきた《管理人》を見て、メルは驚きの声をあげた。「どうしてここに？」
「どうして、ってあたしん家だからにきまってるじゃん」面倒くさそうにアーチェは言った。
「んで、なに？　てゆーか、あんたたち、誰？」
ディオはメルの服を引いて、少し離れた場所へ下がった。
残されたクルールがアーチェを見上げ、アーチェもクルールを見下ろす。一人と一匹は、なぜか見つめあっている。

（メル、あれはオレたちの会ったアーチェさんじゃないよ）ひそひそとディオは言った。（この時代のアーチェさんなんだよ）

（あ、そうか）

アーチェとクラースは同じ時代の人間である。いても不思議はない。

（だけど……エルフって本当に歳取らないのね）

メルもディオも、そのことをいまさらながらに実感した。

クルールと見つめあうアーチェは、童顔といい、ポニーテールにしたピンクの髪といい、四〇八年で出会った彼女と全然変わるところがなかった。

（どうする、メル？）

（余計なことは言わないでおきましょ。必要ならクラースさんが話すだろうし）

ディオは頷いた。

再び近づくと、やはり胡散臭そうな目を向けられた。何となく、やさぐれている感じがする。

「あの、これ……」メルは『風の紋章』をアーチェに渡した。

「ふーん……あんたたち、クラースの知り合い？」

「そんなところです」

「じゃ、こっち」

言うと、アーチェは紋章をメルに投げて返し、さっさと歩き出した。メルとディオ、そしてクルールはその後につづいて、家の裏へと回る。そこは左右に切り立った崖がそびえる、谷へと続く入り口で、鉄の格子が遥か空まで続いていて、片開きの扉には鍵穴のない鍵が掛けられていた。

アーチェはその鍵を軽く指で弾いた。すると鍵はたちまち蛇に変わって彼女の手首に巻き付いた。

格子扉を開けてアーチェは中へ入り、二人と一匹も後に続いた。見上げると、空が細い線のように切り取られて見える。どのくらいの高さがあるのか……上の方で、風が吹き抜けるときに出す音がした。

「まったくクラースの奴、こんなめんどくさいこと人に押し付けて」アーチェがそうぶつぶつ言うのが聞こえた。「自分でやれ、っての」

「あの……」とメル。

「んあ？」

「アーチェさんが、この谷の管理人なんですよね？」

「そうよ。クラースの、バ・カ、に押しつけられたの」

「管理人、って何をしてるんですか？」

「聞いてないの？」アーチェの瞳が疑いの色を帯びる。「あんたたち……」

「いえ、その！」メルは慌てて言った。「大変なんでしょうね、こんなこと任されて」
「まったくよ……魔法素収束点の監視なんて、自分がやれっての！」
「でも、見張ってないと、ねえ……」
「そうなのよねえ。ほっとくとどっかの間抜けがまた『魔科学兵器』を造ろうとするに違いないからマナを制御する、ってクラースの考えはわかるんだけどさ。でもマナはエルフにとっちゃ命綱みたいなもんじゃん？　それを同族のあたしがこうして制限するってのは、なーんか裏切り者みたいで嫌なんだけど……ミッドガルズのことを思うとね」
「ダオスがやったって言われてるけど、あれって本当は魔科学兵器の『事故』なんですって？　クラースさんがそう仰ってました」
「あいつ、あんたたちにそんなことまで話したの？　へえ、なんだか知らないけど、見込まれてるんだ」
「でも、実際にどうやってマナを制御してるのかは教えてくれなかったんですよ。管理人に聞いてごらん、っていって」
「……んにゃろ、あたしを試してんな！」アーチェは握り拳をつくると、ぷるぷると震えた。「いい？　よく聞きなさいよ？　原理は単純。この世界にはマナが集まり易い場所がある、ってのは知ってるよね？」
本当は知らないのだが、メルは、さも当然であるといった風に頷いた。「そこを魔法素

収束点、って呼んでるんですよね？」
「そうそう。集まり易いから精霊がいたのか、精霊がいたから集まり易いのかは知らないけどさ。とにかくクラースは、契約した精霊を全部解放したのよ。で、その時出した条件っていうのが、マナを積極的に集めて、大気中の濃度を下げろ、ってこと」
「じゃあ、クラース様——こほん……クラースさんは、今はもう召喚術は使えないんですか？」
「だと思うよ。でも、精霊たちの声は相変わらず聞いてるみたいじゃん。《刺青》消してなかったでしょ？」
「はい」
「マナに異常があれば、すぐにクラースにも分かるってわけ」
「マナって、そこまで用心しなくちゃだめなんですか？」
「あたりまえじゃん」アーチェは鼻を鳴らした。「一応、大戦で使われたような『魔科学兵器』を造るのは条約で禁止されてるけど、いざ戦争になったら、どいつもそんなもの守るわけないいんだから。実際、アルヴァニスタの連中も、ミッドガルズで、その威力は見ちゃったんだし。だから、どうあがいてもそんな物を造れないように、造っても使えないように、マナの濃度そのものを下げちゃえ、っていうのがクラースの考え。もちろん頭の固い王様連中にそんなこと提案したって聞き入れるわけないから、勝手にやってることだけどね」
「アーチェさんも協力してるんですね」

「押し付けられてるの」憮然としてアーチェは言った。「マナが濃いから怪物連中がうようよ集まってきて見張るのも大変よ。炎の洞窟や水の洞窟は、イフリートやウンディーネが監視の方もやってくれるからいいんだけどさ。ここのシルフは優しいから——あ、そういえば、あんたたちは何を願うの？」
「ちょっとした呪いを解いてもらいに」
「ふうん……ま、がんばってね」アーチェは立ち止まると、谷の開けた場所の丁度向こうの崖にある洞窟を示した。「あそこが風の谷への入り口。奥にある門に紋章をかざせば中に入れるから」
「ありがとうございます、アーチェさん」
「無理はしないことよ。命は一個しかないんだからさ。——んじゃ！　生きて戻ったら、もう一度、寄ってよ。お茶くらい出すからね」
「はい」
メルは頭を下げるとディオとクルールを従えてアーチェから離れ、洞窟へと向かった。
「すげえじゃんか、メル」歩きながら、こそっとディオが言った。「全部、自分から教えてくれたじゃんか」
「実はね」メルはジャケットを少しめくって見せた。そこには丈を折り込んだ『弁士』のチョッキがあった。「昨日、クラースさんの前でうまく喋れなかったから、今日は用心のために試

しにこういうことをしてみたの」
「じゃあさっきは《なりきって》たのかあ」ディオは感心したようだった。「こんなこともできるのか、オレたち」
「自分でもびっくりしてるのよ」メルは振り返り、まだ見送ってくれていたアーチェに手を振った。「わたしたち、本当にまだ、自分のことを何にも知らないんだわ」
『風の谷』は、谷といいつつも、実際には九層からなる地下迷宮だった。風と冠が付くだけあって、地下であるにも拘らず、空を飛ぶ敵が多いのには閉口した。相手の攻撃を待つしかない、という消極的な戦いが主になったからだ。
　この谷で、クルールは犬のような、狐のような姿に変化したが、使う魔法が風属性の魔法であったので、ほとんどが無効化されてしまうという羽目になったのも、戦いを長期化させる原因となった。
　結局、地下九層に辿りついたときには、迷宮に足を踏み入れてから八時間が経過していた。
「あなたたちが、精霊の試練に挑むものですね？」と風の精霊・シルフは、二人と一匹を見るなり言った。「クラース・F・レスターから話は聞いています。あなたたちの願いもわかっています。あなたたちの勇気をわたしに見せてください。それが真の勇気であれば、あなたたちの願いを叶えましょう」

シルフは美しい女性の姿をしていて、雰囲気は、ノルンに通じるものがあった。淡い水色の髪をして、彼女をそのまま縮小したような妖精を三人従えている。敵意を向けてくるでもなく、攻撃をためらわせるには十分だった。

「来ないのであれば、こちらから参りましょう」

シルフがそう言った途端、二人と一匹は小型の竜巻の渦に飲み込まれていた。式の詠唱も何もない。精霊とは、クルールや魔物たちと同じくそんなものは必要としない存在なのだ、とその一撃に思い知らされ、肌を裂かれる痛みが逡巡を掻き消した。

魔神剣、秋沙雨、虎牙破斬、真空破斬……『剣士』の持てる剣技の全てを使って、ディオは挑んだ。クルールには魔法は使わせず、素早い動きと小さいが強力な牙で妖精を狙わせた。

メルは回復・補助役に徹した。

各々が、それぞれきちんと自分の役割を果たし、二人と一匹は確実にシルフを追い詰めていった。そして――

「虎牙破斬！」

素早い上下からのコンビネーションが決まり、シルフはその膝を屈したようだった。

着地をしつつ飛び退きながら、ディオは内心で勝利に拳を握った。と、暖かい波動が背中から広がって、疲れが急速に消えていくのがわかった。

メルの唱えた回復の祈り・ファーストエイドの効力だ。いま彼女は、法術師の最下級職であ

る『ヒーラー』の衣装を着ている。『魔女っ娘の塔』では疲れを取るのにグミを使っていたのだが、効率が悪く、対アーチェ戦では使う暇さえもなかった、という反省を生かし、ディオは『見習い剣士』の上級職である『剣士』を、メルは『ヒーラー』を身に付けて挑んだのだ。
だが――シルフの体が揺らぎ、消えかかったかと思うと、次の瞬間、周囲から魔法素が集まり、傷をたちまち癒してしまった。
「くそっ！」
罵り、ディオは剣を腰溜めに構えた。魔神剣の構えと似ているが、そうではない。魔神剣は刃が下を向くが、今は刃は水平に向いている。真空破斬の構え――剣気を飛ばして、間合いの外から相手を斬る奥義である。
（この一回しかもう撃てない）腕の筋肉が軋む痛みをくいしばり、ディオは力を込めた。いくらファーストエイドで癒しても、気力ばかりはどうしようもない。（これで倒せなかったら、もう……）
ディオは腕もちぎれよ、とばかりに力を込め、剣を振り抜こうとした。と――
「お待ちなさい、ディオ。もういいのです。あなたたちの勇気は、十分に見せていただきました」
（信じていいのか？）
シルフを睨み付けたまま、ディオは迷った。

「ディオ、シルフのいうことは本当よ」メルの手が、そっとディオの腕に触れた。「クルールも元に戻ってるから」
それを聞いて、ディオはようやく力を抜いた。思わず息が洩れ、疲れた顔でそれでも笑って見せた。「へへっ、やばかったよ。あと一回しか撃てなかったからさ……」
「それでも、あなたは撃とうとしましたね？　メルのために。クルールのために」
ディオは照れて顔をうつむけた。どうも、こう真正面から誉められるのは慣れていない。
「さて、メル、ディオ」シルフは二人を優しく見つめた。「あなたたちの願い通りに、あなたたちの中で封じられている『心』を少し解き放ちましょう。わたしが解放できる心……それは『自由心』。人に強制されるのではなく、自分で全てを決める強い意思です。しかし『自由』とは『責任』を負うことでもあります。この心を取り戻したあと、この先のことを、もう一度、考えてみるといいでしょう。ここへ来ることを決めたのは、《理想のメルとディオになりきっている》あなたたちです。本当のあなたたちはどうしたいのか。それを考えてみるのです。それでも決心が変わらなければ……フレイランドにある『炎の洞窟』とベネツィア大陸の北の孤島にある、かつては『浸食洞』と呼ばれた『水の洞窟』を訪ねなさい。精霊・イフリートと精霊・ウンディーネにあなたたちのその勇気を示せば、新たな『心』を解放してくれるでしょう。――では目を閉じて……感じるのです……心の……解放……を……」
メルとディオは、体の奥の方で、何かが砕け、そこから小さな光が生まれ、それが明

るく輝くビジョンを同時に見た。光はやがて体中に溢れ、自分自身が光そのものとなって弾け、そうして次の瞬間には恐ろしいほどの勢いで光が逆流して、再び自分となったのだった。だが、ひとつだけ大きく違っていたことがあった。それは、目を閉じれば胸の奥に、小さな、だが、消しようのない強い光を見ることが出来るのだった。

「あなたたちは『自由心』を取り戻しました」とシルフは二人に告げた。「《なりきる》ことも違ってくるでしょう。これまでは、あなたたちが衣装に《着られて》いました。しかしこれからは、あなたたちが衣装を《着て》いくのです。やがて《なりきる》相手の考え、人生までをも理解できるようになったとき、あなたたちは、自分たちの中で眠る本当の力を導き出すことが出来るようになるはずです」

メルとディオは頷いた。

「時の子供たちよ……あなたがたに、幸、多からんことを……」

「！」

突風が吹き荒れ、メルとディオは巻き上がる土埃を避けるために顔をかばった。

そうして風が収まったとき、シルフの姿は、もう、どこにもなかった。

自分の意思で決めるということが、こんなに『怖い』ものだとは、メルもディオも考えたこともなかった。

「どうしよう」
「どうする」
と自らに問い続けて、すでに二日が過ぎている。
『風の谷』からクラースの家に戻ったその夜まではなんでもなかった。
だが、その夜更け、メルとディオはシルフに言われたように、これから先どうするのかを考え始めてから、すっかり調子が狂ってしまっていた。
考えることなどなく、初めから結論など出ているはずだった。自分を取り戻せなければ、やがて精神は崩壊し、両親を悲しませることになる。何もしないよりはした方がましだ——そう決心し、旅立ったはずなのに、こうして自由に考えることが出来るようになってみれば、もっと別の方法があるのではないか、遠い、時間すらも越えた異国の地で果ててしまったら、その方が両親は悲しむのではないか、など様々な思いが渦巻いて、そこから一歩も抜け出せなくなってしまったのだった。
だが、メルとディオはクラースやミラルドに相談をしようとはしなかった。それどころか、互いの意見を聞きあうこともしなかった。初めての自由意思の大決断は、どうしても自分だけで決めたいという思いが、それぞれの胸の内にはあった。
その考えこそが、すでに以前の二人ではなかった。それまでなら、すぐに助言を求め、さもそれを自分の意思であったかのように言い、自分でもそう信じていただろう。

しかし、目覚めた心がもはやそれを許さなかった。

双子はひどく煩悶している様子だった。食事もほとんど取らず、日に日にやつれていった。

おかげでクルールの世話は、クラースがみる羽目になった。ミラルドは学校の授業もあって昼間、忙しいのだ。「なんで私が……」とぶつぶつ言いながらも、村の中を一人と一匹で仲良く散歩している姿がよく見かけられるようになり、クルールがあちこちを指して、「うきゅ？」とか「きゅきゅ？」とか言うのに、いちいち頷いたり、「これはティアの花といってな……」などと話しかけている様子が見られた。

双子がようやく深い思いの底から這い上がってきたのは、『風の谷』から戻って、五日目のことだった。

「決めたよ」と言ったディオの顔は、頬がこけて目の下には隈が浮いていたが、じつに晴れ晴れとして、笑みすら浮かんでいた。「オレ、このまま自分を取り戻す！」

「わたしも、このまま旅を続けます」といったメルの顔もまた、やつれてはいたが満ち足りていた。「ディオがそうするからじゃありません。ディオがどうあれ、わたしは続けるつもりでした。でも……いっしょですごく嬉しい」

そう言って微笑んだメルを見たクラースとミラルドは、胸を爽やかな風を吹き抜けていくのを感じ、我がことのように二人の決断を嬉しく思ったのだった。

やると決めた二人の行動は迅速だった。翌日には『水の洞窟』へと出かけ、四日後にはウ

ンディーネに自分たちの力を認めさせ、新たな心『平常心』に目覚めて戻り、たった一日休んだけで、フレイランドへと飛ぶと『炎の洞窟』を五日かけて攻略し、イフリートに『闘魂』を解放してもらったのだった。

そうして、クラースからこの時代最後の迷宮『大地の洞窟』へ入る許可をえたのが三日前である。

『大地の洞窟』は十四階層もあり、これまでで一番深い迷宮であったので、メルとディオはすでに三度これに挑んでいるが、いまだ最終階層には辿りつけていない。

一番最近の挑戦も十階層止まりで、あとは『ウイングドブーツ』という簡易転移魔法のかかったマジックアイテムで逃げ帰るしかなかった。だが、二人はその決断に腐ったりはしなかった。逃げ帰ることも《自分で決めたこと》だからだ。誰に恥じる必要があろう。

しかしある日、ディオは、ブラッククローという魔物に深手を負わされて戻ることになった。ブラッククローは、ダオスが闇の世界から召喚した怪物の生き残りである、と言われていて、この世界の法則には属さない生物である。鋭い爪には猛毒があり、ディオはこれを食らってしまったのだった。

その日は、良く晴れた穏やかな午後だったが、メルとディオが、クルールに背負われて転がるようにして辿りつき、村は大騒ぎになった。

メルの方は極度の疲労で気を失っているだけだったが、ディオの方は傷が深かった。おそら

くは、なんとか転移したものの、そこで力尽き、残ったクルールが二人を助けたい一心で村まで運んだのだろう。クルールの足の裏の肉球は擦れて血だらけになっていた。

二人と一匹はすぐにクラースの家に運ばれた。

「ミラルド、毒消しをもってこい！」みるみる組織が腐っていく様子を目の当たりにして、クラースが叫んだ。「くそっ！　進行が速すぎる！　こんなとき、ミントがいれば……」

クラースは、ありえない望みを口にした。聖女ミント・アドネード――偉大な法術師である彼女がいれば、こんな毒などたちどころにして消してしまえるのに――そのことだった。

だが、この時代、法術師はまだ数える程しかおらず、辺境のユークリッドにおいては、クラースとミラルドを除けば、その存在すら知るものはいなかった。

「わたしが……やります……」騒ぎのせいで気がついたのか、メルが、自分もまだ倒れそうだというのに立ち上がった。「クラースさん、すみません……クラースさん以外は、ここから……」

「わかった。だがミラルドは大丈夫だ。未来のことは大概話してある」クラースはメルが頷くのを見ると、集まっていた村の衆を向いて手を叩いた。「さあさあ、皆、ちょっと出てくれ。彼は大丈夫だ」

人払いが済むと、メルは法術師のひとつであるクレリックの衣装を着た。

「そうか！」クラースは手を打った。「《なりきる》のか」

メルはにっこりと微笑むと、青い顔のままディオの側に立ち、解毒の祈り・アンチドートを唱えた。光がディオの体を包み、腐敗が止まるばかりでなく、傷がたちまち癒えるのを見て、クラースは感心した。

本当に最後の気力を使い果たしたのだろう。メルは微笑んだまま再び倒れ、ディオ共々、三日も目を覚まさなかった。

その間、クルールはずっと二人の側にいた。足に包帯を巻いて、ときどきはクラースと共に散歩をすることもあったが、それ以外の時間は、常に彼らの側についていた。

だから、目を覚ましたとき、ディオが最初に見たのは、ベッドの縁から朝日よろしく頭と目だけを出して自分を見ていたクルールの姿だった。

「よお」

手を伸ばし、頭を撫でると、クルールは「うきゅ」と短く鳴いて部屋を出ていき、戻ったときにはミラルドを連れていた。

じきにメルも目を覚まし、それから数日は、ミラルドが授業を休みにして、世話をしてくれた。

ある日の午後、ディオは彼女に尋ねたことがあった――精霊との契約を解除した今、クラースは何をしているのか、と。

日々の忙しさに紛れて忘れていたのだが、アーチェから、クラースが精霊を解放したことを

聞かされたとき、ぜひ訊いてみよう、と考えたことを思い出したのだった。
「いまはね、マナ以外のエネルギーの研究をしているの。あの人も本当、異端な研究が好きで困るわ」ミラルドは、ふふ、と笑った。「マナみたいな万能エネルギーがあるのに、遥かに効率の悪いほかのエネルギーの研究なんかしたって、誰も見向きもしないのにねえ。でも、時流に乗っているあの人なんて想像もできないけど。――あ、これは内緒よ」
ミラルドはいたずらっぽく微笑んだ。
ディオは、未来でその研究の成果を発表するのはミラルドさんなんですよ、と言いかけ、メルが目で制しているのに気がついて、言葉を飲み込んだ。
「どういうことだろう」
その夜、メルとディオは、その矛盾について話し合ったが、結論はでなかった。研究者と発表者が違うという問題は、非常に繊細であり、未来のことでもあったので、クラースに問うことははばかられた。
だが、ひとつわかったことがある。どうやらクラースは、後の世において、魔法素が消えることを予見していた節がある、ということだった。
「本当にそうなら、すごい洞察力だよな」とディオは感心した。「マナの濃度を低く押さえるのも、『魔科学兵器』が使えないように、ってことの他に、今のうちから皆を少ないエネルギーに慣らそう、って考えなのかもよ」

「クラース様だもの、十分ありえるわ」とメルもディオの考えに同意した。
「でもさあ、なんでマナは消えたのかなあ……あの《大消失》さえなければ、パパが学会から馬鹿にされることもなかったのに」
「そうね……」
《大消失》について、クラースの意見を聞きたいという思いはあった。だが話すわけにはいかなかった。なぜなら、彼がそれを知れば、歴史が変わるほどの『なにか』があるに違いない、と思えたからだ。
この一連の疑問に関しては、メルとディオは、口をつぐむことに決めた。
そうして、不覚をとってから七日後。
メルとディオ、そしてクルールは完全に回復した。
再び挑むは、精霊・ノームの待つ『大地の洞窟』である。

「じゃあ、行ってくるね！」ディオは元気よく言った。「今日こそ、ノームにオレたちの力を見せつけてやる！」
「ああ、気をつけてな」食後の紅茶を手にクラースは応えると、にやりとしてクルールに視線を落とした。「クルール、二人をしっかり頼むぞ」
「うきゅ！」

任せておけ、と言わんばかりに、クルールは短い手で自分の白い毛皮の腹を叩き、ディオは、調子に乗るな、と軽く頭をつついて、メルに笑われたのだった。
「それじゃあ、行ってきます」とメルがもう一度挨拶をして、二人は家を出て丘を下って行った。
「今日はどう攻める？」背中に飛びついてきたクルールを肩車しながら、ディオは訊いた。
「この間のことを考えると、法術師系は外せないよな」
「そうね。でも、そうすると、わたしは戦力としては当てに出来ないんだから、ディオが守ってくれないと。『侍』は素早くていいんだけど、布服じゃブラッククローの爪は防げなかったもんね」
「だとすると、やっぱり剣士系かな。鎧と盾があるからな」
「それじゃあ、あれを着てみれば？　『剣豪』ってやつ。もう着られるんでしょ？」
「多分、大丈夫――あれっ？」
「なに？」
「あの、村の入り口のところに立ってるのって、パックじゃないか？」
「あ、本当だわ。……何してるのかしら？」
「怒られたんじゃないの？　泣きそうな顔してるぜ」
「ディオじゃあるまいし」

「ちぇ。……おーい、パック！」
ディオが呼びかけると、パックは声に振り向き、二人と一匹を認めると暗かった顔を輝かせ、脱兎のごとく駆け寄ってきて、体当たりとしか思えぬ勢いで二人にぶつかった。思わず、ディオもよろけたほどだった。
「ど、どうしたんだよ、パック」
「お兄ちゃんっ、お姉ちゃんっ」あげた顔は、泣きそうになるのを懸命に堪えていた。「僕の宝物を取り返してよっ！」
「宝物？——ああ、あの樫の木箱に入ったやつか」
パックはこっくりと頷いた。
以前、冒険の合間にパックの家に招かれたとき、一度見せてもらったことのある箱を、ディオは思い出した。
「元気なのはいいけど……変なものを拾ってきて大事そうに取っておくのには困ってるのよ」
と少年の母は言い、メルは、わかります、と同意したが、ディオは、男のロマンだよな、と少年と意気投合したのだった。
「あの宝箱が盗まれたのか⁉」
パックは頷いた。「三角帽子を被った変な奴だった」
「……それって、クレイアイドルじゃない？『大地の洞窟』でわたしたちの姿を見て、逃げ

出したのがいたの、憶えてない？」

「あれか！　あの人形みたいな奴！」

「そいつだよ！」パックはディオの服をぎゅっと握った。「お兄ちゃん、取り返してよ……。悔しいけど、僕じゃ『大地の洞窟』なんて」

　ぽたり、とうつむいたパックの靴に涙が落ちた。

「よし、わかった！」ディオはパックの肩を力強く掴んだ。「オレが取り返してきてやる！」

「ちょっとディオ！」メルはディオの耳をぐいと引っ張って口を寄せた。（だめよ！　歴史が変わるかも知れないでしょ!?）

（なんでだよ！　たいしたことじゃないだろ!?）

（もしパックが自分でそれを取り戻すことが、将来、偉大な冒険者になるきっかけだったらどうするのよ!?）

（んなこと知るか！　目の前で困ってる友達を助けないなんて『男』じゃないぜ！）

　ディオはメルを振り払うと、パックの前にしゃがみこみ、その鼻をつまんだ。

「大丈夫だ。オレが絶対、取り返してきてやる」

「うん！」

「よし。男と男の約束だ！」

　二人は拳の甲を打ち合わせて誓いを立てた。

パックは村の入り口までついてきて、二人と一匹の姿が見えなくなるまで見送っていた。
「ディオ……性格、変わったんじゃない？」村に近い茂みの中で、ディオがウイングパックからレアバードを解凍するのを側で見ながら、メルは訊いた。「なんか強引」
「そうかな……」シートに跨り、エンジンの調子をチェックしながら返した答えはどこかおざなりだった。「自分じゃよくわからないけど。――よし、問題なし。乗れよ！」
「絶対、変わった」メルはディオの後ろに体を滑り込ませて、ベルトを締め、背中にクルールを固定してから、ディオの腰にしっかりと腕を巻き付けた。「あーあ。なんだかなあ……」
「なんだよ……変な奴。――いくぜっ！」
スロットルを全開にして急上昇をかけると、そのまま一気に加速する。
レアバードは、たちまち空の小さな一点となった。

「どうだっ！」
顔を出した時を狙って放った紅蓮剣――剣気による大気摩擦で炎を起こし、それを剣に纏わせて投げつける奥義――が、ノームに見事に命中した。
一見したところ、ノームは四体いるように見えるが、実際はそれでひとつの体のようだった。ばったりと倒れ（それでも地面からは抜けなかった）、不定形生物のようにでろりと広がったが、すぐに前の形を取り戻すと、揺れながら起き上がった。

「イタタタ……まいったよ～ん」
白い筒のような四つの体を震わせて、精霊・ノームは降参した。
のんびりとした性格そのままに、攻撃ものんびりとしたもので、一度地面に潜るとなかなか姿を現さず苛々させられたが、逆にそれは回復のチャンスでもあったので、戦い自体はそれほど厳しいものではなかった。
「それじゃ～願いをかなえるよ～ん。ボクが解放できるのは～『感謝の気持ち』。大地の実りに感謝して～綺麗な水に感謝して～優しい風に感謝して～感謝の気持ちを忘れなければ～毎日が楽しくて素敵になるはずだよ～。じゃあ、いくよ～ん」
メルとディオは目を閉じた。
すでに三度経験している。慣れたものだ。闇が砕け、光が広がって、そしてまた収束する。
そうして新たな心が解放されるのだ。
今度も同じだった。だが——
「あれ？」
メルとディオは、我知らず泣いていることに気がついて驚いた。
「うそ、なんで？」
胸に膨れあがる想いに涙が止まらなかった。それはこれまで閉じ込められていた、感謝の念だった。

パパ、ありがとう……。
ママ、ありがとう……。
あとからあとから涙は湧いてとまらず、ついには二人は互いを抱き締めて、わんわんと泣きながら、両親へ、ギースの町の人々へ、アーチェへ、クラースへ、ミラルドへ、旅の途中で会った人々へ、ノルンへ……そして、精霊たちへ、『ありがとう』と感謝したのだった。
そしてまた、これまで《なりきり師》としてこなしてきた仕事の数々が蘇り、人々が口にした『ありがとう』が、いかなる気持ちで自分たちに贈られたのかも、本当の意味で理解することができた。
「好きなだけ泣くといいよ～ん」ふらふらと揺れながら、ノームは全てを受け止める大地の優しさでいった。「恥ずかしいことなんかないんだよ～ん」
メルとディオは泣き続け、そうして、ようやく涙がおさまったとき、二人の心は古い皮が一枚ぺろりと剝け落ちたかのように、晴れやかだった。泣くというのが、こんなに体力を使うものだとは知らなかったが、こんなに気持ちいいものだということも知らなかった。メルもディオも、物心ついてから――いや、それ以前から、大泣きしたことなどない子供だったのだ。これが、悲しみや怒りの涙であれば、また違った感じがするのだろう、ということも、今の二人にはわかることが出来た。
「ありがとう、ノーム」心からの感謝をメルは素直に言葉にした。「本当に」

「いいんだよ～ん。感謝するのも気持ちいいことだけど～感謝されるのも気持ちいいよ～ん。がんばってね～ん」
「あ！　待った！」
地面に潜っていこうとしたノームを呼び止めたのは、ディオだった。彼の顔には涙のあとがくっきりと残っていた。
「な～に～？」
「あの、ちょっと聞きたいんだけどさ」どこか照れくさそうにディオは言った。「クレイアイドルがどこにいるか、知ってたら教えてくれない？」
「なんで～」
「オレたちが世話になってる村の子供がさ、クレイアイドルに大切な宝物を盗まれた、っていうんだ。偉そうに、取り返してやる、とか言ったはいいんだけど……ここに来るまでにも探したんだけど、見つからなかったんだ……」
「盗むこと～悪いこと～。その子供～宝物が戻ったらうれしい～？」
「もちろんさ！」
「じゃあ呼んであげる～。でてこ～い、クレイアイド～ル～」
ノームがそう言うと、洞窟全体が震えだし、メルとディオとクルールは互いを支えあわなくては立っていられなかった。揺れが続き、やがて壁の一角に大きな亀裂が走ったかとおもう

と、そこから小さな影がころりと転がり出た。

「あ！」

ディオは思わず声をあげていた。人形のような顔に緑の三角帽子——前に見た奴と同じ、クレイアイドルである。しかも、いっしょに転がり出したのは、間違いなくパックの宝物の入った樫の木箱だった。

「ひゃあ！」クレイアイドルは四回転してノームにぶつかり、ようやくとまった。地震も収まり、壁の亀裂も元通りになって塞がった。「いたたたた……あっ！　ノーム様っ！」

「ぽぴっと～いたずらはだめ～盗むのはよくない～」

ノームはディオに比べても身長は倍。クレイアイドルと比べれば四倍はある。クレイアイドルが少なからず、こののんびりした精霊を恐れているのは確かだった。

「ち、ちがいますっ！　これは人間の子供がくれたんですっ！」ぽぴっと、とよばれたクレイアイドルは箱にしがみついて首を振った。「オイラのですっ！」

「嘘つけっ！　パックは泣いてたぞ！」

「感謝の涙はいい涙～だけど悲しい涙はいけない涙～」

「ほら、ノームもこう言ってるんだ！　返せよっ！」

「う、うううううるさいっ！　卑怯者に、そんなことといわれる筋合いはないやいっ！」

ぴくり、ディオのこめかみが震えた。「ひ、卑怯者、だって？」

「そうさっ！　《なりきって》人の『力』を借りなきゃ、な～んにもできないくせに！　へっへ～ん、ひきょうもの～弱虫～くやしかったら、裸の自分でかかっておいで～」
「なんだとっ！」
「ディオ、だめっ！　挑発に乗らないで！　忘れたの？　『平常心』、『平常心』よっ」
「うきゅーっ！」クルールが跳ね上がって、拳を振りあげる。「きゅっきゅーっ」
「クルール！　ディオを煽らないでよっ！」
「よ・わ・む・し・さ・ん」べろべろっとクレイアイドルが舌を出した。
「あったまきたっ！　やってやろうじゃないかっ！」ディオの『闘魂』に火がついた。「勝負してやるっ」
「きゃーっ！」
メルは悲鳴をあげて、真っ赤になって顔を手で覆った。言うや否や、ディオが『剣豪』の衣装を脱ぎ捨てて、特殊皮革製のスパッツだけになったからである。
「これで、オレはオレのままだっ！　来やがれっ！」
「よーし！　やってやる！」
なぜかどこかで、カーンという鐘の音がして、それが合図となった。
ディオとぽぴっとは互いに突進した。
ディオの右が唸りをあげて、ぽぴっとの顔をめがけ、右上から撃ち下ろされる。

「！」
鈍い音がして、しかし頭を揺らされたのはディオだった。低い身長を生かしてパンチをかいくぐったぽぴっとに顎を突き上げられたのだ。
「くそっ！」
ディオの左拳が短く連打される。二発が命中してぽぴっとを下がらせ、そこへ直線軌道の右拳が発射される。
ばしっと小気味よい音がして、ぽぴっとは背中から倒れた。
しっ、と歯の間から気合いを漏らしてディオは突進し、ふたたび右の撃ち下ろしを狙った。
だが、それは罠だった。
素早く起き上がったぽぴっとは、懐にぴたりとつけると、超至近距離からディオの右腹に、弧を描く渾身の左を叩き込んだ！
（ぐあ……っ！）
びりびりとした痛みが、脇腹から全身に広がる。ぽぴっとがとどめの一撃を繰り出すべく、拳を握り込むのが見えた。
（こん……ちくしょうっ！）
痛みをねじふせ、ディオは、ぎゅん、と腰を捻り込み、肩を回し、全ての力を右拳に集め、ぽぴっとのこめかみめがけて撃ち下ろした。

「きゅーっ！」クルールが思わず顔を隠した。
互いの肉を激しく撃つ音が、洞窟内に大きく響いた。
「あ、相撃ち……？」指の間から見ていたメルは、ぽつりとつぶやいた。
ディオのパンチはぽぴっとのこめかみに見事に命中していたが、ぽぴっとの右拳もまた、ディオの腹に深々とめりこんでいたのだった。
ぐらりと二人の体が揺れて、地響きを立てて倒れた。
「先に立ったほうが勝ちだよ～ん」とノームが決めた。「どっちかな～」
「ディオッ、立ちなさいっ！」メルは思わず叫んでいた。彼女の『闘魂』にも火がついたようだった。「弱虫じゃないんでしょっ！」
ディオの裸の肩が、ぴくりと動いた。「そうさ……オレは……《なりきる》ことをしなくたって……強いん……だあっ！」
立った。
ディオが立った。
立ち上がり、両拳を高々と天に突き上げた。
「ディオの勝ち～」
ノームが宣言し、再びどこかで鐘が打ち鳴らされた。
ようやっと気がついたぽぴっとは、立ち上がるとディオの側に寄り、手を差し出した。

「おまえ、弱虫じゃなかった。悪かった」
「へへっ、気にすんなよ」ディオはクレイアイドルのぽぴっとと熱い握手を交わした。「おまえも強かったぜ」
何か二人の間に強い絆のようなものが生まれたらしい様子を見て、メルは小さく肩を竦めた。
（……男の子って、わかんない）
クルールは、取り戻すことの出来た樫の木箱を掲げて、いつまでも握手をしたままの二人の周りを、うれしそうに飛び跳ねていた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう！」
樫の木箱を抱き締めて、パックは本当にうれしそうだった。
パックは二人に、お礼だといって宝物の中から水晶をくれようとしたが、これは断った。
「もういっぱい『ありがとう』をもらったからね」
パックはきょとんとして、意味がわからなかったようだった。
「じゃあな、パック」
「うん！　ありがとう！」
少年は何度も振り返り、手を振った。母親が玄関で少年を迎え、メルとディオに気づいて深く頭を下げると、二人は連れだって家に入っていった。

「……オレたち、こういう仕事をしてきたんだな」ぽつりとディオが言った。「全然わかってなかったよ」

「うん……。よかったね、ディオ！　旅を続けることに決めて、さ！」

そう言って、メルが軽く肩をこづくと、ディオは腫れた顔で、にっと笑った。

「クラースさん、ミラルドさん、本当にありがとうございました」

二人と一匹は深々と頭を下げ、ミラルドを涙ぐませた。

——帰る時が来たのである。

『大地の洞窟』を攻略して戻ったその夜。二人の元にノルンが現れて、この時代で出来ることは終わったことを告げ、新たな時代への扉を開けるようになったことを教えたという。

「次にあなたたちが向かうのは、アセリア暦四三〇六年です。シルフ、イフリート、ウンディーネ、ノームは眠りに入り、新たな精霊が目覚めています。しかしその前に、一度、あなたたちの時代に戻るのがいいでしょう」

ノルンはそう話した、とクラースは二人から、今朝の食事の席で聞いたのだった。ミラルドは引き留めたがったが、クラースは首を振った。この子たちには、やるべきことがあるのだ。

クラースは二人のために、クレスたちへの紹介状を書いてやった。

「それで、あの……お願いがあるんだけどさ……」

おずおずと切り出したディオの『お願い』は、二人にとって、造作もないことだった。いまそれは圧縮されて、ディオのポーチの中にある。

「あの、クラースさん！」メルが一歩前に出て、手を差し出した。「あ、握手してください！」

「ん？　あ、ああ……」

クラースがその小さな手を握ってやると、メルは目に涙を一杯に溜めて微笑んだ。

「ありがとうございます！　一生の思い出です！」

そう言った彼女は、右手を握りしめ、それがまるで宝石か何かででもあるかのように、大事に胸に押し当てたのだった。

「クラースさん、それじゃ！」

「うきゅきゅっ！」

「メル、ディオ、しっかりやれよ！　クルールもな！」

「元気でね！」

ディオは大きく頷き、メルの肩を抱えるようにして、丘の道を降りていった。クラースとミラルドは動かなかった。村の入り口まで送ると言ったのだが、未練が残るから、と二人が断ったのだった。

やがて、村の外にある茂みから、一羽の巨大な鳥が飛び立ち、南東の方角へと飛び去っていった。

「……いい子たちだったわね」

「ああ」空を見上げながら、クラースはため息をついた。「だが、真実を知ったとき、私は恨まれるかも知れんな」

「大丈夫よ」ミラルドはそっとクラースの腕を取った。「きっとわかってくれるわ」

「そう願いたいものだな」クラースはミラルドの手を優しくさすった。「まあ、なにごとも……うまくまるくおさまって、めでたしめでたしとはいかないものだな」

ミラルドは微笑み、ふたりは寄り添って家の中へと戻った。

二人の背中で、扉は静かに閉じていった。

8　再び時を越えて

『太陽』の絵が、再び爆発的な光を発したのは、メルとディオたちがいなくなって、わずか数分後だった。双子たちがいなくなってしまったという虚脱感だけが残り、工房を出る気すらせず、ただ『時の扉』だという、絵を見つめていたエリックとファーメルは、突然の出来事に驚き、何が起きているのかまったく把握できなかった。ただ、光だけが強くなっていく。まるで、白い闇に飲み込まれていくようだった。だが、その輝きは、双子たちが消えたときと同じく、不意に消え失せた。そして、エリックとファーメルは、目の前の光景に我が目を疑うことになった。

「メル!?　ディオ!?」

絵を背中にして二人の前に立っていたのは、確かにメルとディオ、そしてクルールだったのだ。

「パパ！　ママ！　ただいま！」

そう言っていきおいよく、胸に飛び込んできたのは、間違いなくディオだった。メルはそん

な彼をいつもの目で「甘ったれ」と評しながら、自分も同じようにしたそうにしている。
「ど、どうしたんだ？」
エリックはディオの肩を掴み、前よりもたくましくなっている体に違和感を覚えながら訊いた。ファーメルはまだ何が起きているのか把握できない様子だった。
「なにかあったのか？　出発したばかりじゃないか」
「え？……なに言ってんだよ。オレたち、家に帰ってくるの一カ月ぶりだぜ？」
「いや、しかし……」
「……時を越えるとはそういうことなのです」
ノルンの声がして、全員が、マーテル像を振り向いた。彼女は前と変わらぬ姿でそこに浮いていた。
「ディオたちは確かに過去の時代で一カ月の時を過ごしました。しかし『錨』を下ろしたのはあくまで出発したその時間なのです。エリック。ファーメル。この子たちがどの時代で何年過ごそうと、あなたたちには数分のこととしか感じられないでしょう」
「なぜ、それを初めに教えてくれなかった⁉」ディオを抱きながら、エリックは怒鳴った。
「ひどいじゃないか！」
「聞かれなかったからです。しかし、謝罪しましょう。あなたたちが《時空転移》のなんたるかをよく知らないのだということを、わたしは失念しがちなのです。わたしにとっては、あた

りまえのことでしかありませんから」
　そう言われては、返す言葉もなかった。
「もう済んだのか？　すべて終わったのか？」
だが答えたのはノルンではなかった。答えは腕の中から返った。「まだだよ、パパ」
「まだ？」
「うん。今度はまた別の時代にいくんだ。アセリア暦四三〇六年に」
「せっかく無事に帰ってきたのに⁉」叫ぶような声はファーメルだった。「また⁉」
「ママ⁉」
「こんな絵があるから！」
「ファム！」側に置いてあった油絵の篦を掴み、絵を切り裂こうとした妻をエリックは抱き止めた。「よせ！　ノルンの話を忘れたのか⁉　この子たちを廃人にしたいのか⁉」
「だって！……だって……」
　エリックはすすりなく妻の背中をさすってやった。その手から、篦が落ちて床の上で乾いた音を立てた。
「この『星』の絵に、次の時代への《時の扉》を開いておきます。メル、ディオ……この先も、どうするかはあなたたちの自由です。ここでやめるのも、あなたたちの選んだ結果――」
「やめません」胸を張ってメルが言い、ディオも大きく頷いた。「決めたんです」

ノルンは、ふっと目を閉じ、どこか寂しげな微笑みをたたえて、静かに陽の光の中に溶けて消えた。
エリックはファーメルを椅子に座らせ、その脇に立って、どこか様子の違った双子たちを見つめた。
「ファム、ごらん？　何か違って見えないかい？」
「わからない」ファーメルは首を振った。「わかりたくもないわ」
「パパ、ママ！」ノルンがいなくなった工房を、二人と一匹は駆けてきた。「おみやげがあるんだ！　パパにはこれ！」
そう言ってディオがポーチから取り出したのは、二冊の本だった。『魔法理論Ⅰ、著・ミラルド・ルーン』と『召喚術の基本的式構造、著・クラース・F・レスター』の、著者直筆のサイン本である。
目にした途端、エリックは狂喜してほとんど気絶しそうになったが、ファーメルのことが、なんとかはやる気持ちを抑え込ませたのだった。
「ママにはこっちね。——よっ、と」メルがポーチから出して解凍したのは、巨大なタペストリーだった。「アルヴァニスタで買ったの。正真正銘の、エルフ族の織物なのよ。ママが絶対好きだって思ったから、買ってきちゃった」
クルールは、どこに隠していたのか、小さな林檎の実がなっている枝をファーメルに差し出

した。
「きゅー？」
小さく嗚咽を洩らし、彼女は二人と一匹を抱きしめた。
「……おかえり」

メルとディオは、それから五日ほど家にいて、その間ずっと、四二〇三年で起きた出来事を、身振り手振りを交えて本当に楽しそうに語った。
ファーメルはそれをききながら、スケッチをして、幾枚かの絵の構想を得たようだった。どんな絵なのかは、完成するまで見せるつもりはない、とはっきりと言われてしまったので、エリックは諦めるしかなかった。
一日、二日はあっという間に過ぎた。
その間にも、家族で町に出かけて食事をしたり、新しい衣装を手に入れたり、と忙しくすごし、遂にはファーメルも認めることになった。
「確かにあの子たちは変わったわ」ファーメルもため息をついた。「それもいい方向に。本心は、もう危ないことをしてほしくはないけど、あの子たちが、本当の自分の意思で決めたことなら、それを尊重するわ」
それをきいて何より喜んだのは、メルとディオだった。ふたりは、自分たちが再び旅立つこ

とがファーメルをひどく苦しめているとわかって、困っていたのだった。それでも行くことは決めていたので、こっそりと出て行き、今度はすべての《試練》を終えるまで、帰らないでおこうかとまで話し合っていたのだった。
楽しい時間はあっという間に過ぎる。
五日目の朝、二人と一匹は再び工房で絵の前に立った。今度は『星』だった。
「じゃあ、行ってくるね――でも、パパとママにはきっとまた数分のことなんだよね」
メルと手を取り合い、ディオはそう言って笑った。
「また、おみやげ期待してて。おみやげ話もね」
「うきゅきゅっ！」
光に包まれ、双子たちが再び時を越えたようだった。
「待っていよう」妻の手を取り、エリックは絵を見つめた。「本当に、すぐに帰ってくるのだから」
応えの代わりに、ファーメルの指がエリックの手を強く握った。
時代が変わっても、転移そのものの感じは前と変わらなかった。
ディオとクルールは今度もやっぱり時間酔いをしたし、工房の窓から見える外の様子もほとんど変化はなかった。

「帰りは酔わなかったのになんで？」とメルは訊いたが、返ってきたのは、「オレが知るか」だった。
「ノルン、出てこないね？」
「勇者クレスの生まれた、トーティス村にいくって、オレたちがもう……うぇっ……し、知ってるからだろ……？」
「そっか」
メルは窓に寄って外を眺め、まだ見ぬ村に思いを馳せた。
トーティス村は、双子の時代では、ミゲールという名の都である。ユークリッド大陸は、中央付近を東西に走る山脈の北と南で、発展の仕方がまったく違っていた。ユークリッドの都は、商業と観光、それにアルヴァニスタに並ぶ学術の都として発展したが、ミゲールの都は、中央にある教会に『ユニコーン教団』の本部が置かれ、南にある聖なる森への巡礼者が多く訪れる一大宗教都として発展したのだった。ミゲールの都は法術師が多くいることもあって、世界各地から病を直してもらうために人が集まる地でもある。メルもディオも《なりきり師》の仕事で一度行ったことがあるが、不思議な静謐さが漂う都だったと記憶している。
（そういえば、ほんとうに酒場もカジノもなかったわ）クラースに聞いたクレス達の話を思い出して、メルはくすりとした。（クラース様の言った通り、真面目な都になったんだわ）
この時代では、クラースほど心躍る出会いはないだろうとわかっていたが、それでも『聖

女』と呼ばれる六勇者の一人、ミント・アドネードに会えるのは楽しみだった。
しかし、今度も結局、出発はディオとクルールが回復するのをまったので、時間は午後を回ってしまった。トーティス村はユークリッド大陸にあるのだから、四二〇三年と同じルートを取ればよかった。
オリーブ村で一泊して、アルヴァニスタに向かい、そこでまた一泊して、ユークリッドへ。オリーブ村も、アルヴァニスタ王都も、クラースの時代から百年の時間を感じさせない変化のなさだった。もっとも、二百年後でもほとんど同じ姿を保っていたのだから、当たり前といえば当たり前だったが。
比べて、大きく様変わりしていたのがユークリッド村だった。
様子を見たくて寄り道し、遥か高みから見ただけだったが、あののどかな村の面影は、どこにもなかった。丘は削られて平らにならされ、そのうえに街と王城が魔法のように出現していた。城の中央には建設中の闘技場が見える。五十年後にあの場所で起こる悲劇を、メルもディオも知っている。それは『聖勇者物語』の中でも最も涙を誘う場面だ。
他にも、ユークリッド大陸のあちこちには、周囲が黒く焦げた巨大な穴をいくつも見ることが出来た。二人の時代では、穴自体は残っていてもすでに植物で覆われていたり、穴そのものが埋め立てられている『遺跡』である。魔人ダオスが、勇者たちを抹殺するために時を越えて魔法を使い、巨大な隕石を幾つも降らせた跡だと伝えられていた。

話を聞いただけでは眉唾ものだったが、こうして生々しい跡を見ると、それもあながち嘘ではないのではないか、と思えてくる。

「でも、そんな呪文あるのか？」『遺跡』の上をゆっくりと飛びながら、ディオは言った。「隕石だぜ、隕石」

「わたし、何かの本で読んだことあるわよ」メルはディオの耳元で言った。「たしか『メテオ』とかいうの。でも、消費するマナが大きすぎるのと、エルフの体だと最盛期の年齢でも負荷に堪えられなくて、成功した人はいなかったはずよ。その簡易版の『メテオスォーム』って呪文なら、伝説上では、アーチェさんも使ってたはずだけど」

「ダオスは魔人だからな。なんでもありなんだろ」

　そうね、とメルが言って、その話は終わりだった。

　レアバードは山脈を越え、大陸を南下していった。下るほどに森が広がっていったが、やがて緑の間に小さな村が見えた。周囲には他に集落らしきものはないから、あれがトーティス村なのだろう。

　ディオは目立たぬように、村から少し離れた森の中へレアバードを下ろした。村には見張りの尖塔があったが、人が気づいてやってくる様子はない。レアバードをウイングパックに収納し、二人と一匹は、村と山脈を結ぶ街道に出て村に向かった。途中二人を追い抜いていった馬車は、車に一杯の木材を積んでいた。

村に着いて門をくぐると、新しい木材の匂いが、ぷん、とした。見回してみると、どの家も、建ててから一年も経っていないと思える新しいものばかりだった。

それもそのはずである。

トーティス村は、アセリア暦四三〇四年に、ダオス復活を目論んだ、ユークリッド独立騎士団——通称・黒騎士団の襲撃を受け、壊滅しているのだ。

そしてその事件こそが、村でただ二人生き残った、クレス・アルベインとチェスター・バークライトが、ダオス打倒に立ち上がるきっかけとなったのであり、六人の勇者たちの伝説の幕開けとなったのである。

「あ、教会があるわ」メルはペンキの色もまだ白い、立派な教会を指した。「あれが将来、法術師たちの本部になるのかな？」

「だな。……とりあえず、クレスさんたちの家を誰かに聞こうぜ」

「そうね。ええと……」

その時、不意に、藪の中から黒い影が飛び出して、クルールに激突し、クルールも、影も、共にひっくり返った。

「うきゅ～」

「きーっ」

「わ！　なになに？」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、捕まえてっー！」

そう声がしたときにはすでに、ディオが素早くその謎の『影』を捕らえていた。

それは、小さな猿とも鼠ともつかないような動物で、やたらと尻尾が長く、顔は可愛らしかったが、大きな目が油断なくきょろきょろと動いて、抜け目なさを感じさせた。

少年は息を切らして走ってくると、しばらくは喋れない様子で肩を大きく上下させていたが、やがて大きくひとつ息を吸うと、ありがとう、と言った。「サスケを捕まえてくれて」

「サスケってこれのこと？」ディオは捕まえた小動物をぶらさげて見せた。「これ、なに？」

「知らないの？　ブッシュベイビーだよ」少年はディオの手から、ブッシュベイビーという種らしい獣を受け取り、肩に乗せた。長い尻尾がくるりと首に巻き付く。「可愛い奴なんだけどさ、いたずら好きで困ってるんだ。――あれ？　お兄ちゃんたちも珍しい動物つれてるね。なんていうやつ？」

「さあ？」メルとディオは顔を見合わせて肩を竦めた。「名前はクルールっていうんだけどな」

「ふうーん……じゃあ今度、サスケと遊ばせてよ！　それじゃ！」

「あ、ちょっと待った！――なあ、クレスさんの家って、どこだか教えてくれないか」

「それなら、そこの橋を渡ってすぐだよ！　そうだ、その服も珍しいね！　今度、売ってるところ教えてよ！　じゃあね！」

少年はひとつ大きく手を振って、村の入り口の方へと駆けていってしまった。

「……この村は、余所から来た人を余り警戒しないみたいね」
ユークリッド村とは随分と違う雰囲気だ、とメルは感じた。子供はともかく、あの村で最初に話しかけた婦人なども、初めは口が重かったものだが（ディオには親しげに見えていたようだけれど）、ここでは大人も目が合うとにこやかに笑いかけてくる。
「クレスさんとチェスターさん以外は、全員、余所者だからじゃないか？」
「そういえばそうだっけ」メルはディオの説明に納得した。もしかすると誰が村人で誰がそうじゃないのか把握できていないのかも知れない「――おいで、クルール」
「うきゅ！」
お尻についた土を尻尾を振ることではらって、クルールは、一足先に歩き出したメルとディオの後を追った。
それにしても、大人の数に比べると子供が多いとメルは感じた。教会の前の広場では、十五人からの子供が遊んでいる。家の数を考えると明らかに多すぎ、子沢山の家庭でもあるのだろうかとも考えたが、よく見れば兄弟姉妹だと思える子は少なく、一人一人に繋がりのようなものは見いだせなかった。
村の中を流れる川にかかる橋を見れば、そのすぐ向こうに家が見え、ブッシュベイビーとかいう獣を連れていた少年の話では、そこがクレスの家のはずだった。
二人と一匹は橋を渡ると、その家の門をくぐり、扉の前に立った。

ディオが扉を叩こうと腕を上げるも、その拳は震えていた。無理もない。アーチェ、クラースと、すでに二人の勇者に会い、親しく口をきいたとはいえ、この扉の向こう側にいるのは、勇者の中の勇者——男の子であれば、誰でも一度は憧れる、時空の剣士・クレス・アルベインなのだ。

拳を閉じたり開いたりして、ディオは随分長い間逡巡していた。

(ほら、はやく)

肘で背中をつついた。ディオの心情はわかるのだが、メルとしてはこれ以上、待つのは嫌だった。《なりきり師》の衣装は、この時代では随分と奇抜なもののようで(ブッシュベイビーの少年もそう言っていた)、村に入ってからずっと見られていたのだが、クレスの家の前に立ってからは、ますます視線が集まってきていたのだ。

(で、でもさあ)

(もう!)

メルはディオの手を掴むと、そのまま扉へと叩きつけた——三回。

(痛えじゃんか!)

があっ、とディオは怒ったが、それはすぐに萎んでしまった。中から声がかかったからだ。

「鍵はあいてるぜー。勝手に入ってこいよ」

「ひ、ひゃい!」声が裏返った。

だが、メルは別のことに気を取られていて、それをからかうことはしなかった。（?……ずいぶん乱暴な話し方だわ。お芝居や戯曲のクレス・アルベインとは印象が違う感じ）
ガチガチになりながらもディオは取手に手をかけて、なんとか引いた。ほんの少しだけ、蝶番が軋んだ音を上げて扉は開いた。
「失礼します」
メルは言ったが、ディオは声が喉にからんだようだった。代わりにクルールが、うきゅ、と鳴いた。
玄関は、入ってすぐが大きな広間だった。そこには、八人はつけるような大きなテーブルが置かれていて、その左側の奥の席に、誰かが座っていた。だが、窓から入る陽の輝きが逆光になっているために、影としか見えなかった。すらりとした足を組んで椅子に浅く腰掛け、テーブルに肘を乗せ、軽く頬杖をついている。
「ん？　子供か？　どうした、親とはぐれたのか？」
低い、しかし優しさが潜んだ声だった。
メルは目を細めた。
その時、陽が陰り、テーブルの人物が、部屋の中に浮かび上がった。
「あっ！」
メルとディオは、思わず声を上げていた。

その青年は、クレス・アルベインではなかった。

後ろへと撫でつけた、青みがかった長い銀髪。時に涼しげな、時に氷のような光をたたえる、切れ長の瞳。白い肌に浮かぶ皮肉めいた微笑み——どれもが伝えられる通り。

「妖精弓の射手……」

ぽつり、とメルが呟くと、青年は表情を引き締め、立ち上がった。

「俺の未来での呼び名を知っているおまえたちは誰だ？」

斬りつけるような声だった。メルはもちろん、ディオまでもが迫力に呑まれ、彼の問いに答えることが出来なかった。

（この人が……）メルはごくりと息を飲み込んだ。（この人が……チェスター・バークライト……）

窓から風が吹き込み、青年の長い銀髪を、ざあ、と空になびかせた……。

〈つづく〉

あとがき

テイルズファンの皆さんも、そうでない方も、はじめまして。
結城　聖（ゆうき しょう）と申します。
普段から「ゲームが好きで～」と言っていたら、
「結城さん、テイルズ オブ ファンタジアって知ってます？」
　と担当さんから訊(き)かれ、
「知ってますよ～。ＳＦＣ(スーパーファミコン)版もＰＳ(プレイステーション)版もやりましたし、ＰＳ版の体験版も並んで手に入れましたから」
「じゃあ、今度、うち（スーパーダッシュ文庫）でそれのＧＢ(ゲームボーイ)版のノベライズを出すことになったんで、書きませんか？」
「マジですか!?　そりゃもう、ぜひ！」
「〆切(しめきり)は来月末（約二カ月弱）ですのでよろしく～」
「う……は、はい」

……ということで、書かせていただけることになったのでした。

さて、それからが大変でした。なにしろまずは、ゲームをやらなくてはお話になりません。

ナムコさんから借りたROMで延々とプレイ！　これがまあ、御世辞抜きに面白い！

テイルズと言うことで、最初は、ストーリー進行を追うだけにしておこう、と思って始めたんですが、ついついコスチューム集めに走ってしまいました。

この辺は、F C版ウィザードリーで目の色を変えて「村正、村正」と呪いのようにつぶやきながらグレーターデーモンをティルトウェイトで抹殺しまくって幻の名刀を集めていた私のコレクター魂を、憎いまでに刺激してくれるつくりです（え、ぜんぜん違う？　あの、それくらい熱中したということです。ハイ）。

それと平行して、さらなる肉付けを行なうための作業をしました。

まずは前作のおさらい。

これは、プライベートで遊び倒していたので、攻略本を読み返すだけであらかた思い出せましたが、とりあえず体験版もプレイ。

次に、キャラクターにさらなる肉付けを行なうために、これもナムコさんから借りたドラマCD（これがまた素晴らしい！　んで、慌てて買いに行ったけど揃わず……）を聞き倒しました。

そうこうしている間に、半月が過ぎて、GB版もなんとかクリアし、プロットを書いて提出

しました。
しかし、この時点で、とても一巻には収まらないことがわかっていましたので、
「あの～一巻じゃ終わりそうもないんですが……」
「じゃあ、上・下巻にしましょう」
そう、お許しを頂き、あとはひたすら書きまくり、上巻はなんとか完成したのでした。

さて、読んでくださった皆さん、いかがでしたでしょうか……？
ノベライズの場合、一番怖いのはやっぱりゲームのファンの人達の反応です。
なにしろ、愛が深い！
ちらりと見せてもらったアンケート葉書とかからも、それが実に伝わってきます。上巻で、人気の高いクラースさんとアーチェの二人を登場させてしまって、下巻は大丈夫か!?　と思わず心配してしまいます（いやいや下巻にも……）。
皆様、ぜひとも、感想をお送りくださいませ。

さてさて。
このあとがきを書いている五日後には、『テイルズ オブ ファンタジア～なりきりダンジョン～』が発売されます。

もちろん、発売日に買いに出かけますとも！　あ、プリンター……あれってまだ売ってるのかなあ。
んでもって、月末には『テイルズ　オブ　エターニア』が発売に！　それまでに下巻を書き終えて、心置きなくプレイするぞー！
それでは皆様、下巻の方も、よろしくお願いします！

二〇〇〇年　十一月　上旬

結城　聖

著者紹介

結城　聖（ゆうきしょう）

昭和四十年代生まれの千葉県在住。小学生の時、インベーダーゲームと出会って以来、ゲームとは切っても切れない生活を続けている。
他にも、ＢＡＴＭＡＮ、Ｘ－ＭＥＮ、ＨＥＬＬＢＯＹなどのアメコミ好き。ジャンル無節操な玩具コレクターでもある。今はプレモをかなり気に入っている。

松竹徳幸（まつたけとくゆき）

長崎県出身　工業高校インテリア科卒
キライな食べ物、酸っぱい食い物
キライな動物、足の多いヤツ足の無いヤツ
キライなタイプの人、クリエイターぶってるヤツ（髪の毛が黒くない人多し）
キライな仕事、線の多いもの
好きなゲーム、血が出るもの、自分がクモのゲーム

©藤島康介／NAMCO LTD.

ISBN4-08-630017-6

C0193 ¥495E

定価 本体495円十税

アセリア暦四四〇五年。ギース町では毎年『聖樹祭』が催される。
クレスたち「時空の六勇者」の活躍から百年の月日が流れていた。
双子のディオとメルは、子供たちによる劇『聖六勇者物語〜時空城の決戦〜』で、
クレスとアーチェの役を演じることになった。
しかし、役に〝なりきった〟二人は、
使えないはずの「奥義」と「魔法」を放ってしまったのだ!!
二人にそなわった不思議な力、〝なりきり〟。
そのルーツを巡る二人の旅が、今始まる…！